むなかた電子博物館

# 紀要 2014

作成
むなかた電子博物館運営委員会

# 目次

巻頭言　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

沖ノ島を起点とする社殿・古墳の直線配置研究Ⅲ　・・・・・・・・　3

田熊石畑家遺跡の調査報告書
～いせきんぐ宗像シンポジウム 2014 講演会発表より～　・・・　16

「むなかた電子博物館」の１０年　・・・・・・・・・・・・・　50

座談会
　むなかた電子博物館の１０年　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　64
　「北斗の水くみ」写真展を中心に　・・・・・・・・・・・・・　89

インタビュー
　職業としてテープ起こしを解き明かす　・・・・・・・・・・・・・　111

むなかた日和

　自由の森遊歩道が完成　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　120

　宗像市の花「カノコユリ」その固有種の繁殖　・・・・・・・・　126

　北斗の水くみを茶の間で体験　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　135

　いせきんぐ宗像＆宗像高校文化祭ツアー・・・・・・・・・・・・・　137

　福永晴帆日本画展　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　144

　蚕とクワコ展　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　147

　海の道むなかた館企画展
　「ムナカタの化石・4800 万年前のタイムカプセル」　・・・　153

　赤間宿まつりが行われました　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　157

編集後記　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　161

# 巻頭言

むなかた電子博物館 紀要委員会
委員長　平井　正則

むなかた電子博物館は開館 10 周年（関連記事あり）を迎え、紀要も今年度第 6 号発行に至りました。2009 年 4 月の紀要創刊号発刊以来、むなかた電子博物館、そして、電子博物館紀要には、多くの主に組織的な進展がありました。

まず、昨年 4 月にオープン、今年度 2 年目を迎える海の道むなかた館（宗像市文化学習交流館）の存在は、むなかた電子博物館（紀要を含む）運営活動の大きな支援となりました。地域の文化、歴史、教育の取材活動からイベント実行など多くの便宜を受けています。

また、2013 年度より、宗像市市民サービス協働事業「むなかた電子博物館運営業務」として採択され、比較的自由な形での予算運用が実現し、運営に活かされるようになり、紀要も安定した発行を目指せることになりました。

今回、第 6 号の発行に至った紀要では、毎号、むなかた電子博物館のあり方を基本テーマとして、県内資料館、水族館、動物園のいろいろな方面の専門家、宗像在住の注目される企業家などのご協力を得て、むなかた電子博物館スタッフとの座談会を特集し続けました。今号では、このむなかた電子博物館を運営するスタッフが集い、むなかた電子博物館の明日について具体的に討論する特集の座談会としました。これまでの博物館活動での取材、資料収集時に是非記録として残したい資料、地域の特に文化、歴史の貴重な研究資料などもあまり紙数を気にせず投稿頂き、掲載して参りました。これまでの紀要・記事は将来のページ構築に重要な資料として活かされると思います。

また、むなかた電子博物館を支える電子的しくみやソフトの構築については長足の進歩を重ねるＩＴ関連の現状、“動く技術”にどのようにその目的に沿って、取り入れ、利用、改変するかも課題であります。むなかた電子博物館の目的に沿って、安定して、市民との対話を支え、身近な博物館活動とするかは、なお研究目標といえます。

第 6 号編集を終えて、一層市民の方々へ、宗像の地域文化、歴史の中で生活する市民の学びや情報を提供し、夢を読んで頂けることを願っています。

「わたしも博物館活動や紀要編集に参加してみようかな？」とお考えの方は是非むなかた電子博物館への参加をお願いしたいと思います。

この 10 年、むなかた電子博物館の立ち上げ、掲載ページの構築に宗像市スタッフや多くの市民の方々のご支援、ご協力を頂きました。このテーマで興味ある事柄が紀要に全部掲載されるわけではありませんが、特に、地域の文化、歴史、教育に関し、これは記録に残すべき事柄とお気づきの方はぜひこの紀要に投稿頂き、むなかた電子博物館活動に参加頂きたいと思います。

今後とも、紀要の記事や内容についてのご意見など編集部へお寄せ下さい。

# 沖ノ島を起点とする社殿・古墳の直線配置研究Ⅲ

平井　正則

## 概　要

『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」を世界遺産に』という活動により注目される宗像三女神の沖ノ島・沖津島社殿、宗像大島・中津宮社殿、宗像大社辺津宮社殿の配置が直線であることは良く知られる。

本論文では、この謎の直線配置に興味をもち、直線配置の設置法、直線配置の意味を調査、研究する中で、これは沖ノ島を起点として、宮若市竹原装飾古墳を貫き、飯塚市川島古墳群１号装飾古墳まで、全長 85km に至る非常に正確な東南向き直線（東南線）上にあることを明らかにした。この精度ある直線配置を七世紀後半までに実現する技術には天測が欠かせないことを指摘する。また、この東南線の意味とは孤高の考古学者故原田大六氏の著書「磐井の反乱」で指摘される有明海東岸地帯、遠賀川流域、宗像地域をつなぐ、主に六世紀大和中央政府による韓半島、大陸進出に係る筑紫君・火君・水沼君・磐井君と宗像三女神祭祀の関係の歴史的、政治的、文化的事象を示し、海の回廊に続く陸の文化の回廊ではないかと推量する。

## １．序

本論文は最近日本比較文明学会九州支部会誌「文明研究・九州」掲載の「沖ノ島を起点とする社殿・古墳の直線配置の研究」[8]（『文明研究・九州』2014）をもとに、12 月 22 日-23 日「海の道むなかた館」にて開催の立命館グローバル・イノベーション研究機構主催「年縞を軸とした環太平洋文明研究拠点」九州・宗像シンポジウム「対馬海峡と古墳文明」（海の道むなかた館講義室）という長い題のシンポでの講演「宗像沖ノ島を起点とする直線配置」を行った。その内容に、加筆訂正した「沖ノ島を起点とする社殿・古墳の直線配置研究Ⅱ」[9]（日本暦学会 22 号）に続く、「沖ノ島を起点とする社殿・古墳の直線配置研究Ⅲ」である。この 2014 年初出の論文に上述のシンポでの議論や最近の調査研究資料をふまえた改訂版である。

宗像三女神を祀る田心姫神（たごりひめのかみ）の沖ノ島・沖津宮を起点に湍津姫神（たぎつひめのかみ）の宗像大島・中津宮、市杵姫神（いちきしまひめのかみ）の宗像大社辺津宮の地理上の位置がほぼ直線状に並んでいることが知られている。本論文では４世紀から８世紀日本の歴史に登場する宗像三女神の三社殿の配置に注目した。特に、最も活発な７世紀の沖ノ島祭祀の社殿配置から遠賀川流域の装飾古墳配置に注目し、日本の“シュリーマン”原田大六氏の著「磐井の反乱」[5]（原田 1963）に議論のある「七世紀大陸への出口は有明海東岸にあり、冷水峠を越えて遠賀川流域から宗像地域への人、物、文化の流れがあった」という原田説のひとつの物証になるのではないかと考えた。もちろん、彼の著作にはここで指摘する社殿、古墳の直線配置の言及はない。

この直線配置とは実際にどんなものか？どのようにして直線配置は作られたか？その意味は何かを検討する。著者は飯塚市桂川の王塚装飾古墳の天井画が高句麗装飾古墳の眞波里３号墳天井画（北斗七星と二十八宿）と似ているという意見を論述した[6]（平井 2003）。大陸、特に韓半島北部高句麗の文化が遠賀川流域の装飾古墳建造に伝搬しているのではないかと考えている。

装飾古墳は九州では九州北岸から有明海沿岸、熊本、鹿児島に分布し、主にほぼ五世紀から七世紀末に築造されたという。このような宗像三女神に係る社殿配置の東南直線を南に延長すると宮若市竹原装飾古墳、飯塚市川島古墳群に当たることがわかったので、宗像大社三社殿ばかりでなく、装飾古墳の配置も含めて検討した。

## ２．宗像大社の社殿配置と装飾古墳を含む東南線の検証

まず、Google Maps[11]の航空写真を利用して以下の社殿、古墳の中心の位置の緯度・経度を求め、直線の最小二乗法を施す。

採用した社殿、装飾古墳の概略は以下の通り。表２は採用した装飾古墳資料[1]（大塚 2004）。

＜宗像大社三宮＞
HTTP://WWW.MUNAKATA-TAISHA.OR.JP/HTML/SANGU_SYOSAI.HTML

**沖ノ島・沖津宮**

沖ノ島から韓国釜山へ 145km、宗像大島へ 49km、周 4km の孤島で南西側の中腹に沖津宮社殿があり、この社殿の北辺に有名な岩上信仰の巨石群遺跡が散在する[10]（安川 2002）。

古事記・日本書記にある宗像三女神降臨の地である。

**宗像大島・中津宮**

上述、沖ノ島より南東に 49km、周囲約 15km、次の宗像大社から中津宮は 11km にある。宗像中津宮社殿は大島の南側の山の中腹にある。また、社殿登り口には“天の川”を渡る橋や織女、彦星の小さな祠があり、毎年、七夕祭が行われている。島の北海岸には沖ノ島遥拝所がある。

**宗像大社・辺津宮**

宗像市田島に方形 300m ほどの広大な社域をもち、宗像三女神祭祀の中心をなす。

ここでは本殿中央を宗像大社本殿位置に採用した。

＜桜京装飾古墳＞

HTTP://KYUHAKU.JMC.OR.JP/KOFUN_FLASH/2009/SAKURAKYO/INDEX.HTML

全長約 41mの前方後円墳。後円部西側に横穴式石室が開口、全長約 9m、前・後室からなる複室構造で、後室奥壁には石屋形が設置されている。奥壁腰石や石屋形の支柱石には線刻と彩色による連続三角文が描かれている。六世紀後半にかけての中国・朝鮮半島との交易活動を行った宗像氏を中心とする有力な豪族の築造した古墳と考えられる。[10]（安川 2002）

＜竹原装飾古墳＞

HTTP://WWW.CITY.MIYAWAKA.LG.JP/HP/PAGE000000800/HPG000000749.HTM

宮若市竹原、諏訪神社の境内の中にある。全長 18m ほど、前方後円墳可能性があり、西南に向かって開口横穴式石室は 6.7m、主に花崗岩割石で前室奥壁、後室奥壁のみに装飾が

ある。前室奥壁の右側に建てた頁岩に黒と赤で鳥が描かれている。後室奥壁中央に葬送における大陸的要素を表現する壁画がある。

「欽明紀」15 年筑紫国造の一族筑紫鞍橋君の名称に係る鞍手に関連か？[2]（小林 1964 の森貞次郎氏の記事）

＜川島装飾古墳＞　HTTP://OBITO1.WEB.FC2.COM/IIDUKAKAWASIMA.HTML

川島古墳群は飯塚市川島にあり、13 基の円墳からなり、１号墳、２号墳、３号墳が整備、公開され、七世紀後半築造とされている。古墳群は航空写真ではほぼ北西線上にあるように見え、古墳群の中心と見える大きな川島１号装飾古墳に注目した。直径 17m の円墳、羨道、奥室があり、奥室中央に装飾がある。この古墳中央を古墳位置に採用した。

**図１　川島古墳群（飯塚市）**（写真は著者撮影、左上部は公園説明板）

**表１　装飾古墳資料**[1]（大塚　2004）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 桜京古墳(玄海町牟田尻) | 前方後円墳 | 横穴式石室 | 赤・緑・黄 | 連続三角文<br>対角線文 |
| 竹原古墳(宮若市竹原) | 円墳 | 横穴式石室 | 赤・黒 | 人物・さいば<br>朱雀・蕨手文 |
| 川島古墳(飯塚市川島) | 円墳 | 横穴式石室 | 赤・黒 | 人物・円文・三角文 |

良く知られるように沖ノ島・大島・田島の本殿が直線配置にあることは伝説や祭祀の観点からみればその意味を考えやすいかもしれない。そこで、まず、三社のみを結ぶ直線を引いてみると傾き 44°31’、この全長 60 km の直線からの誤差は 143m（沖ノ島）、－886m（大島）、743m（本殿）となり、約 1km 以内で三社は確かにきわめて良く直線上にある。

しかし、後述に議論（≪補遺３≫）のあるように祭祀の場所の近くに社殿が置かれるとか、社殿の遷宮や修復などを考えると社殿位置を地図の上のどこにするか？は確定できない。たとえば、特定の範囲を考えると沖ノ島は周囲 4km ていどの孤島であり、大島を見ると現在の沖津宮社殿は南岸寄りにあり、島はこの中津宮をつらぬいて南 2.4km で北岸に至る。また、田島の宗像大社社殿域は 300m ていどのほぼ方形で、この地域に祭祀地点は複数散在する。したがって、三社のみにより作った平均直線に各社は 1.6km 以内のずれで一致し、それ以上の社殿位置の特定は難しい。この三社のみで決めた直線をそのまま南に延長してみると竹原古墳は引いた線からたった 752m しかずれない。本殿から 25km 離れた川島古墳の場合は大きく 1.7km ずれる。しかし、これは川島１号墳を含む川島古墳群の存在する丘の大きさ程度である。

ここでは４世紀にはじまるらしい宗像三女神祭祀の三社、一方、６世紀～７世紀つくられたとみられる装飾古墳と建設年代の違いもあるように見えるが、とにかく、社殿、古墳の配置を合わせて検討してみた。

各社殿・古墳位置を航空写真で決めて緯度による経度を一次式とし最小二乗法を施す。表２にその解析結果を示す。

第１欄は社殿・古墳名（名称）、第２、３欄は位置（緯度、経度）、第４欄は沖ノ島からの概略の距離（km）、最後の欄は簡単に緯度を変数とする経度を表す最小二乗法の直線（平均直線）で近似した時の平均直線からのずれ値（km）で＋は東、－は西を意味し、経度・緯度から地球長を考慮した概数である。ここで標高は無視している。

**表２　社殿・古墳の位置と平均直線のずれ**

| 名称 | 北緯(°　′　″) | 東経(°　′　″) | 距離(km) | ずれ(km)　＋:東 |
|---|---|---|---|---|
| 沖ノ島沖津宮 | 34°　14′　31″ | 130°　6′　14″ | 0 | ＋0.7 |
| 大島中津宮 | 33°　53′　50″ | 130°　25′　54″ | 49 | －1.5 |
| 桜京古墳 | 33°　50′　30″ | 130°　29′　41″ | 58 | －0.5 |
| 宗像大社辺津宮 | 33°　49′　52″ | 130°　30′　51″ | 60 | ＋0.3 |
| 竹原古墳 | 33°　43′　59″ | 130°　36′　38″ | 74 | ＋0.01 |
| 川島古墳 | 33°　39′　39″ | 130°　41′　33″ | 85 | ＋1.0 |

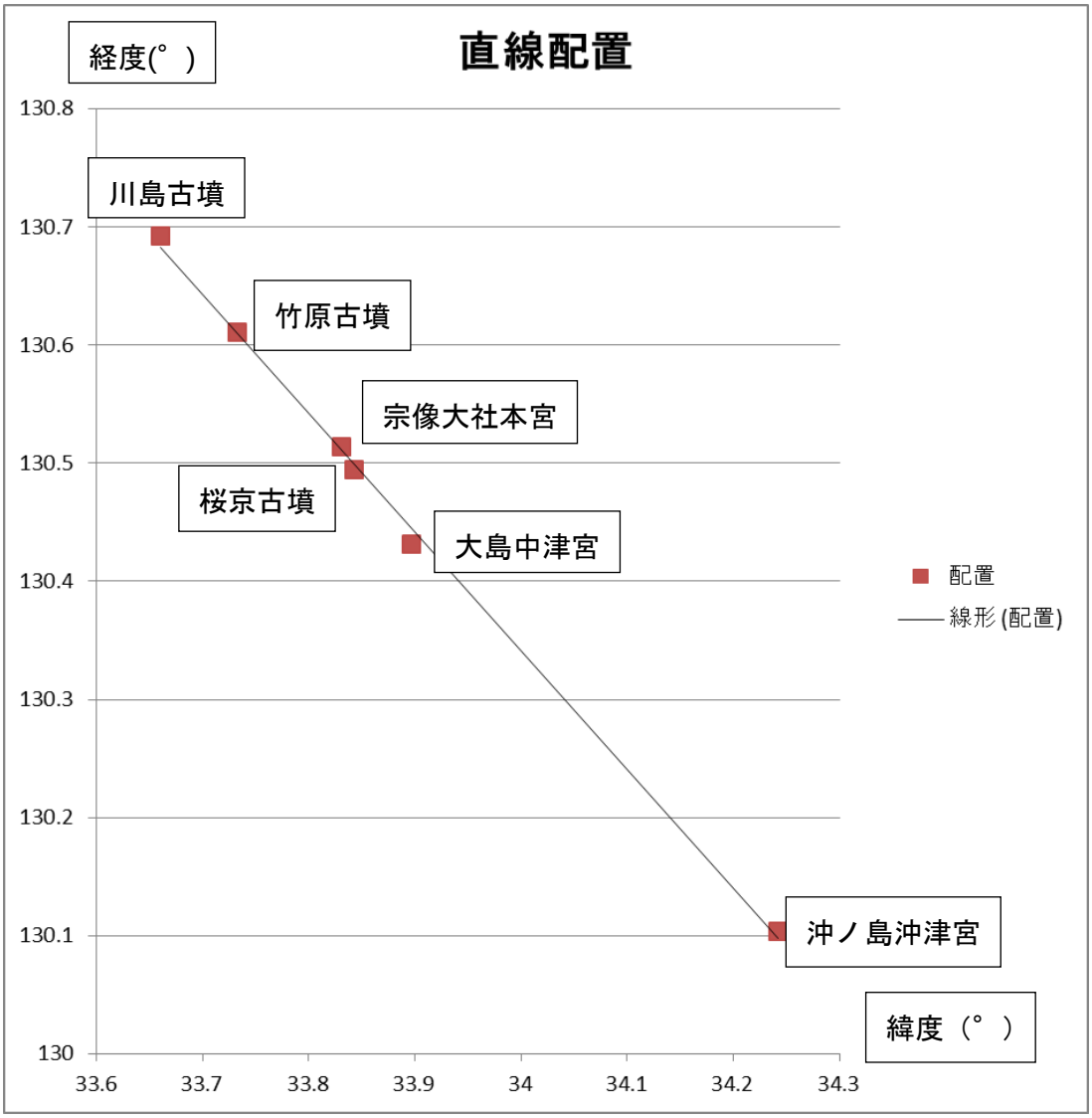



**図２　直線配置**

一次式の最小二乗曲線の結果は

傾き値　-1.007(45°12‘)　°E/°N　±0.017°

傾きほぼ 45°の東南線である。ここでこれらの地域の経度、緯度に対する 1′（分角）あたりの実距離はそれぞれ 1.6km、1.8km である。

表２、図２に示すように、社殿、古墳は全長 85km の直線上に配置されていると結論する。これは望遠鏡や測量器具のない時代に、肉眼精度１分角を考えれば、驚くべき配置精度といえる。

表２、図２を見ると、これらの古墳を含む社殿・装飾古墳の直線配置の根拠は不明なのだから結果を悪く解釈すると、次の見解も可能である。

古墳は普通かなり散在して見つかるから、たまたま都合の良い古墳を選んだ結果という可能性もある。古墳はどれも装飾古墳で桜京古墳は大島と田島宗像大社の大社に接近しているのにずれが大きい。一方、竹原古墳はずれ30mで円墳の大きさていどで非常に良く一致する。以上、ここで取り上げた装飾古墳の資料を特に表２を参照してほしい。

## ３．東南線を引く方法

解析で得た傾き 45°（東南）の方位は南北か東西の線が正確に引ければ配置位置の決定は比較的やさしいかも知れない。

当時、磁石はあったかどうかは不明だが外洋を行く帆船にはコンパスにあたるものはあったかも知れない。この時代の羅針盤らしき星座盤の研究は平井・藤原[7]（2009）にある。ほぼ６世紀飛鳥時代（592-710）には遣隋使はじめ遣唐使が派遣されたから帆船にはコンパスがあった可能性は高い。しかし、後述するようにここで直線に配置されたとする古墳の築造は六世紀末まで、遣隋使（600-618）、遣唐使の時代より少し古いだろうか？

起点の沖ノ島が見える場所では直線は簡単に引ける。しかし、大島・中津宮を見ると社殿は小高い南側斜面の中腹にあって直接、沖ノ島は見えない。まして、竹原古墳、川島古墳からは沖ノ島は見えないだろう。ではどうしてこんなに精度よく配置できたのであろうか？

夜空の北極星の動きを知っていれば、天測により任意の場所で北極星を使って南北線（子午線）は引くことは簡単にできる。ただし、650 年頃の北極星は地球の歳差や固有運動で現在より天の北極から離れている。そこで測定（観測）時期に北極星の動きを観察し、北極星の高度が最も高い時、すなわち、上方子午線通過時に方位を測れば、望遠鏡や精密な測量器がなくても、目視の精度は 1′角だから 1′角程度の精度で子午線は引けるであろう。

直線の向き（方向）はこの子午線からの傾き東へ 45°（正確には北から東へ 45°12′）だから直角等辺三角形定規があれば東南線は引ける。天測で簡単な錘のついた紐（垂直線）が二組みあれば夜半、北極星の一番高い時（上方子午線通過）に、いわゆる、トランシット

の方法（北極星の南中方位測定）で南北線が引け、東南線は南北に直交するから簡単に求められる。

残る問題は沖ノ島を通る東南線を知る必要がある。宗像大社から沖ノ島は水平線上にあり、海には視界の障害物はなく、また、当時の航海で方位線の測定や使用は頻繁に行われただろうから問題なく東南線を引くことは容易であったろう。

問題は沖ノ島の見えない、たとえば、85km 離れた飯塚・川島ではどうして任意の場所の東南線を沖ノ島の東南線にまでずらしたのだろうか？これは不明である。

たとえば、宗像大社社殿に高い旗を立てて竹原古墳でその旗の方位を測る、次に、竹原古墳で同じ高いポールを立てて、飯塚の川島古墳で測ったのであろうか？

あるいは水平に移動した任意の点で子午線を得て、水平距離を測定して同じだけ南北に（子午線）に沿って移動する（今の場合、たまたま、子午線に 45°傾いているから）。

精度は水平距離の測定精度が大きいほど大きいだろう。（歩度だと起伏があるから）

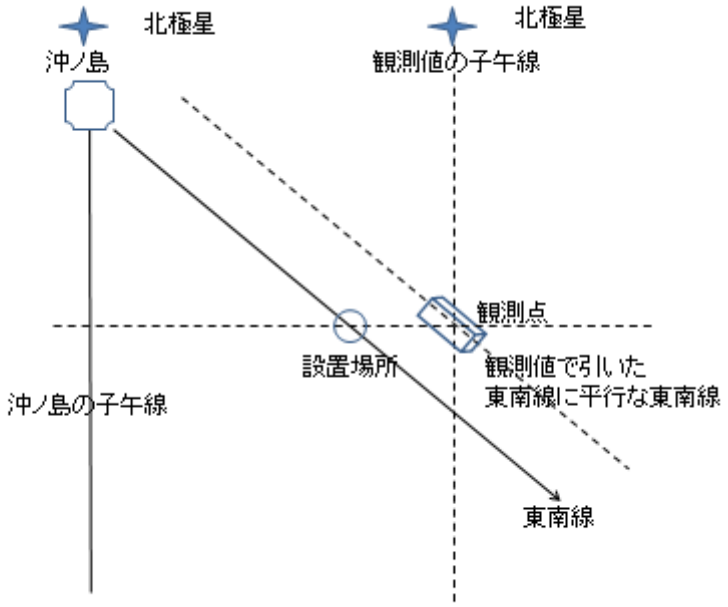



**図３　東西線上に設置する方法**

## ４．東南線の意味

宗像大社の三社殿の位置が直線に配置されている意味は宗像三女神の祭祀など宗教的な意味をもつのであろう。図４に沖ノ島を中心とした朝鮮半島南岸、九州北岸の関係を示す。大陸-九州北岸には４世紀には宗像三女神祭祀をもとにした大陸進出の航路として“海北道中”（≪補遺１≫）が知られている。（海流も重要だが今は無視する）朝鮮半島南岸からは宗像は南東にあり、日本海の南東風を利用して帆船で航行したと思われる。実際、現代探検家の航海に関するきわめて興味ある見解があり、≪補遺２≫に示す。

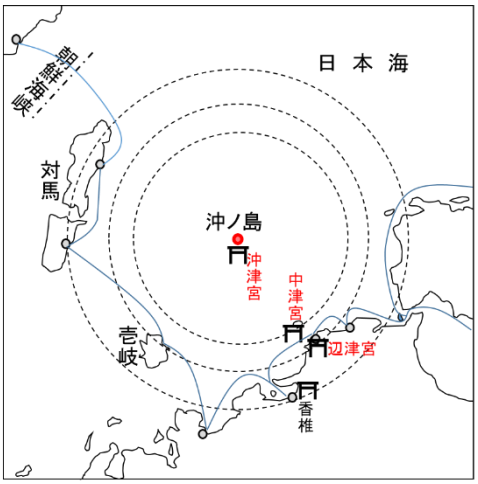



図４　宗像三女神社殿と玄界灘（原田大六著「磐井の叛乱」141 ページ第 24 図より著者作画）

問題の直線配置の東南線は大陸との交易に欠かせない安全な航行を祈るほぼ 200km にもなる“海北道中”の南延長線であり“陸の回廊”という意味かも知れない。

前述（１．序）のシンポジウムにて「祭祀の場所と神殿の位置は必ずしも一致しない」という重要な指摘があった（≪補遺３≫）。祭祀が行われる場所近くに後になって社殿は建設されるというのであれば確かに厳密な社殿位置は社殿敷地内ていどの意味しかないかもしれない。しかし、ここでの扱いでは結果的に計算結果は個々の社殿敷地、祭祀の場の周辺が精度内に入り、議論には問題ないと考える。

では、それに連なる古墳を含む直線配置については

1）　この直線はたまたま一致していて相互に関係はない。
2）　７世紀末までの政治・宗教・文化に関わる何らかの要因から引かれた意味ある直線配置である。

1)は論外である。2)について、桜京古墳、竹原古墳、川島古墳群は七世紀末の古墳時代末までに築造され、いずれも装飾古墳であり、また、宗像地域、遠賀川流域地域にこの時代の多くの装飾古墳が分布することに注目する。

原田大六氏の議論に従えば、五世紀～七世紀に大陸への有明海東岸に水沼氏などの豪族を中心とする日本船師（日本海軍）があり、百済や中国南朝への航路があった。そして、水沼氏は航海の守護神としての宗像三女神結びつけるため、有明海東岸の港から飯塚、遠賀川流域、玄海に達する陸路のルートが開かれた。それを証拠立てるものとして有明の石人石馬・装飾古墳から装飾古墳への分布がある。当時の移動の手段は船であるから遠賀川は輸送に重大な役割を果たしたであろう。多くの装飾古墳には船や波が描かれている。したがって、この東南の直線は宗像 - 遠賀川 - 有明海のルートに接続する人、物の交流を象徴するものではなかろうか？このルートに沿って、大胆に言えば、宗像・鞍手・飯塚・甘木・有明・熊本につながり、筑紫君、水沼君、磐井君、火君などの豪族に係る古墳の築造が盛んであった結果ではなかろうか？

直線配置は何らかの航海の安全祈願に始まり宗教的な葬送に係ることまでを意味しているのではないか？さらに、原田大六氏の議論を前提とすれば、この直線の意味とは歴史的な宗教、政治、文化於いての宗像地域と遠賀川流域、有明海東岸との結びつきを実証するちょっと違った形での歴史的証拠のひとつではなかろうか。

## ５． 結論

宗像三女神に係る沖ノ島・沖津宮社殿、宗像大島・中津宮社殿、宗像大社・辺津宮本殿は殆ど東南に向かう直線状に配置されていることを明らかにした。この線上に桜京装飾古墳が存在する。さらに、この東南線を宗像大社より南に延長すると若宮市竹原装飾古墳、飯塚市川島古墳群１号墳を貫くことを明らかにした。

沖ノ島を起点とするこの東南線は傾きほぼ45°12′、総延長85kmにも及ぶ。南の二つの古墳は宗像大社の北２㎞の桜京古墳を含み、いずれも、装飾古墳であり、それは古墳時代末期７世紀後半までに築造された三社直線配置の南への延長である。

この直線をこれほど良い精度で配置するには天測が重要であることを示した。

また、四世紀宗像三女神の祭祀の活発な時代に始まり、大陸との北部九州を結ぶ“海北道中”とは 200km に及ぶ朝鮮南岸と宗像海岸を結ぶ重要な海の回廊であり、さらに、ここで指摘する東南線とは海の安全を祈った宗像三女神の海の回廊につながる陸の回廊と云えるのではないだろうか？何の実証もないが、この陸の回廊の先は有明湾沿岸に位置し、活発な大陸への関心があったのかもしれない。

また、原田大六氏の議論をふまえ、宗像地域・遠賀川流域地域・有明海沿岸地域の六～七世紀に於ける宗像海人族と有明湾沿岸の豪族水沼氏との活発な宗教的、政治的、文化的活動を意味し、その歴史的証拠の重要なひとつではないかとも推量する。

## ≪補遺１≫

『日本書記』には「日神の生まれませる三の女神を以ては、葦原中国の宇佐嶋に降り居さしむ。今、**海の北の道の中**に在す。号けて道主貴と曰す。此筑紫の**水沼君**等が祭る神、是なり。」（太字は著者）[3]（「日本書記」 1994）と「海北道中」の語句がみえ、早期この“海北道中”を東南の風（海流は無視して）に乗り、帆船で航海し、大陸から九州北岸に至る海上ルートの航海安全祈願することから発祥したのが宗像三女神であろう。したがって、ここで指摘する陸の東南線とは古くからの航海の安全を祈る宗教的海の回廊(200km)を南端に延長する宗教的陸の回廊（85km）にみえる。そこには宗像海人族と密接な関係をもつ水沼氏をつなぐ宗教的、政治的、文化的連結の証拠であろうか。[4]（澤田　2011）

## ≪補遺２≫

海洋冒険家八幡　暁氏のシンポ（2014）（１．序参照）講演によると“人は見えるところまでは行くという動機が生まれる”らしい。

では沖ノ島沖津宮、大島中津宮、宗像大社本殿の配置に関して、どのくらいか海上で遠くの島が見えるかの検討する、八幡氏は「玄海から沖ノ島（ほぼ 50km ていど）は見えます。」（目標が見えることは渡航者の意思に大きく影響するとの発言の際のコメント）。

そこで、単純な幾何学的取扱いで考える。

高さ 200m（沖ノ島を想定）の島では地球が球形のために 51km まで見える。

だから、八幡氏の述べる通り、大島から沖ノ島は見える。

51km は大気透過率を考えてもこれが見える理論的最大距離値となる。

見えやすさを考えると大気の屈折による浮き上がりが（視高度 0.0°）34 分 24 秒（角）もあるから、天気なら（透過率の良い晴天には）地平線の上に沖ノ島は確かめやすい。

上の２点から、宗像海岸から沖ノ島は見えることになる。

実際、天候の良い日は沖ノ島が玄海海岸から見えるのというのが住人の通説である。

## ≪補遺３≫

社殿は祭祀の行われる時や祭祀発生後神官や参拝者のために建造されるために必ずしも社殿位置が祭祀場所とはならないという意見がある。したがって、社殿配置が祭祀場所ではないかも知れない。現在の社殿位置の“直線”の精度は大幅に大きいので問題ないが厳密の位置は興味ある問題である。

謝辞　図４の制作に関し編集子宮川幹平氏にご援助を頂きました。記して感謝申し上げます。

## 参考文献

[1] 大塚初重編, 「東アジアの装飾古墳を語る」, p.84 主要装飾古墳一覧, 雄山閣, 2004
[2] 小林行雄編, 藤本四八撮影, 「装飾古墳」, 平凡社, 1964
[3] 坂本太郎ほか, 「日本書紀（一）」神上, p.74, 岩波書店, 1994
[4] 澤田洋太郎, 「日本誕生と天照大神の謎」, p.118, 新泉社, 2011
[5] 原田大六, 「磐井の反乱」, 河出書房新社, 1963
[6] 平井正則,「古墳天井画の数値的同定」, 福岡教育大学紀要 52 号, 2003
[7] 平井正則・藤原智子, 「1878 年来英国に、1683 年来日本で所蔵するふたつの青銅製星座盤」, 文明研究・九州 3 号（日本比較文明学会九州支部）, p.93, 2009
[8] 平井正則, 「沖ノ島を起点とする社殿・古墳の直線配置の研究」, 文明研究・九州 8 号（日本比較文明学会九州支部）, pp.23-30, 2014
[9] 平井正則, 「沖ノ島を起点とする社殿・古墳の直線配置研究Ⅱ」,日本暦学会 22 号, pp.4-6, 2012
[10] 安川淨生, 「宗像の歴史」, 曹洞宗・安昌院, 2002
[11] Google Maps, http://www.google.co.jp/maps/

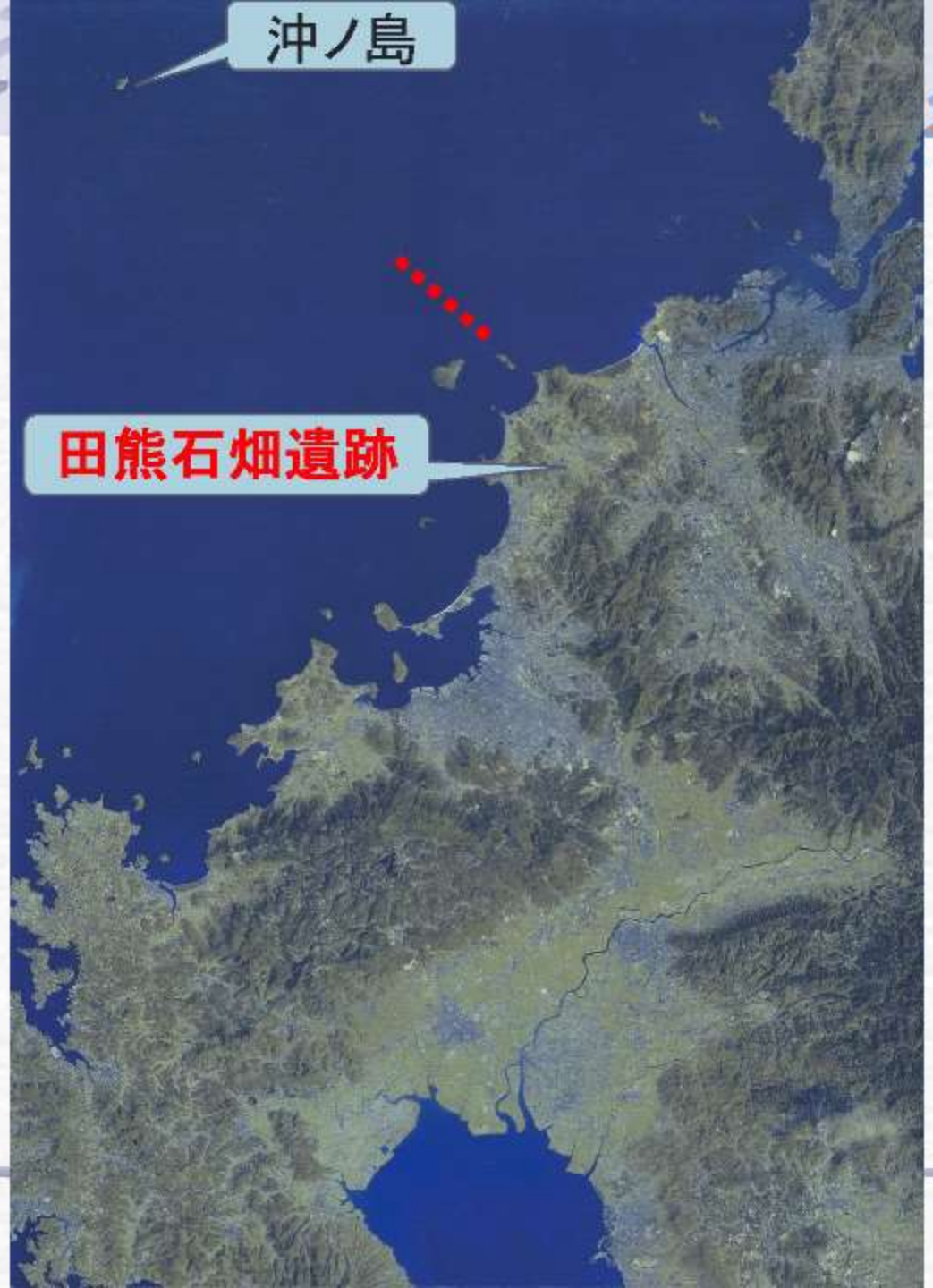
皆さんこんにちは、宗像市郷土文化交流課の白木と申します。田熊石畑遺跡を発掘した張本人ですので、ここでは遺跡の報告をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

これは、宗像市の釣川流域、宗像市域を一望にしております航空写真です。田熊石畑遺跡は釣川の中流域にあります。宗像市役所、裁判所、宗像高校といった宗像の中心施設のある所にある遺跡です。

# 田熊石畑遺跡の調査報告

宗像市郷土文化交流課　白木英敏

衛星写真で北部九州を俯瞰したものですが、こういった位置関係です。赤い点線が見えますが、これは玄界灘と響灘の境です。宗像は、西も東も両方見渡すような所にあります。




# 宗像地域とは

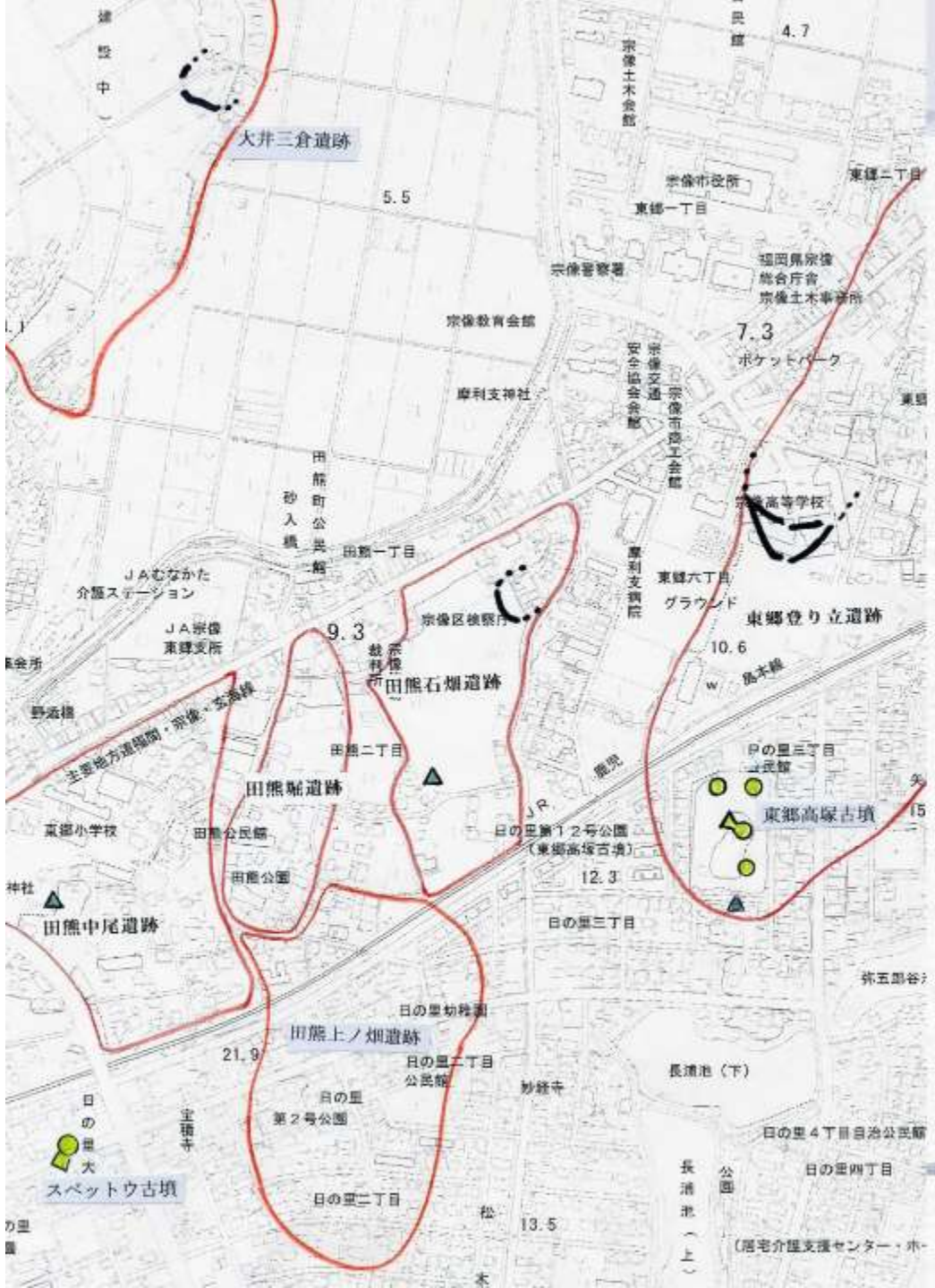
- ここでは宗像地域とは宗像市・福津市の旧宗像郡。
- 律令期にはこれに古賀市の一部が加わる。
- 響灘の西辺でもあり、玄界灘の東辺でもある。

付近には、弥生時代の遺跡がいろいろございます。弥生時代のごく初期の遺跡が北部九州の他の地域に劣らず分布していますが、そのなかでも有力な遺跡が釣川沿いに集中していることが分かります。冨地原付近、それから田久ですね。この田久松ヶ浦遺跡は、弥生時代初期の朝鮮半島系の墓が見つかっているところです。

# 初期弥生文化の受容

- 弥生時代の遺跡は釣川水系、西郷川水系、海浜部に展開する。
- 面的に広がる大集落は形成しがたい。

この辺が宗像高校で校舎の下も遺跡です。ここにも環濠集落という、吉野ヶ里遺跡などで見られるような環濠集落があり、それから、この大井三倉遺跡で、ここも一つ重要な弥生時代の遺跡です。そして、この田熊石畑遺跡があります。



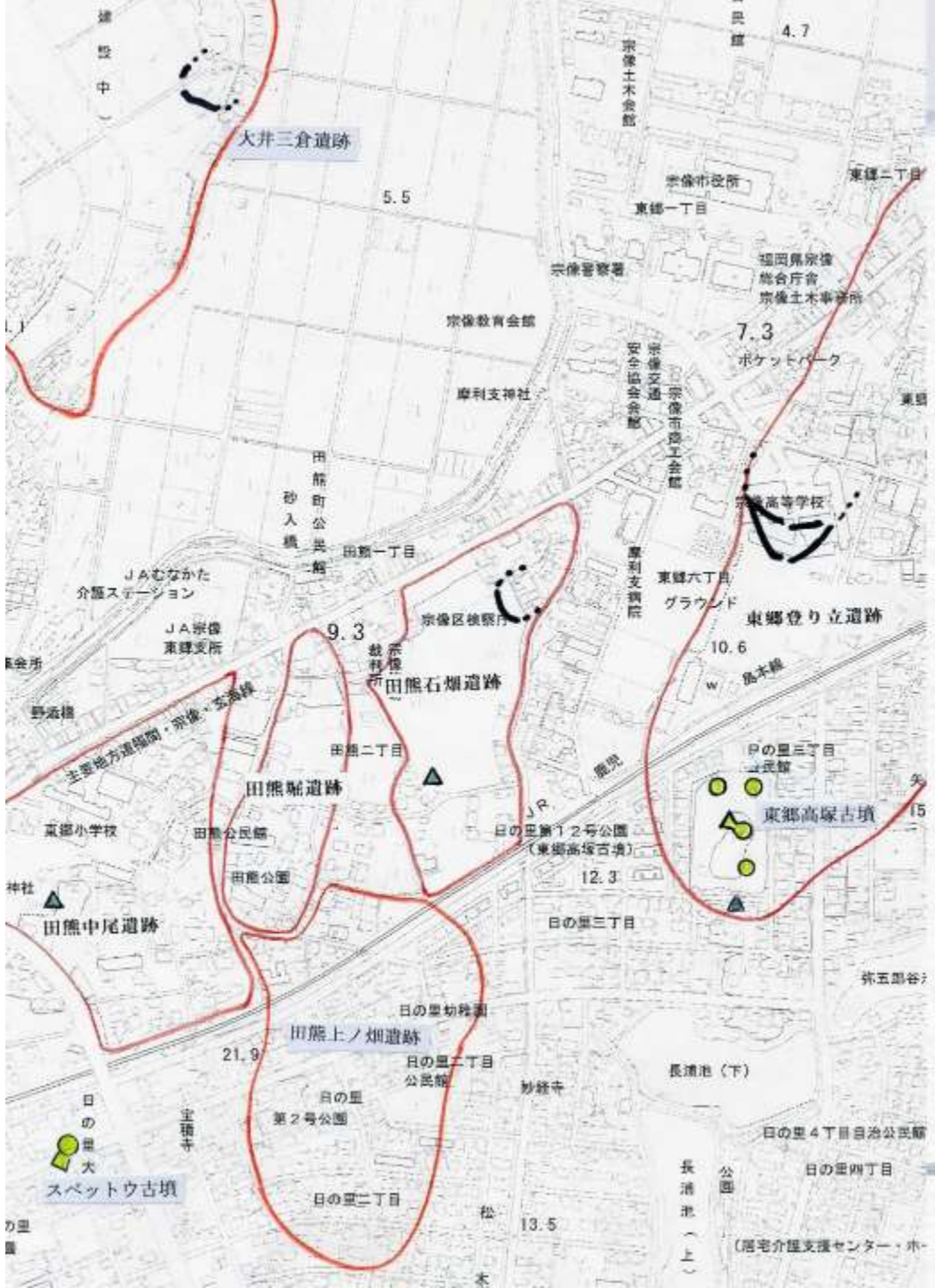

# 周辺の遺跡

東には弥生時代前期の環濠集落「東郷登り立遺跡」。西側には弥生から古墳時代にかけての集落遺跡「田熊中尾遺跡」など田熊遺跡群、北側には弥生時代前期の環濠集落「大井三倉遺跡」。

忘れてはならないのは、後の古墳時代になりますけれども、東郷高塚古墳。

4世紀後半ですので、ちょうど沖ノ島祭祀が始まるころ、内陸部に現れる全長64mの前方後円墳、それが日の里団地の中に公園として、まあ当時は、もう古墳とかどうでもいいような時代だったのですけれども、奇跡的に公園として保存されております。それから、東郷小学校なども遺跡です。

ですから、学校とかある場所なんていうのは、やはりちょっと高台になっていまして、人々が暮らすには良い場所だったということでございます。




# 周辺の遺跡

東には弥生時代前期の環濠集落「東郷登り立遺跡」。西側には弥生から古墳時代にかけての集落遺跡「田熊中尾遺跡」など田熊遺跡群、北側には弥生時代前期の環濠集落「大井三倉遺跡」。

この黄色いのが、いわゆる台地ですね。小高くなっている所に遺跡があるというのが分かるかと思います。これが宗像高校、田熊、東郷小学校もこういう地形だったのです。

# 立地について

遺跡の立地する台地は、海岸線から6kmに位置し、東西150m、南北300m、標高12mほど。

そもそもこの遺跡の発見ですけれども、昭和8年にさかのぼります。第2次大戦前にこの地に宗像高等女学校がありました。宗像高等学校の前身です。

ひょっとしたら、卒業生の方がいらっしゃるかもしれませんけれども、この宗像高等女学校に田中幸夫先生という方が赴任されました。当時30代の考古学に詳しい田中先生が、ここに遺跡があるというのを発見されております。

# 発見の経緯

昭和8年、宗像高等女学校に赴任中の田中幸夫氏によって発見、宗像初の発掘調査が行なわれ、東京考古学会『考古学』に報告。

昭和八年八月

## 彌生式有紋土器の新遺蹟と窯址

——福岡縣宗像高等女學校庭——

田中幸夫

### 位置

有紋土器に有名な遠賀川並層敷遺蹟を、西南方に距つること約十六粁、汽車が海老津・赤間の二驛を經て、終に東郷驛に入らんとする頃、即ち驛の東方約四百五十米の、そして鐵路の北方二百米の邊りに、吾人は福岡縣宗像高等女學校々舍の威容を認めるであらう。

由來、當宗像郡は、記・紀の神代卷に曰ふ、所謂、三女神を奉祭する宗像君の經居地として知られた所であるが、地形、小丘陵に富んで恰も箱庭の如く、四周山に圍まれた狹小の地が點所に見られる。而て更に大きく、西方玄海の一面を除いては、他の三方悉く山丘を以て他と絶縁せられ、陸路遠賀より當郡に入る爲には、奈良期以來の通路、垂水峠（遠賀郡岡垣村と、宗像郡池野村とを隔つる、湯川・孔大寺南峰の境）を外にしては他なく、現在は、鑪形（一名城山）の長いトンネルによつて、僅に鐵路、兩者を接せしめて居る有樣である。

こゝに我が遺蹟地も亦、田熊なる丘陵の裾、約二米半の臺地に存して、釣川の一支流、平井川に臨んでゐるのだ。

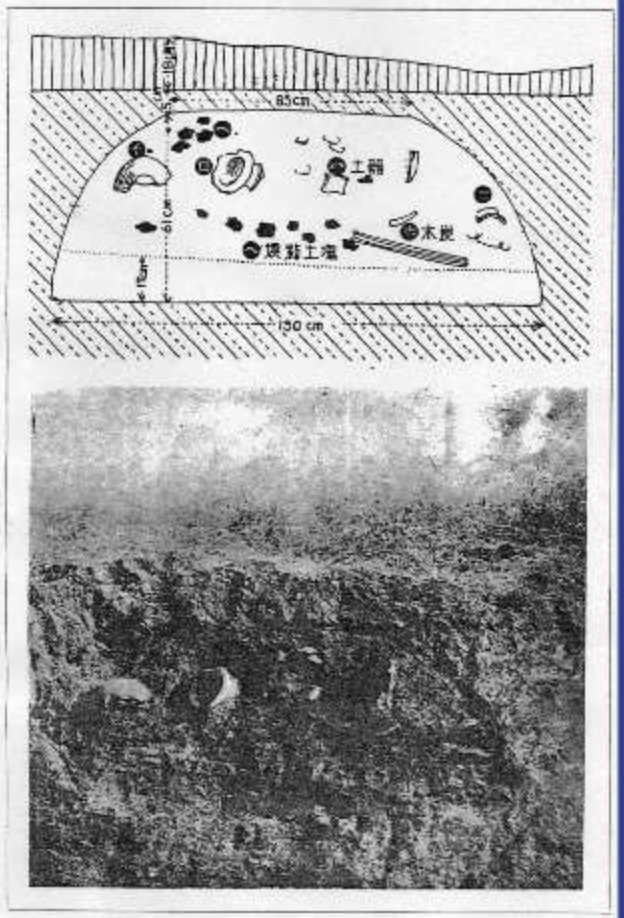
こゝに當女學校に於ては、本年六月以來、校舍の西方に隣る新運動場擴張の爲、その南方の臺地を地下げしてゐるのであるが、開來私は、赤土の層土中に、劃然として掘き出された灰黑色土層の中から、既に夥しい石器と土器とを採集してゐる。

而てこゝが住居地であつた事は、現に長さ五・七米、深さ〇・六米の斷層を露出する一竪穴によつても明かである。

### 石器

第一圖は、石器の一部であるが、2、3、は給刃磨製石斧であり、4、5、6、も同じく安山岩の石斧である。

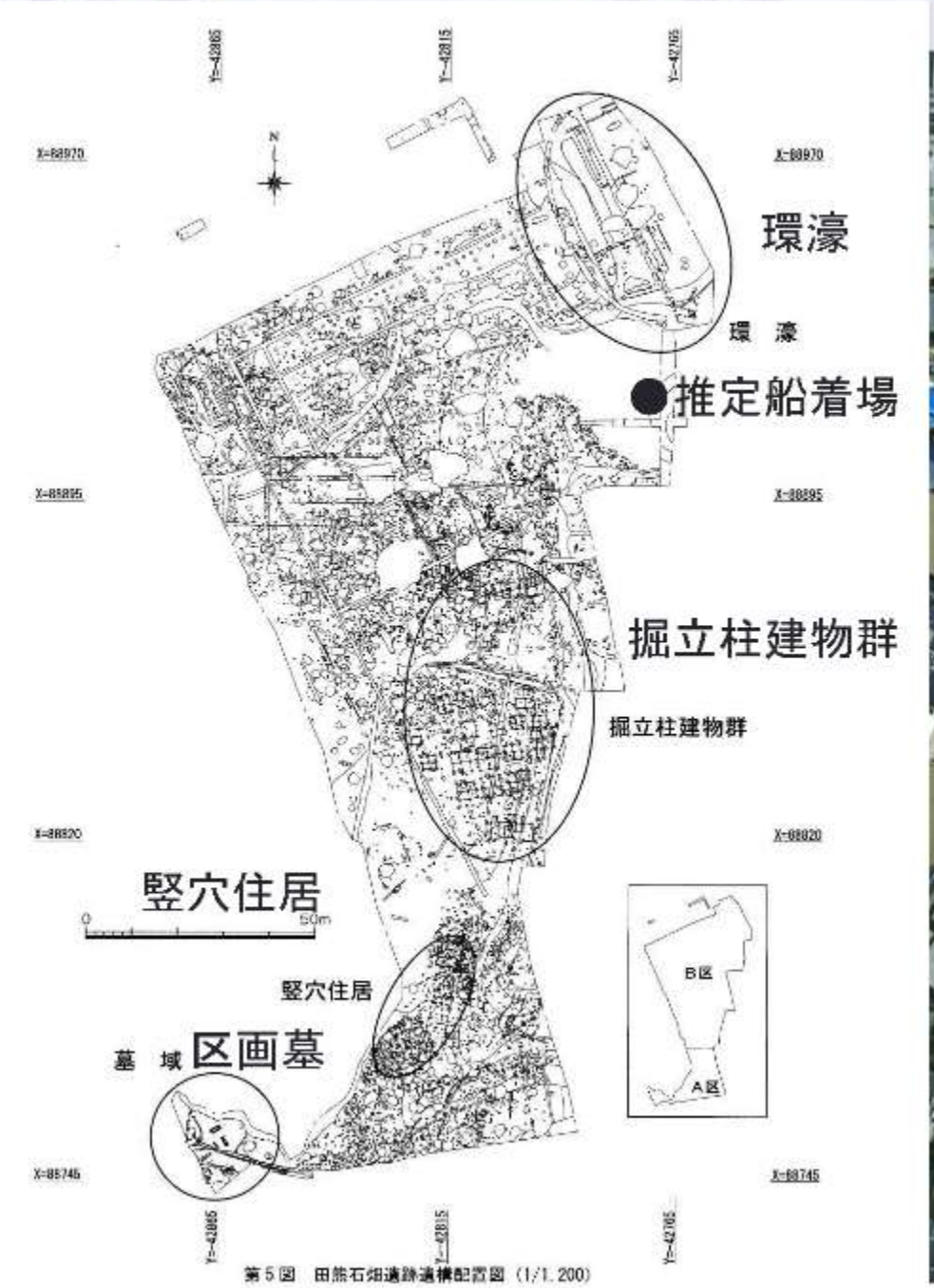
然るに此の遺蹟の遺物として特に注目すべき事は、7、8、9、の如き、粘板岩の片刃磨製石斧が多く出土することで、而も、7には柄部に一ヶ所、8には二ヶ所の挾が存し、尚、他に、附近より出土した、7と殆ど同型のものが一個ある。




福岡縣宗像高等女學校遺蹟發見當時　田中氏所文書類

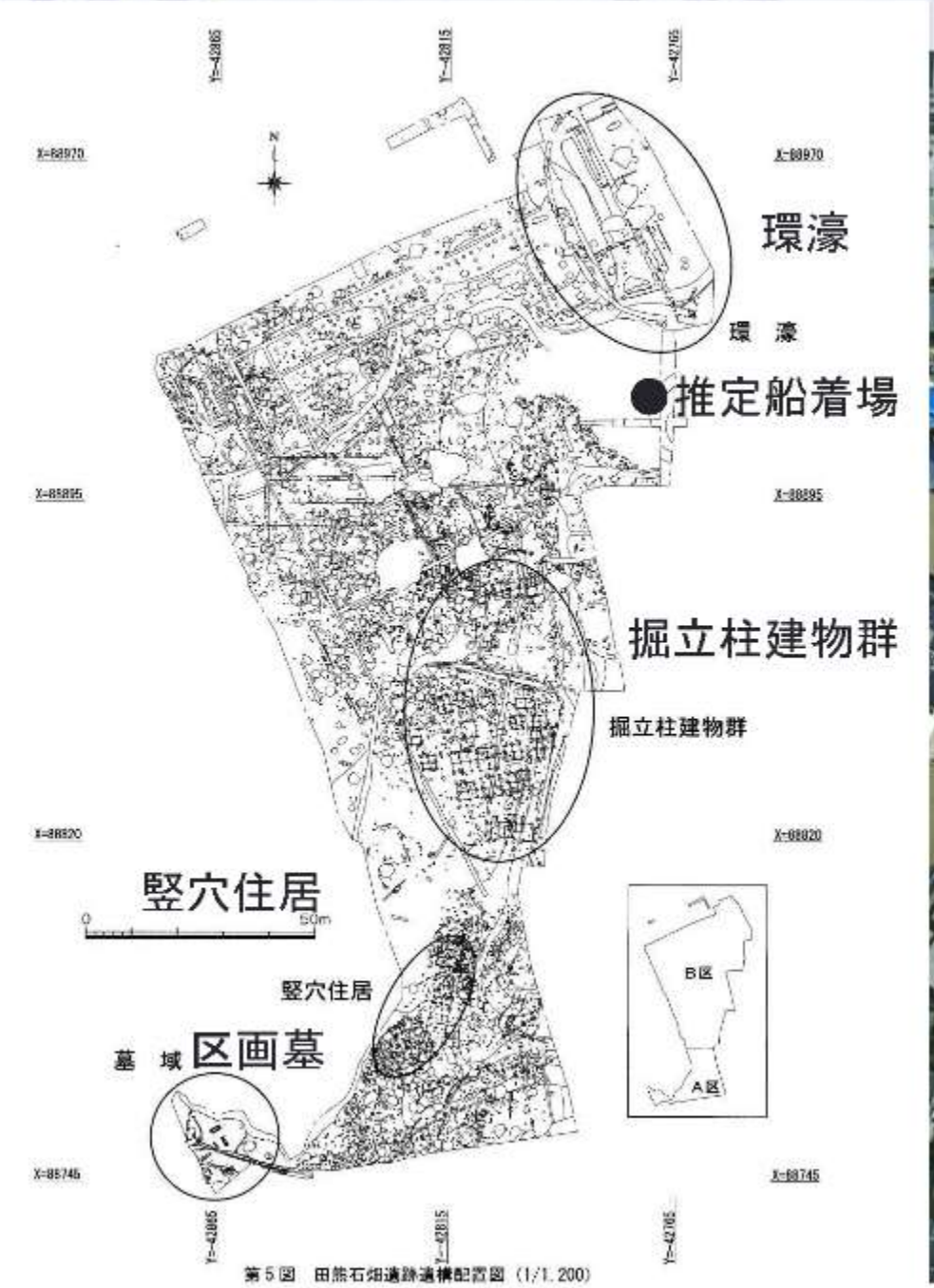
戦後女学校は移転して宗像高校になり、この地は中央中学校に引き継がれ、その中央中も移転したあとは更地のままでした。そこに、開発の話がありましたのが平成20年。

それで発掘調査が始まり、私もこういう仕事をしても、なかなかお目にかかれないような遺跡の発見につながるわけでございます。



遺跡の内容はと言いますと、旧3号線側には環濠が1つ見つかっております。そして、推定船着場がこの辺だろうと考えています。すぐ横に釣川の支流の1つ松本川という小川が流れていて、ここを介した水運というのを考えています。

それから、時代は降り、弥生の掘立柱建物以外に古墳時代、6世紀の終わりくらいの大規模な倉庫群も出てきます。



ですから、東郷高塚古墳の存在も相まって、やはり弥生時代から古墳時代にかけての長期間、宗像にとって大事な場所だというのが分かります。

他には、竪穴住居が数棟ありますが、注目されるのは何と言ってもこの端にある区画墓です。墳丘墓とも言いますけれども、墳丘まで見つかっていませんので区画墓としていますが、こういった有力者の墓域が見つかっています。

# 環濠の調査

これは環濠です。溝が北と南に、ちょっと途切れている箇所があり、これは、わざと溝を掘り残した陸橋になります。そして、推定船着場と考えているのがこの辺。黒い所はまだ掘れまして、入江のようになっています。

しかも、その入江に面して、この環濠の南出入口が向いているということから、水運で運ばれた物資が検収を受けて、こういった環濠の中に運ばれたのかというのも一つ考えているところです。

環濠は円形ならば直径約50m。光岡長尾遺跡と同規模。

この入り江の包含層から漁撈具や朝鮮半島系の土器なども出ております。こういったのは土錘（どすい）と言って網のおもりですね。今でも海辺に行くと、こういう形のおもりが転がっていることがありますが、網はそのままではゆらゆら揺れてしまうので、その下に付ける重りです。

# 谷部の調査

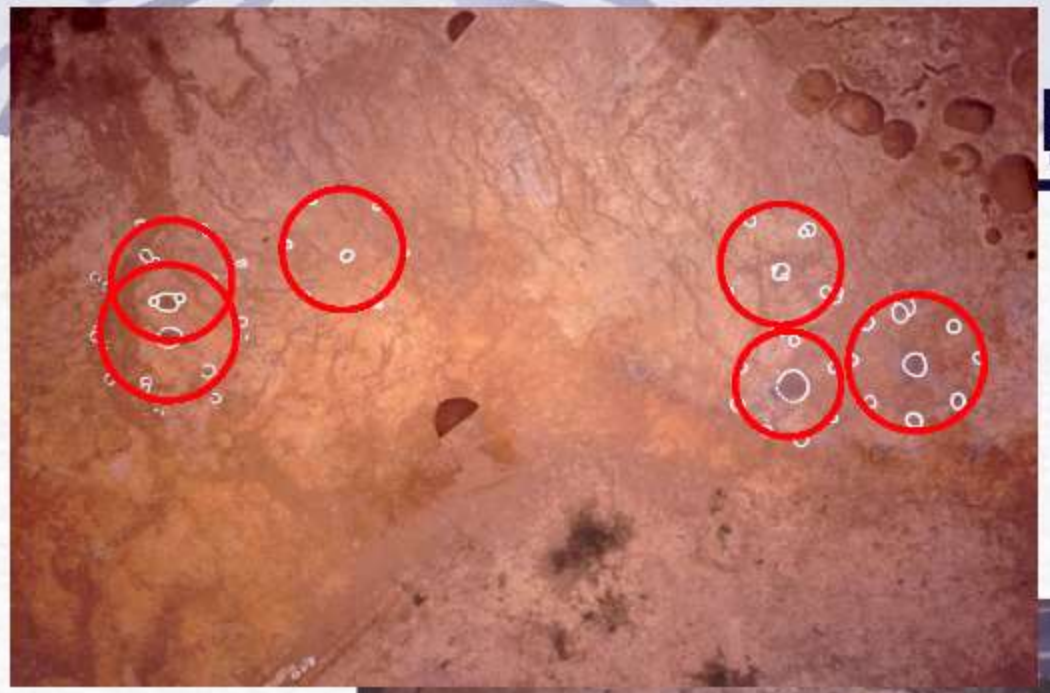
南側陸橋部。前面には松本川から入江状に谷部が入る。土錘、擬朝鮮系無文土器出土。推定船着き場。

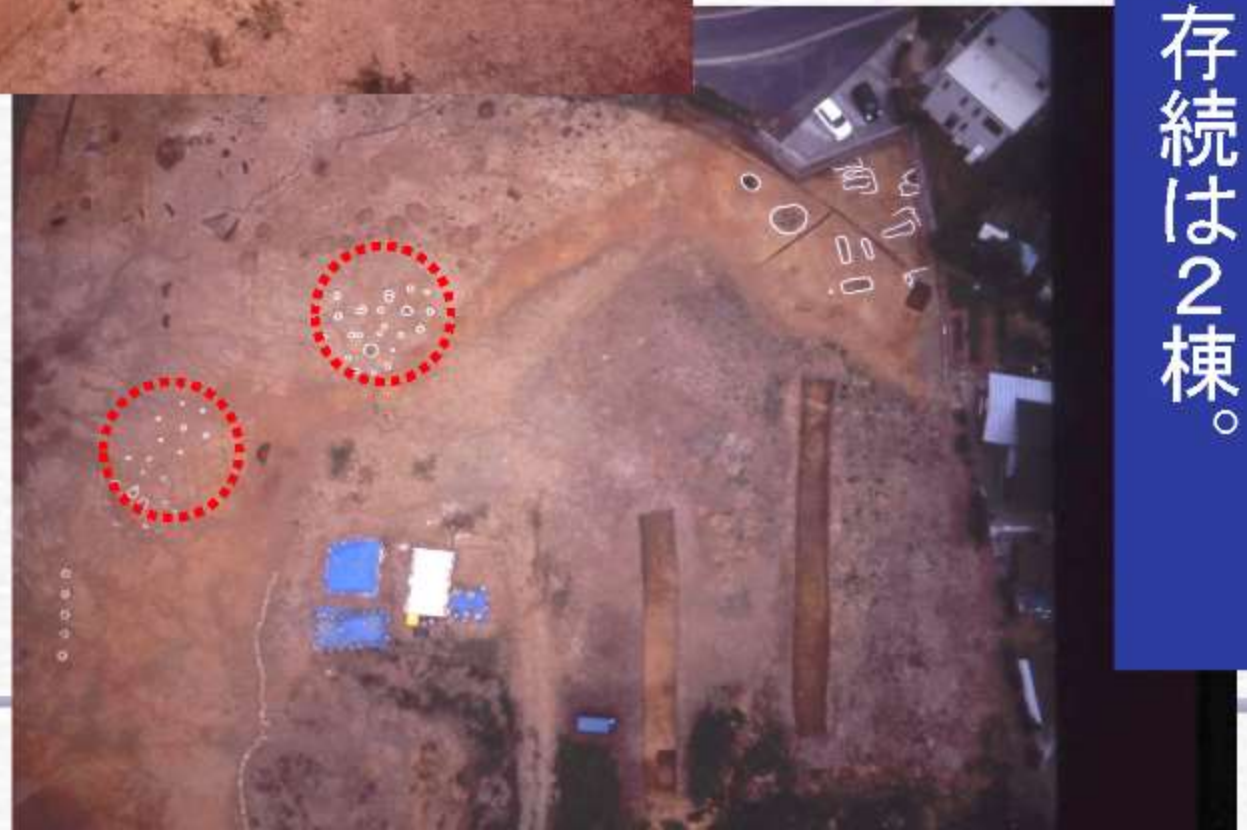
# 掘立柱建物の調査

先ほどの古墳時代の掘立柱倉庫群が、北の群と南の群と2群に分かれます。この真ん中が、意味のある空間、つまり、荷物がこう運ばれてきたら、まず、荷解きをしたり、中身の検査をしたりしてそれぞれの倉庫に運ばれる。そういった役割の広場がどうしても必要です。それがこの辺になるのではないかと考えております。

- 6世紀後半から7世紀初頭の掘立柱建物群25棟検出。
- 9本柱倉庫が18棟、空白地帯を挟んで南群と北群に分かれる。
- 弥生時代に属するもの2棟程度。

# 竪穴住居の調査

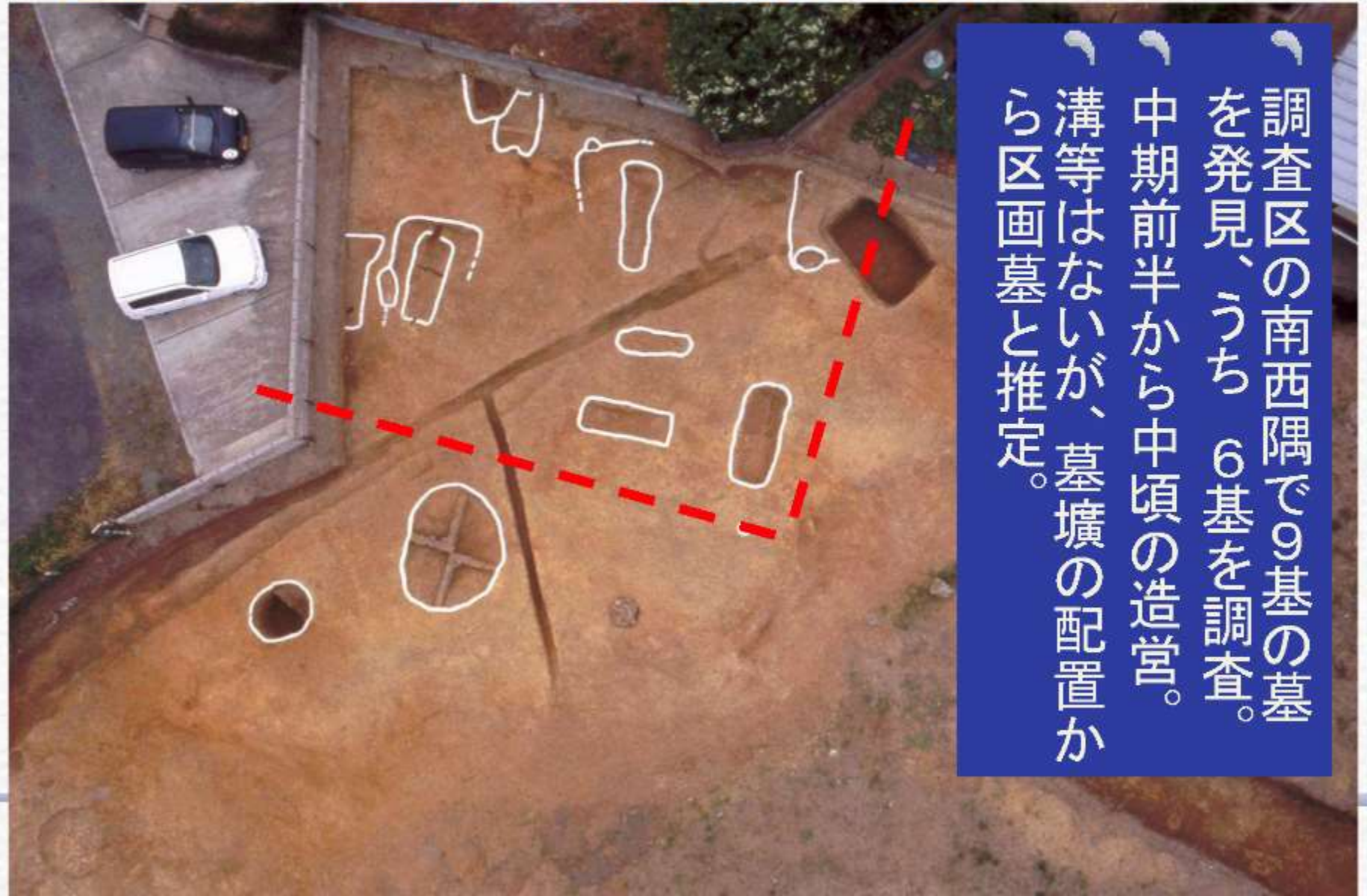




- 弥生中期頃と思われる円形住居6棟以上検出。
- 同時期存続は2棟。

これは竪穴住居。やはり学校建設などでかなり削られて、なかなか全体が分かりませんけれども、こういう柱の跡から竪穴住居が同時期には2棟くらいあっただろうと考えております。

# 墓域の全景（北東から）

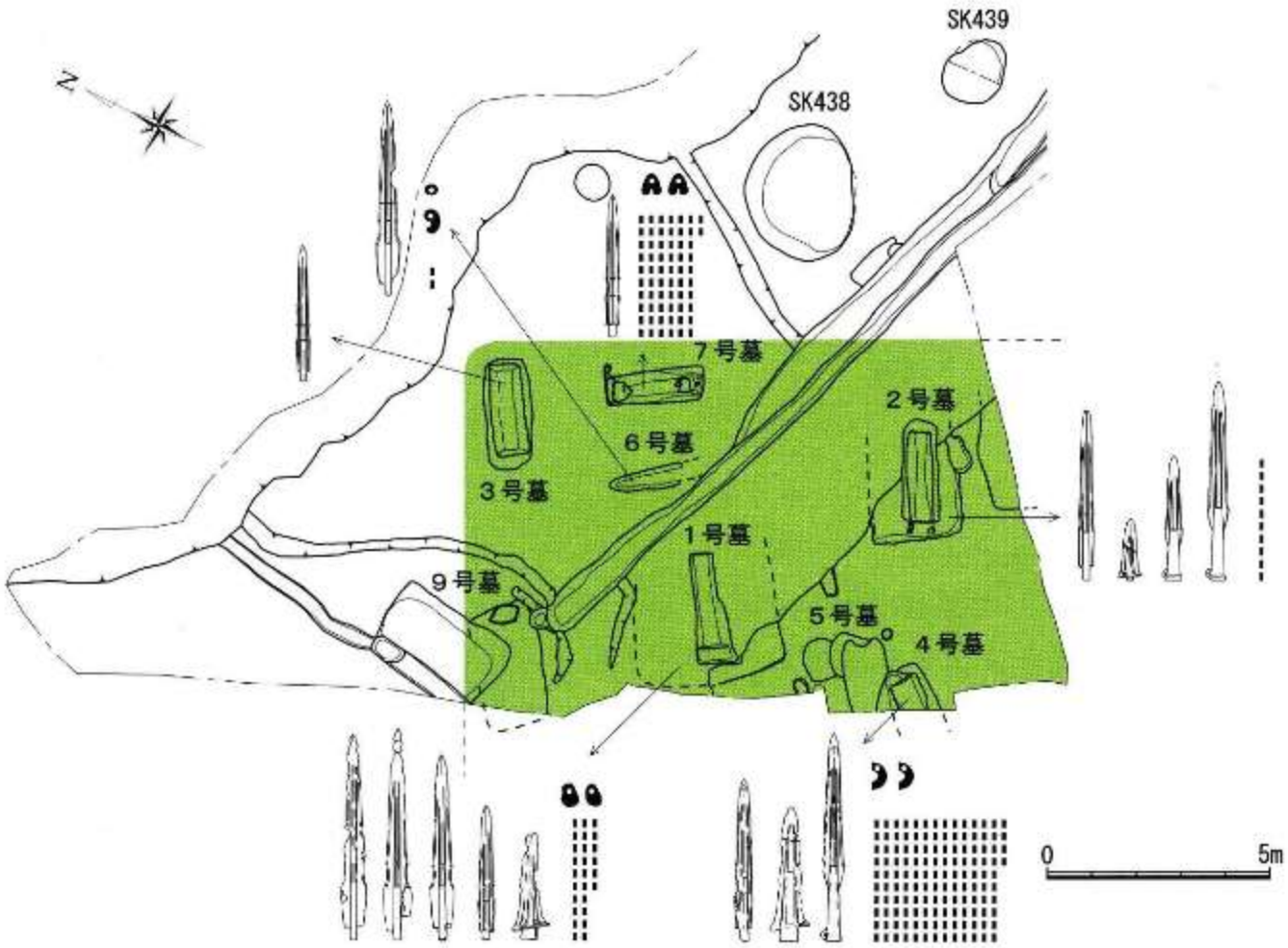


・調査区の南西隅で9基の墓を発見、うち 6基を調査。
・中期前半から中頃の造営。
・溝等はないが、墓壙の配置から区画墓と推定。

これが問題の区画墓です。お墓が、タテ・ヨコにきちんと規格的に規則正しく並んでおり、この外側にはお墓が見つかっていないということから、ちょうどお墓の方形の区画の北東隅を検出しているのだろうと考えております。

これが図ですけれども、1号墓というのを中心主体、これが銅戈、銅剣、計5点ということです。一番、今のところ大量に青銅器を持っているのがこのお墓です。それから、2号墓がその次で4本、4号墓では3本、まあ、通常の発掘の中でこんなに青銅器が出土するなんてことは、誰も想像もしておりませんでしたので、我々は青銅器まつりとか言って、頭がくらくらするような感じのなか、懸命に青銅器の調査をしていました。結果的には、15本ということになりました。

# 区画墓の全景（平面図）

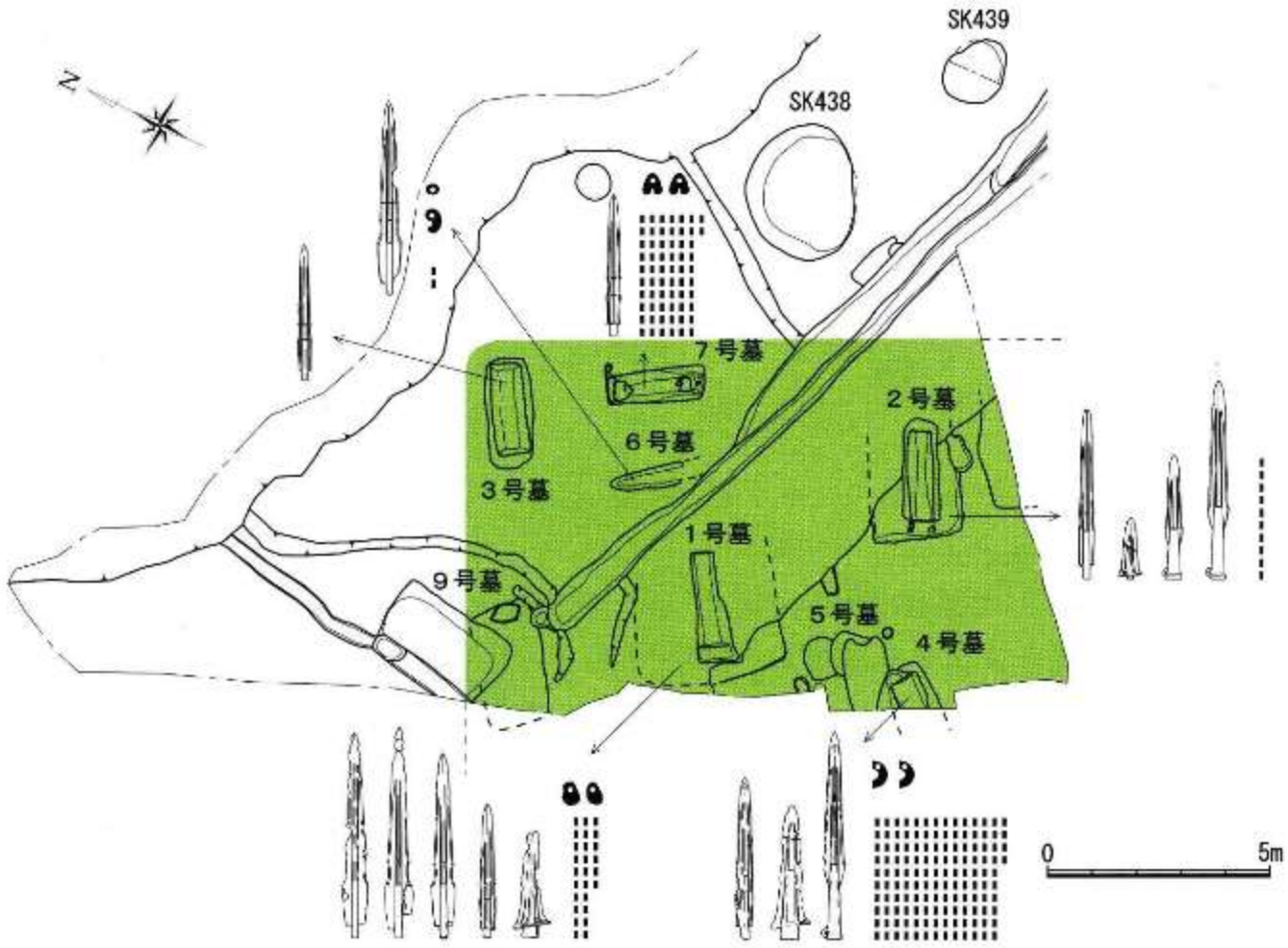



第 151 図 墓域遺構配置図及び出土遺物（1/200）

- 調査した6基すべての墓から青銅器出土。
- 5点を最多に4点・3点といった複数埋葬が特徴。

# 区画墓の全景（平面図）

やはり区画墓の隅の部分は、1点ずつといったところで、中心に近いほど数を多く持っているというようなことが分かるかと思います。




第 151 図 墓域遺構配置図及び出土遺物（1/200）

- 調査した6基すべての墓から青銅器出土。
- 5点を最多に4点・3点といった複数埋葬が特徴。

# 1号墓の全景

中世（鎌倉時代）の溝で削平されているが、奇跡的に青銅器などは残されていた。

これが1号墓ですね。お墓は木棺です。丸太を半裁して中をくり抜き、そこに死者を葬るというようなタイプの木棺です。ですから、北部九州でよく出土している甕棺というのは、実は宗像には分布しないというのがひとつ大きな特徴です。

これは、そのアップですね。頭がこの辺ですので、切先を足元に向けて銅剣や銅戈が備えられています。

# 1号墓遺物出土状況

切先は足元を向く。左側に頭骨がわずかに残る。

これはヒスイ製の垂飾という装身具です。頭部につける髪飾りだと思います。

# 1号墓装身具出土状況

碧玉製（へきぎょくせい）管玉（くだたま）、ヒスイ製垂飾（すいしょく）のセットが2つ出土。

これも青銅器の出土状況ですね。大人と共に、子どもの骨も一緒に葬られているケースもありました。

# 2号墓出土青銅器

ミニチュアの銅戈1本、銅矛2本、銅剣1本の計4本が出土。子どもの骨も一緒に埋葬される。

# 4号墓全景

人骨と銅戈、銅矛、銅剣のほか、管玉・勾玉のネックレスが出土しています。2分の1は調査区外へ延びる。

これもそうですね。半分ちょっと、お隣の敷地に入っておりますけれども、こんな形で検出しております。頭の上に、銅戈という武器が置かれています。

# 区画墓出土遺物

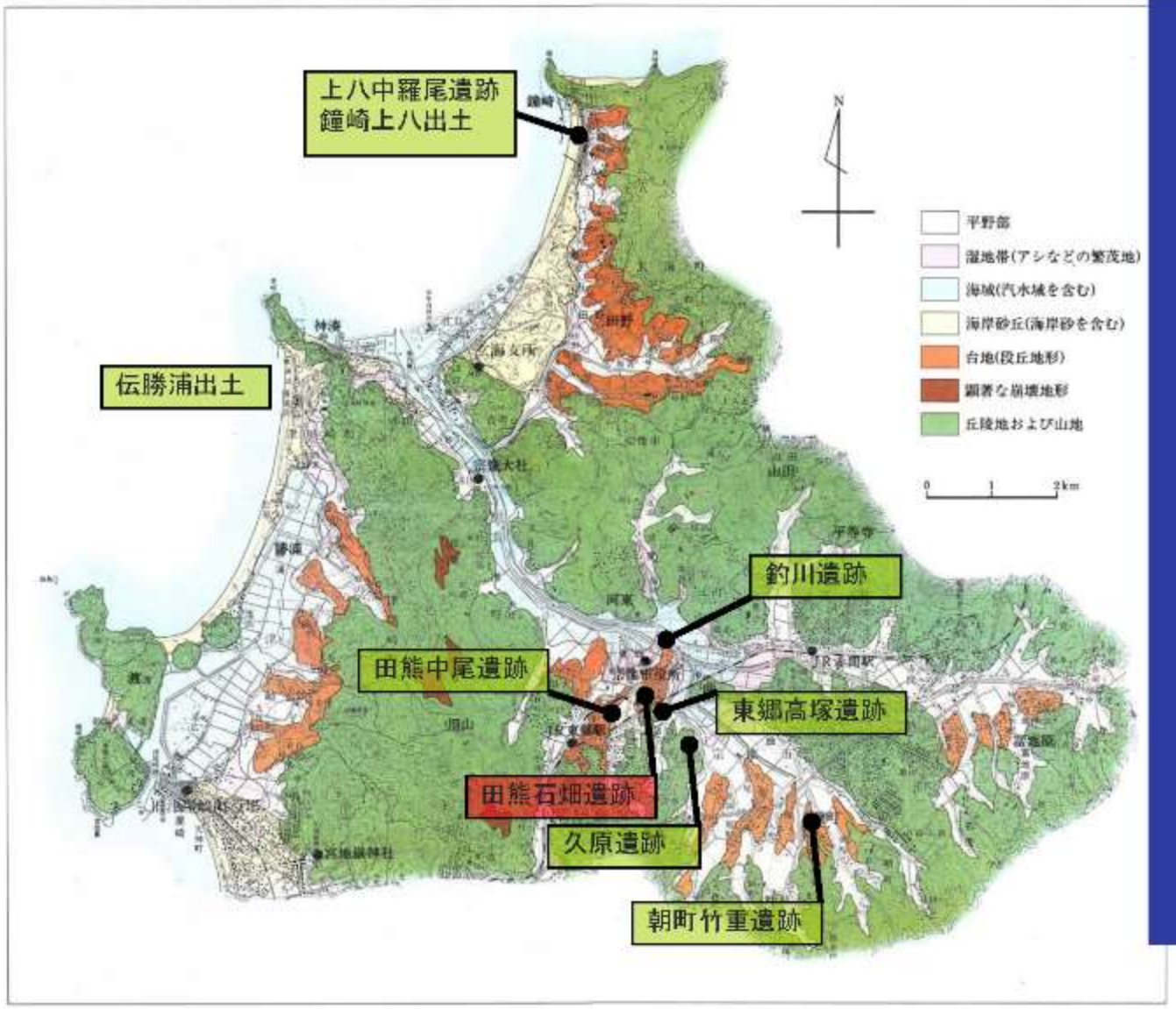
「銅剣9口・銅矛3口・銅戈3口。計15点。

これは、全部を合わせた15点の集合写真でございます。これは、剣、矛、戈という3種類の青銅器、それから、ヒスイ製勾玉・垂飾や碧玉製管玉、装身具。合わせてこれは全部、つい最近、国の重要文化財に指定されました。宗像市所有の重要文化財というのは、実は初めてです。

「宗像に国宝とかいっぱいあるんじゃないの？」と言われますが、国宝8万点の沖ノ島辺津宮祭祀遺跡出土品などは宗像大社の所有であり、本市にとっては初の重要文化財となりました。

# 宗像地域の武器形青銅器分布

縄文時代(約4,700年前)の宗像の地勢




・東郷・田熊地区が武器形青銅器分布の中心。

・沖ノ島からも細形銅矛出土。

こういった青銅器がどんな所から出るかというと、やはり田熊石畑遺跡を中心としたエリア、田熊中尾、釣川遺跡、東郷高塚、久原、まさにここですね。ここにも大きな弥生の遺跡がありますから、ここが弥生の中心地であると、あらためて田熊石畑遺跡の出現で思い至るわけです。このほか、内陸部の朝町竹重遺跡、それから沿岸部にも青銅器を出土する遺跡があります。そして、忘れてはならないのは、沖ノ島からも細型銅矛が出ていることです。

さて、田熊石畑遺跡の特徴を見ますと、一つは田熊の土器類は、中期前半の須玖Ⅰ式が中心で、福岡平野などの土器に近い様相ですが、遠賀川より東側、日本海側の影響を受けたタイプの土器も出土しているということ。それから、外来系では瀬戸内のものもありますし、朝鮮系の土器などもあるということ。そして、青銅器についても、中枢圏（福岡市近郊・奴国）に次いで、かなりの数の銅矛が出土しているということ、また、銅戈を大変重要視した埋葬をしているということです。

# 田熊石畑遺跡の土器・青銅器

土器は、弥生時代中期前半の須玖１式土器が中心。遠賀川以東の様相を示す土器も出土。また、破片資料に北部九州外の土器あり。主に瀬戸内系。擬朝鮮系無文土器片。

宗像地域の青銅器は、中枢部に次いで多数の銅矛を保有する。また、銅戈を重要視している。

玉類も、やはり全体として東日本系の管玉が多く、北陸の西部の要素が強いのです。どうも東の関係が強い。また、ヒスイも良質ですけれども、よく分からない物もあります。類例がないのですね。同じ形がない。その中で、採集品の中にきわめて透明度の高いヒスイの破片がありました。

# 田熊石畑遺跡の玉類

土井ヶ浜遺跡223号人骨

- 玉類は、全体に北部九州通有の様相を示しながらも北陸西部産とされる東日本系管玉が多い。
- ヒスイ製垂飾類は良質だが、形状に類例がない。
- 墓域外だが表採資料のヒスイ製未製品は、土井ヶ浜遺跡出土の糸魚川産ヒスイ製勾玉に酷似する。

これは、貝輪など装身具の研究で著名な木下尚子先生という方がいらっしゃいますけれども、土井ヶ浜遺跡に似ているのがあると聞き、それで、早速報告書を繰ってみますと、223号人骨と一緒に出土したものに写真の上ではそっくり。下は土井ヶ浜遺跡出土品の写真、上が田熊石畑遺跡のもので、報告書に田熊石畑遺跡採集品を乗せて写真を撮っておりますけれども、どうやらこれもまた一つ、日本海沿岸部との関わりをうかがわせる例と考えられます。

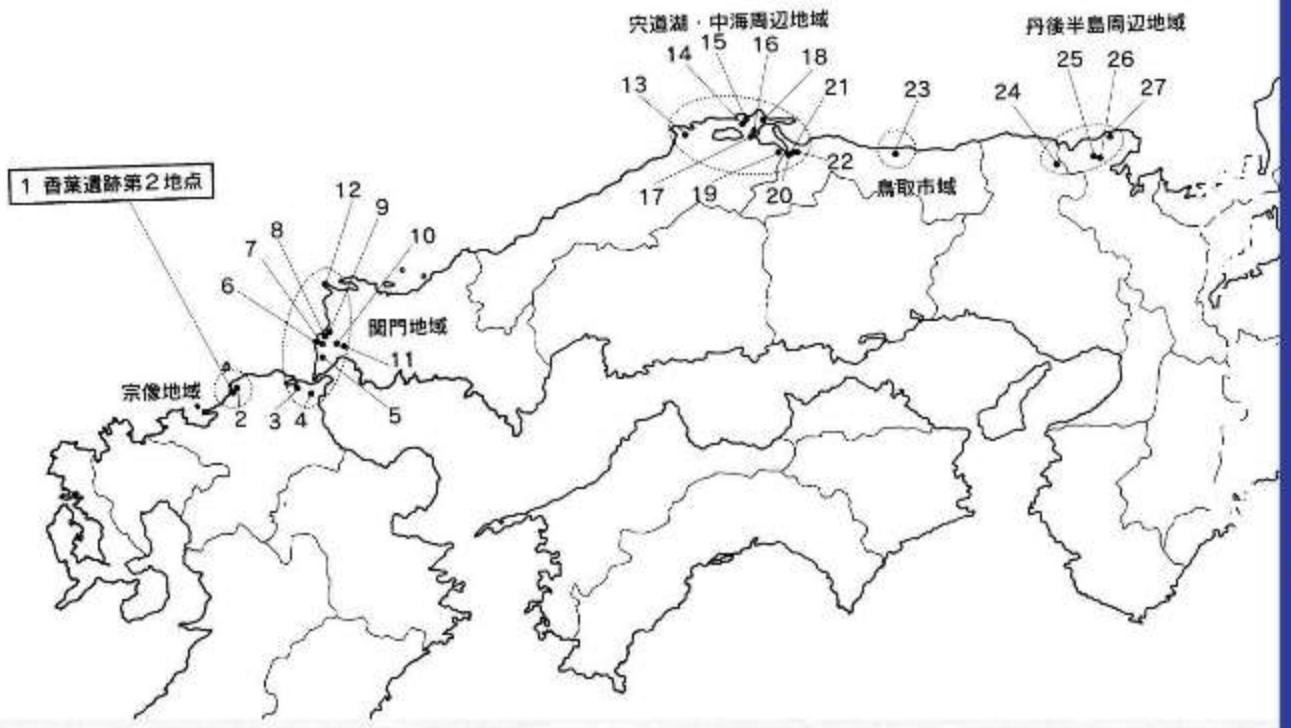
# 田熊石畑遺跡の玉類

土井ヶ浜遺跡223号人骨

- 玉類は、全体に北部九州通有の様相を示しながらも北陸西部産とされる東日本系管玉が多い。
- ヒスイ製垂飾類は良質だが、形状に類例がない。
- 墓域外だが表採資料のヒスイ製未製品は、土井ヶ浜遺跡出土の糸魚川産ヒスイ製勾玉に酷似する。

そういったところを考えるなかで、土笛というものに注目したいと思っています。土笛、陶塤（とうけん）とも申しますけれども、これはなぜか日本海沿岸部ばかりから出る。そして、その分布圏の西端が宗像地域です。関門地域とか、出雲、鳥取、それから丹後半島の一部に集中しており、不思議な出方をしています。これは一つ単なる楽器というよりも、政治的な器物ではないかという考えもあり、これもまた対馬海流を介した日本海沿岸部とのつながりの深さをうかがうことができます。

# 弥生時代　土笛の分布




- 大半が日本海沿岸で出土。
- 土笛を介した農耕祭祀を共有する集団ともいわれる。
- 単なる楽器ではなく政治的器物ともいわれる。

2014松永通明『香葉遺跡第2地点』福津市文化財調査報告書第8集より引用

宗像市光岡長尾（みつおかながお）遺跡から1点出土していましたが、最新事例としては福津市香葉（かば）遺跡から出土しましたが、これはもう、宗像より西側地域では出てはいけないと固く思っていましたが、福津市は宗像地域なので大丈夫です。個人的に甕棺墓文化圏には原則土笛は分布しないと考えています。

# 宗像地域出土土笛の新事例

- 福津市香葉遺跡（かばいせき）
- 弥生時代前期末から中期初頭の貯蔵穴より出土。全長8．7センチ。
- 宗像地域で2例目

つまり、土笛の分布と真逆を示すのが、甕棺というお墓の形態です。
ちょうど、古賀市の辺に分布の境がございます。
甕棺の見つかった馬渡・東ケ浦遺跡がこの辺で、青柳川という小河川近辺でどうも分かれる。ここから東は木棺・土壙墓、西は甕棺墓文化圏ということです。

# 大形甕棺の分布

- 宗像地域、遠賀川下流域には分布しない。
- 古賀市青柳川付近が北限。
- 土笛と大形甕棺墓は真逆でどちらも偏った分布を示す。

そんな中で、この弥生のクニの推定図の宗像地域に赤い線を入れていますが、田熊石畑遺跡という存在から、ひとつ宗像でもこういった国を考えていいのではないか、という推定で示しております。弥生時代のクニグニはそれぞれに大きな遺跡を持っております。宇木汲田遺跡、桜馬場遺跡、吉野ケ里遺跡、吉武高木遺跡、三雲遺跡など著名な遺跡があります。では、宗像は、というところで、この田熊石畑遺跡となるわけです。

# 北部九州のクニグニ

弥生時代中期～後期の主要遺跡とクニの推定範囲。地形の独立性や青銅器を求心的に出土し、前方後円墳など後世の重要遺跡が集中する地域。

最も保守的な儀礼である墓制が違うということから、奴国や伊都国とはちょっと文化が違うのではないかなと思います。ただ、青銅器文化の影響は受けていて、威信財、宝物としての青銅器は大変好んでいます。どうも、それを東方に伝える役割があったのかどうかなど、後の先生方のお話で出るかと思います。私としても響灘以東の人たちとの政治的な結束があるのではないか、といったことも一つの仮説として考えています。

# ムナカタと響灘以東との交流

弥生時代を通じて甕棺墓制を受け入れなかったことから、強大なイト・ナ国の直接的支配化にはなかったのではないか。

しかし、文化的影響は受け、特に威信財としての青銅武器は享受し、東方伝播に一定の役割をになった。

一方、政治的器物とされる土笛に見るよう響灘以東、日本海文化圏の一員として政治的結束を持ち、海上航路を通じて緊密な交流が行われていた。

さて、この田熊石畑遺跡の説明は以上でございますが、遺跡は今、歴史公園として整備しておりまして、ここを活動の場とする「田熊石畑遺跡村づくりの会」というサポート団体がございます。今日も、受付、会場案内をお願いしていますが、ここの遺跡は手づくりで歴史公園をつくろうじゃないかというところに特徴がございます。

# 田熊石畑遺跡の調査報告

宗像市郷土文化交流課　白木英敏

復元遺構がぽんとあって、ただ見るだけではなくて、自らの手でいろいろ、例えばベンチ一つも、みんなで作ってみても楽しいのではないかと考えています。花園もありますので、市民歴史農園、あるいは花園など、多様に使いたいと思います。ぜひ、賛同される方はお仲間になってもらえればと思っているところです。

御清聴ありがとうございました。

# 田熊石畑遺跡の調査報告

宗像市郷土文化交流課　白木英敏

# 「むなかた電子博物館」の１０年　伊津信之介

宗像電子博物館は「むなかた電子博物館」(http://d-munahaku.com/)として2005年４月公開され、市民が「あつめる・ためる」、デジタルで「そだてる・つなぐ」まちづくりに「いかす」をコンセプトに運営されてきた。

2014年から宗像市の、市民サービス協働化事業としてむなかた電子博物館運営委員会がむなかた電子博物館運営業務をおこなっている。運営業務は、運営計画の作成及び報告、コンテンツの保守・更新及び拡充業務、海の道むなかた館展示との連携、北斗の水くみＰＲ事業、むなかた電子博物館紀要発行などである。

スマホからはQRコードで

## １．むなかた電子博物館の生い立ち

むなかた電子博物館の公開に至るプロセスはむなかた電子博物館紀要創刊号にむなかた電子博物館の可能性として掲載されている。

http://d-munahaku.com/culture/kiyou/files/kiyou_090401/24-41.pdf

また2013年発行の紀要５号には、市民協働「むなかた電子博物館」 と題してその後のむなかた電子博物館の活動と評価がまとめられている。

http://d-munahaku.com/culture/kiyou/j-kiyou_2013.html

「むなかた電子博物館」は宗像市の掲げる『協働』事業のモデルとして、市民が参画して創り、運営に参加して育てていくことが最大の意義である。宗像市は、市民主役の市民活動を支援（助成）し、「むなかた電子博物館」を新しい概念の事業として運営する仕組みの整備を行うことも重要な目的に掲げられた。

## ２．2015年のむなかた電子博物館

むなかた電子博物館運営委員会が運営計画の作成及び報告、コンテンツの保守・更新及び拡充業務、海の道むなかた館展示との連携、北斗の水くみＰＲ事業、むなかた電子博物館紀要作成を年４回程度開催される運営委員会にて審議し順次具体化させている。

WEBで公開されている博物館なので新しいWEBアプリケーションサービスによって思いがけない展示が行われている。

その一つが、ウェブサイトで見つけた写真を、見てわかるブックマークのようなピンを通して、趣味や好きなことについて発見したりするツールPinterestである。

Wikipediaによると、2011年８月16日、タイム誌は「50 Best Websites of 2011」の１つとしてPinterestを選出した。12月、サイトは最も大規模な10のソーシャル・ネットワーキング・サービスの１つになり、ヒットワイズ（英語版）のデータによれば週あたりの総アクセス数は1100万に上るという。2012年１月にはトラフィックがLinkedIn、YouTube、Google+を抜き、さらにTechCrunchによって2011年のベストニューベンチャーに選定された。2012年１月、comScoreによると登録ユーザーは1170万人に上るとされ、1000万人を超えたサイトの中では最速のペースだとしている。以下のURLがd-munahaku.comというタイトルでむなかた電子博物館の写真をHaruo Shimamotosさんがまとめたpinterestである。https://www.pinterest.com/source/d-munahaku.com/

このようにむなかた電子博物館は宗像地域に関連した「共有知」をインターネット上にWEB形式で公開する事で、新たな活用を生み出す事ができると考えられる。そのベースである電子博物館の展示の骨組みとなる事業を詳説する。

## ２-1. 北斗の水くみ PR 事業

秋の夜半には北斗七星が北極星と水平線の間を西から東に移動し、まるで天のひしゃくが水をくんでいるように見える。これを天の北斗七星が水をくむというわけで「北斗の水くみ」と名づけた。

宗像地域の海岸線は北緯 33 度付近に北東南西に分布し「北斗の水くみ」には最適な位置にある。しかし沖合は日本有数のイカ釣りの漁場であり漁り火が絶えることはない。また大気汚染や天候の経年変化によって北斗七星の観察も容易ではない。北斗の水くみは、地球規模ではでは九州北岸、地中海南岸、アメリカ南部で観察が可能と考えられる。この緯度で海を臨む都市は世界的にも珍しいところにあり、そこで、北の夜空の響宴「北斗の水くみ」のむなかたと言える。

第 7 回 2014 年の写真展は、募集期間　8 月 1 日（金）～10 月 31 日（金）、応募条件　2013 年 11 月 1 日～2014 年 10 月 31 日に撮影された写真、作品条件　「北斗の水くみ」、さらに各地の「北斗七星」の姿を写したもの、応募方法　むなかた電子博物館にて投稿、写真規格　デジカメ、１眼レフカメラ等による JPEG データ、期間内に撮影されたもので未発表の作品、合成写真でなく提出者が著作権を有する事として行なわれた。

この北斗の水くみ写真展の募集・審査・表彰・展示・普及を通して宗像のありのままの自然と謙虚に接する一助となることを願っている。この取り組みの結果、2014 年の第 7 回北斗の水くみ写真展で始めて最優秀作品が誕生した。それは島村直幸さんによる『波涛の北斗』である。

この写真展の受賞作品は電子博物館玄関ホール（トップページ）に掲載され来館者の目に触れやすい展示を行っている。

## ２-２. むなかた電子博物館紀要発行事業

むなかた電子博物館紀要は 2010 年から発行を始め、2014 年に第 5 号を発行した。紀要は博物館の調査研究を公開するとともに、博物館展示物の充実を図る目的で創刊された。紀要の論文資料の執筆者はむなかた電子博物館運営委員を初めとする在野の研究者である。この執筆には謝礼は支払われず、発行された冊子版紀要を贈呈するだけである、それにも関わらずむなかた電子博物館を論理的に構成する貴重な論考が寄せられている。

## 2-2-1. 紀要論文「新立山の蝶相」の博物館展示

2012 年４月１日発行 むなかた電子博物館紀要４号掲載の「新立山の蝶相」　西田迪雄著は論文として博物館から閲覧できる。

筆者は４年前より宗像市の東南に位置する新立山（標高 326m）の登山道での蝶の撮影を通してその地に棲息する種の調査を行ってきた。新立山における蝶の調査は過去に実施されたことがない。その理由は殆ど全山杉の人工林のため、蝶の幼虫が食べる食草が貧弱であり、昆虫研究家にとり魅力ある場所とは言えなかったことにある。しかし、昆虫、特に蝶に関しては未調査の地であるので、ここで観察した蝶を紹介するのは意義深いものであると考える。

新立山の登山道は良く整備されており、急坂の箇所は少ないので休日にはハイキング気分で登る人がちらほら見られる。登山道入り口は「正助ふるさと村」で、ここには大駐車場があり、これを上ったところに貸し農園がある。駐車場と貸し農園との間には秋になると彼岸花（写真 1）が満開になり、これにアゲハが吸蜜に来るのが見られる（写真 2）。

この紀要論文を電子博物館展示物としてハイパーリンク等を使った W.W.W（ワールド・ワイド・ウェブ）の HTML 形式で掲載されている。これによって宗像市新立山を中心とした蝶類の図鑑としての機能を有している。研究論文を根拠として HTML によって記述し展示された「むなかたの蝶」はフィールドにおける観察をモバイル端末（スマホやタブレット）で可能とし、常に最新の記載へとリンクされている。

創刊号からの内容は以下の通りである。各執筆者の右の数字は PDF ファイルの容量である。

### むなかた電子博物館紀要１号 2009 年４月１日発行（Link→）

- 創刊にあたって　平井正則
- 座談会：「むなかた電子博物館」の現在と未来　西谷正他（1.0MB）
- 「むなかた電子博物館」の可能性　伊津信之介（1.6MB）
- 田熊石畑遺跡発掘現場から　白木英敏（2.0MB）
- 田熊石畑遺跡の保存を求める市民運動について　矢田公美（1.6MB）
- 宗像郷土館の変遷　平松秋子・花田勝広（2.3MB）
- 鐘崎縄文人が身につけていた貝輪をつくる実践　鎌田隆徳（2.7MB）
- 「北斗の水くみ」研究　平井正則（1.2MB）
- おわりに　清水比呂之（0.6MB）
- 「むなかた電子博物館」活動記録　編集委員会
- 委員会名簿（63KB）

### むなかた電子博物館紀要２号 2010 年４月１日発行（Link→）

- 巻頭言　平井正則（1.18MB）
- 座談会：科学への憧れ「WEB 博物館の役割」　宮原三郎他（1.85MB）
- フランス情報化政策とミュージアムの教育普及における取り組み　星野浩司（1.87MB）
- 江口海岸の縄文遺跡　～さつき松原遺跡の調査から～　白木英敏（1.87MB）
- 宗像地域の古代史と遺跡概説　花田勝広（1.84MB）
- この瞬間、この感動、そして、想いを記録に　平井正則（2.02MB）
- さつき松原遺跡の発見と海岸浸食　伊津信之介（1.79MB）
- むなかたの弥生時代の人々のくらし　鎌田隆徳（1.97MB）
- 文献にみる宗像三女神降臨伝承について　平松秋子（1.97MB）
- むなかた地域遺跡分布図（第１版）　古川修士・伊津信之介（1.4MB）
- 2009 年～2010 年の「むなかた電子博物館」　清水比呂之（1.29MB）
- 編集後記　伊津信之介（1.29MB）

### むなかた電子博物館紀要３号 2011 年４月１日発行（Link→）

- 巻頭言　平井正則（1.38MB）
- 座談会：社会教育施設としての水族館　高田浩二他（1.74MB）
- ICT 活用による博物館の進化　高田浩二（2.47MB）
- 漂着物の四十年（玄界漂着譚）1968 年－2010 年　石井忠（2.06MB）

- 城郭から見た宗像の戦国時代-大宮司宗像氏貞の時代を中心として-　藤野正人（17.51MB）
- 北斗水くみ研究-北斗ダイアルをつくろう-　平井正則（2.11MB）
- むなかたの弥生時代の人々のくらし（2）～ 石包丁をつくろう ～　鎌田隆徳（1.99MB）
- 「田熊石畑遺跡と古代のムナカタ展」を終えて　白木英敏（1.56MB）
- 宗像市郷土文化学習交流施設の概要 博物館建設に向けての市の動き　清水比呂之（1.43MB）
- 旧宗像市民俗資料館について　平松秋子（1.67MB）
- 「むなかた電子博物館」の評価と課題　上田めぐみ（2.02MB）
- 編集後記　伊津信之介（1.38MB）

*むなかた電子博物館紀要４号 2012 年４月１日発行（Link→）*

- 巻頭言　平井正則（563KB）
- 座談会：日本文化と調和した動物園　岩野園長　（727KB）
- 到津の森公園 散策を終えて（公園訪問記）　伊津信之介（842KB）
- エコツーリズムのマネジメント　大方優子（727KB）
- 戦国期における宗像氏の家督相続と妻女　桑田 和明（794KB）
- 中世の宗像神社と鎮国寺　花田 勝広（3.25MB）
- 新立山の蝶相　西田迪雄（3.74MB）
- 北斗の水くみ写真展５周年へ向けて　平井 正則（568KB）
- 「むなかた電子博物館」活動記録　堀 温子（620KB）
- 編集後記　伊津信之介（564KB）

*むなかた電子博物館紀要５号 2013 年 10 月１日発行（Link→）*

- 巻頭言　平井正則（756KB）
- 座談会：世界のロボット開発の最前線から ーテムザック高本陽一氏を囲んでー　（1.09KB）
- 宗像氏貞妹の婚儀とその生涯 ー宗像氏貞・戸次道雪との関係を中心にー　桑田 和明（928KB）
- 宗像氏貞の居城「岳山城」について　藤野 正人（4.51MB）
- プラネタリウム自主制作番組 「むなかたの星空と菊姫さま」記録　梅村幸平・平井正則（1.52MB）
- むなかたの蝶の食草・食樹　西田 迪雄（6.5MB）
- 「北斗の水くみ」は永遠か？　平井正則（1.05MB）
- 市民と楽しむ「いせきんぐ宗像」の歴史公園づくり白木 英敏（1.53MB）
- 市民協働「むなかた電子博物館」　伊津 信之介（885KB）
- 編集後記　宮川 幹平（729KB）

## ２－３.海の道むなかた館との連携事業（Link→）

海の道むなかた館は、むなかた地域の郷土文化資料の展示と体験学習を行なう施設として 2014 年開館した。この館の性格から展示物のデジタルアーカイブ機能をウェブサイトに置いていない。したがってむなかた電子博物館との連携事業によって、海の道むなかた館の図録や企画展の内容を蓄積公開するのが本事業の目的である。

2015 年３月の段階では図録に使用した図版や写真のインターネットにおける公開の許諾が得られていないので、むなかた電子博物館で公開はされていない。一方で海の道むなかた館の企画展については、むなかた電子博物館運営委員が取材を行ない速報として公開している。

## 3. むなかた電子博物館の開館と特徴

むなかた電子博物館は受託事業者を公募し、（株）パスコと熊本ソフトウエア（株）（現ＭＩＳ九州）の共同事業体が選考委員の投票によって決定された。受託した協同事業体は、市長への提言を反映させ

た建設計画を策定し、第１回構築検討委員会が開催された。以下は第１回委員会で提示された協同事業体からのプレゼンテーションの一部である。

### 3-1. 柔軟なシステム構成

拡張性、新規投入システムとの互換性があり、従来の一般ソフトとの簡易な連携

### 3-2. 特別でない機能的なシステム

アーカイブという多くの作業者が係わる実作業の流れを念頭に置いた、不要なライセンスを必要としない機能的で効果的なシステム。

### 3-3. オープンソースライセンスに基づく経年構築型パッケージ

オープンソースライセンスに基づく効率的かつ効果的なシステムで経年ごとに拡張構築が可能とする。

### 3-4. メディアプロデュースの投入

単に、収蔵作品をデータベース化するのでなく、よりユーザーに愛され、育てて、教育や産業など多くの面で効果的なメディアプロデュースを進める。

### 3-5. それぞれの環境に合わせたシステム構成

従来の展示施設では、完成された巨大で高価なパッケージをそのまま一律に導入するケースが多かったが、各事業によって展示の内容、規模やコンセプトなどが異なる点を配慮したシステム構成とした。

このようなコンセプトに基づいて（株）パスコと熊本ソフトウエア（株）（現ＭＩＳ九州）の共同事業体が策定した開館から数年間の建設計画は以下の通りである。

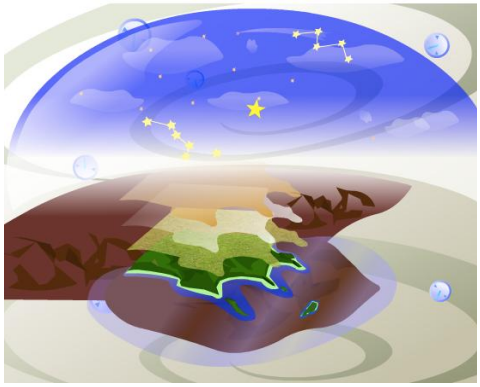
2004 年度：基本コンテンツ作成、英語版・日本語版作成、簡単入力システム、歴史・文化・民族・観光・産業・自然科学等の基本情報の入力、その他各種デジタルコンテンツの作成

2005 年度：歴史・文化・民族・観光・産業・自然科学等の基本情報の入力、韓国語版・中国語版・スペイン語版の拡充、マップ上データベース GIS によるデータベース情報の整理統合

2006 年度：歴史・文化・民族・観光・産業・自然科学等の基本情報の入力、各種コンテンツを活用したバーチャル博物館としての展示システムの拡張、ネットフォーラムによる各種イベントの開催

その後７回にわたる委員会で検討を重ね、2005 年４月下旬公開の運びとなった。

## ３-1. 階層構造を持つ博物館展示



むなかた電子博物館の入り口（以下玄関）は一般的ウェブサイトではトップページと呼ばれる。開館からしばらくの間は「早わかりむなかたナビ」がそこに置かれ、むなかた電子博物館の階層構造の象徴であった。この展示物は地球儀の一部を模した造形で、マウスポインタを当てると、「海の話」、「地上の話」、「動植物の話」、「人の話」、「文化の話」、「北斗七星の話」へと誘導するナビゲーションとなっている。制作者の意図を閲覧者に伝える仕組みが適切でなかったため、「なんだか解らない」という意見に押し流され、バナーとして小さく表示されることになっ

た。フラッシュ(Adobe Flash) を使った階層構造表現として良く出来たプログラムであったが、写真や画像のフラッシュによる切り替え表示という、月並みな玄関になってしまった。

早わかりむなかたナビへのリンクバナー

## 3－2.歴史性と階層性を持つ博物館展示

むなかた電子博物館玄関（トップページ）の右上段に「むなかた仙人」のリンク文字がある。これをクリックすると電子博物館のキャラクター「むなかた仙人」を初めとする小道具などの案内が表示される。この画面の右端に「仙人七つ道具」バナーがある。そのすぐ下に小さな「仙人のふしぎ地図」という小さなリンク文字がある。これをクリックすると仙人のふしぎ地図～総合編が表示される。これは前述の早わかりむなかたナビと同様にフラッシュによるグラフィック・アニメーション表示でむなかた地域の特徴を表示するものである。示された画面クリップは、むなかた地域の航空写真の上に鉄道路線と道路を重ねて表示した上に、さらに今から約６千年前の縄文時代の古地理図を重ねて表示したものである。この表示のバランスは仙人のふしぎ地図左の各種スライダーによって調整することができる。これによって歴史性と階層性を併せ持つ博物館展示が実現した。

縄文時代の古地理を表示した仙人のふしぎ地図

## 3－2.タイムマシンのような博物館展示

むなかた電子博物館玄関（トップページ）右端中段のバナーに「むなかたギャラリー今昔」へのリンクがある。これをクリックすると「むなかた仙人のタイムマシン」が表示される。地図上の黄色のマーカーをクリックするとその場所の今の写真が表示される。表示された写真の右上「写真のきりかえ」ボタンをクリックすると昔の写真と今の写真を切り替えることができる。

このようにフラッシュというプログラムによって時歴史性を強調する展示が可能になった。あたかもタイムマシンで時空をさまようような楽しみを体験することができる。

むなかた地域の住人に古い写真の提供をもとめることで多彩なギャラリーへと発展することは間違いない。ここで写真の提供というのは一時的に借りてスキャンしデジタル化することである。作業終了後写真は元のまま提供者の手元にもどる。開館から 10 年が経過したがこの作業は行われていない。

## 3－3.むなかた仙人などのキャラクターについて

むなかた電子博物館玄関（トップページ）右端上段に「むなかた仙人」の小さな文字列のリンクがある。これをクリックするとメインナビゲーター　むなかた仙人の紹介がある。そこの記述によると『電子博物館の特別な存在である「むなかた仙人」はさまざまなコーナーで大切なヒントをくれます。また、

メインのナビゲーターとして来館者がよりわかり易く見て回れるように「仙人の七つ道具」を貸してくれますよ。みなさんも是非、「むなかた仙人」に弟子入りして、次の「むなかた仙人」をめざして下さい。』とあり、仙人や仙人の道具が紹介される。しかしむなかた仙人や仙人の道具が電子博物館で注目される事がないまま十年が過ぎてしまった。

むなかた仙人の他に、歴史、文化、自然のコーナーにキャラクターが設定されている。

**【歴史コーナー】むなかた歴史先生**

（プロフィール）本名：久原徳善（くはらとくぜん）
歴史の話をしだすと止まらない古墳発掘に命を燃やす４３歳の１児のパパ。かつては、ヨットマンとして海に生きる青春時代をすごし、何事もやり始めると徹底してやらないと止まらない性格。

**【文化コーナー】むなかた文化先生**

（プロフィール）本名：山田尼子（やまだあまこ）
読書と音楽をこよなく愛し、歴史小説を特に好む２６歳の独身。もともと宗像の出身ではないが、宗像の大学で学んだことをきっかけに、宗像のことを好きになり、移り住むこととなる。最近では休みの日に友達と山登りを楽しむ活動的な一面も。

**【自然コーナー】むなかた自然先生**

（プロフィール）本名：玄海正助（げんかいしょうすけ）
生粋の宗像人。幼いころより鶏の世話をすることにより、生き物や自然に興味を持った３４歳。大の釣り好きで休日やたまに時間が空けば海に釣りに出かけ、季節によっては、昆虫採集や植物の観察を楽しみとしている。

生身の教師ではなくこのようなキャラクターを設定したのは、アバター（avatar）として来館者になりかわってむなかたを探検し発見を促す意図があったと思われる。そもそもアバターとは、コミュニケーションツールで、「自分の分身となるキャラクター」のことである。したがって上から目線の教師イメージではなく、来館者が主人公となってむなかた電子博物館をめぐっていく。

## ４．むなかた電子博物館のこれから

開館に至るむなかた電子博物館の理想が何故実現されなかったかについてを問い直すより、いかに理想を実現するかがむなかた電子博物館の最も重要な使命である。

## ４－１.博物館の基礎システム

オペレーティングシステム(OS)のソースプログラムにアクセスでき、プログラムの改良が特定企業に依存しないで行えるオペレーティングシステム(OS)としてGPLやBSDなどのライセンスで公開されている、GNU-LINUXやFREE-BSDなどの選択が望ましい。「むなかた電子博物館」が市民参加のシステムであることから、ＣＭＳなどによるシステムの管理運営を実現させることが必須である。このシステムは独自に開発するよりも汎用性のあるオープンシステムを基にして改良を加えることが望ましい。したがって使用するＣＭＳによって、WWWサーバ（APACHEなど）、データベース（MySQL等）、スクリプト処理言語（PHP等）などが規定される。

http://d-munahaku.com/culture/kiyou/files/kiyou_090401/24-41.pdf

むなかた電子博物館の計画段階で市民協働の実現のために上記のシステムを提案した。10年目から再出発としてむなかた電子博物館の基礎をしっかりと検討することが大事である。

## ４－２.入館者を識別するログイン機能の実現

入館者の年齢や入館回数の違いな手どによって表示内容を代えることを実現させるためには、十分なログイン機能を備えたCMS（コンテンツ・マネージメント・システム）が必須である。このログインによって年齢別、言語別、目的別など入館者の階層別管理が可能になる。多彩な CMS が存在しているので、むなかた電子博物館に最適なCMSを選択し、プログラムの改造を行なう必要がある。筆者は10年以上前からXOOPSを使ってきたが近年の多彩なCMSの特徴をすべて把握する事は難しい。以下にもっとも一般的なCMSを列挙する。

### *４－２－１．企業で使えるオープンソースCMS一挙12種類解説*

http://web-tan.forum.impressrd.jp/e/2008/07/04/3283

1.高い汎用性と拡張性「Drupal（ドルーパル）」
2.商用CMSに比肩する充実度「eZ Publish（イージーパブリッシュ）」
3.軽快かつ導入しやすいCMS「Geeklog（ギークログ）」
4.海外で高評価なMambo CMS後継「Joomla（ジュームラ）」
5.コンポーネント配置でサイト構築「Magic3（マジックスリー）」
6.スタイリッシュな操作感「MODx（モッドエックス）」
7.J.ava／XMLベースのCMS「OpenCms（オープンシーエムエス）」
8.Zopeと一体化したCMS「Plone（プローン）」
9.シンプルな純国産オープンソースCMS「SoyCMS（ソイシーエムエス）」
10.完全分業化を可能にする設計「TYPO3（タイポスリー）」
11.強力な独自コンテンツ配置機能「Xaraya（ザラヤ）」
12.コンテンツ管理のしやすさが秀逸「島根県CMS（しまねけんシーエムエス）

４－２-2. オープンソース・フリーなCMS一覧

http://matome.naver.jp/odai/2139143344473224301

13.WordPress - ワードプレス
14.MediaWiki - メディアウィキ
15.baser CMS - ベーサーシーエムエス
16.Movable Type Open Source - ムーバブルタイプ　オープンソース
17.concrete5 - コンクリートファイブ
18.Baked - ベイクド
19.Drupal - ドルーパル
20.XOOPS CUBE - ズープス キューブ
21.Joruri - ジョールリ
22.Nucleus CMS - ニュークリアス シーエムエス

## ４-3. 管理運営者のコミュニケーション

市民協働のむなかた電子博物館は「むなかた電子博物館運営委員会」によって管理運営がなされている。この運営委員会は委員長以下約２０名のボランティアで構成されている。年齢、職種、経歴など多彩な顔ぶれなので、一年に数回開催される運営委員会だけでは十分な意思疎通が図れない。また自由になる時間帯もまちまちである。現在メーリングリストで情報交換を行なっている。かつて掲示板を備えたことがあったが機能不足で活用に至らなかった。

最近発表されたグループウエェアとしてアプライドの e-ConeXion が大学研究室向けに機能を選別し、研究機関や学会への適用も広げている。(http://www.e-conexion.jp/) むなかた電子博物館運営委員会はコンピュータ活用の頻度にかなりの開きがあるので、WEB ブラウザで円滑なコミュニケーションを計る為には、シンプルな操作性が求められる。2015 年５月段階で多数の研究室で利用されている。それらの導入大学は、宇都宮大学 、愛媛大学、大阪大学 、大阪府立大学、岡山県立大学、岡山大学、岡山理科大学 、香川大学 、鹿児島大学、北九州市立大学、九州工業大学、九州大学、近畿大学 、熊本大学、久留米大学、神戸大学、佐賀大学　静岡大学、首都大学東京 、千葉大学 、筑波大学、東京医科歯科大学、東京工業大学、東京大学、東京農工大学 、東北大学 、富山大学 、豊橋技術科学大学 、長崎大学 、名古屋工業大学、名古屋市立大学、名古屋大学 、奈良教育大、奈良女子大 、日本大学 、広島大学福岡教育大学、福岡県立大学、福岡工業大学、福岡大学、明治大学、名城大学、山口大学、都工芸繊維大学、京都大学、徳島大学、福井大学などである。

### *４-3-1. プロジェクト管理*

運営委員会では様々なテーマに沿ったプロジェクトが進行している。この機能はその各プロジェクトを時系列に整理し、分かりやすく確認することができる。

### *４-3-２. 原稿提出*

むなかた電子博物館の新着情報は運営委員から原稿が送付される。対象となる委員を指定して提出するフォルダを作る機能で、指定された委員のみそのフォルダが表示され、管理者と一対一での確認となる。よって他のメンバーが提出した資料は管理者と当人以外は見ることはできない。

### *４-3-3. お知らせ*

運営委員会委員のお知らせを分かりやすく表示する掲示板で、写真付きでスタイリッシュな演出も簡単に作成出来、PDF や Word、Excel 等のファイルも添付可能である。

### *４-3-４. スケジュール管理*

左側はその週の予定が表示され、ここから個人ごとのスケジュールを確認することも可能である。右側は共通の予定です。運営委員が一目で分かるように関連する予定はトップ画面に別枠で表示される。

### 4-3-5. 個別メール

個別にやりとりをするメールの機能で、グループを作って送信することも可能である。非常に分かりやすく、発信した情報が全員に行き渡っているかどうかの確認が可能です。 個人ごとに未読メールはトップ画面で一括確認できる。

### 4-3-6. 契約管理

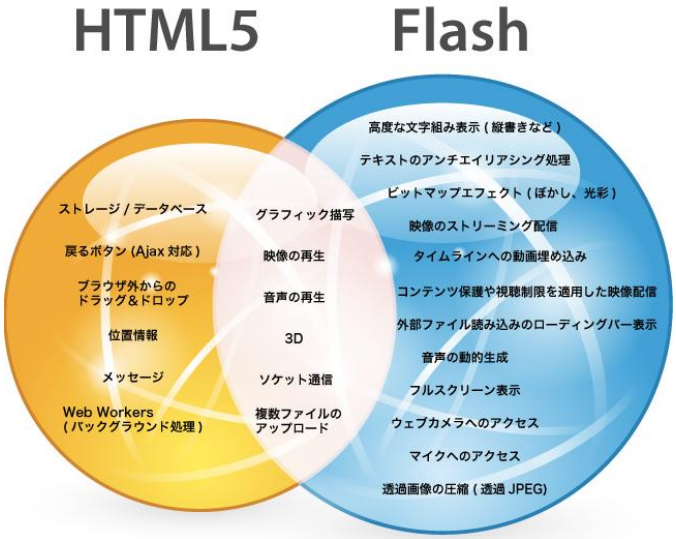
管理者のみ利用可能な機能となり、各項目の設定等登録を行う。

## 4-4. 博物館の展示システム

むなかた電子博物館建設当時はフラッシュによって多彩なマルチメディア表現が可能であった。しかし間もなく隆盛となったモバイル機器でフラッシュは機能しなくなった。そのいきさつは TechCrunch Japan によると以下のとおりである。
(http://jp.techcrunch.com/2012/07/02/20120630steve-jobs-war-against-flash/)

2012 年 Adobe が、Android 4.1 搭載デバイスでの Flash Player サポートを中止し、8 月 15 日に Google Play ストアから同プラグインを引き上げるとブログで発表したのだ。この撤退は、iPhone の登場から 5 年後の出来事だった。iPhone は Flash のモバイル進出という野望を、殆ど始まらないうちに阻止した。

しかし、何よりも重要だったのは、Apple が Adobe デベロッパーに対して、最新の機能、開発ライブラリー、ツールなどを活用しないクロスプラットフォームアプリを作って欲しくないと言ったことだった。ジョブズはこう書いている。『われわれの動機は単純だ。それは当社のデベロッパーに最先端のもっとも革新的なプラットフォームを提供することであり、デベロッパーには世界で誰も見たことのない最高のアプリを、直接このプラットフォームの上で作ってもらいたい。われわれはデベロッパーが今以上にすばらしい、強力な、楽しい、有用なアプリケーションを作れるよう、このプラットフォームを強化し続けていきたい。全員が勝者になれる。最高のアプリのおかげでわれわれのデバイスがさらに売れ、どのプラットフォームよりもすばらしく幅広いアプリの品揃えのおかげでユーザーは喜びをえられる。』結局ジョブズは正しかった。Flash が初めて Android デバイスで提供されたとき、ユーザーは約束されていたフルウェブをアクセスできなかった。例えば、Flash で Hulu を見ようとした Android ユーザーは、そのコンテンツはモバイルウェブではまだ利用できないというメッセージを見ることになった。同じく Flash を使っていた Google TV の有料ビデオサイトでも同じ事が起きた。そして何よりも重要なのは、そうしたビデオや Flash の対話機能を Androi デバイスで使えた時でも、動きはしばしば不安定であり、高性能デバイスでさえまともに動作しなかったことだ。その結果ユーザーはモバイル機器上で Flash を見ることを止め、デベロッパーもサポートを止めていった。ここまで TechCrunch Japan より
(http://jp.techcrunch.com/2012/07/02/20120630steve-jobs-war-against-flash/)




これによってフラッシュに代わるマルチメディア表現の方法を取り入れる必要がある。 前述の「3-1.階層構造を持つ博物館展示」に示された機能を実現させるためには、デスクトップ PC

でFlash、スマートフォンやタブレットなどでジャバスクリプトやHTML5などの組み合わせが必要になるものと思われる。

15年間に渡ってFlashを使ってゲーム開発を行っているLars Doucet氏は、OpenFLはFlashのAPIをベースに設計されているだけでなくオープンソースというメリットがある。これまで通りFlashゲームを作り続けられるだけでなく、同じコードを元にしてWindowsやMac、Linux、モバイルなどより多くのターゲットにゲームを提供できる点も魅力のようだ。 OpenFLはオープンソースで開発されている、FlashのAPIとほぼ互換性のある開発環境。マルチプラットフォーム対応のコンパイラ「Haxe」の技術を使い、デスクトップからモバイルまでさまざまな環境で動作するアプリケーションを単一のソースから生成できる参考サイト（URLhttp://ics-web.jp/lab/archives/1329）

池田泰延（ClockMaker）（http://clockmaker.jp/blog/2010/02/flash-vs-html5/）は上図でHTML5とフラッシュの対比を見せた。左側が HTML5 にしかない機能、右側が Flash にしかない機能で、中央の重なっているところが両方が利用できる機能です。グラフィック関係では、HTML5 では描画やビデオ関係はサポートするものの、テキスト周りや高度なグラフィック処理、デバイス機能ではまだ Flash のほうができることが多いといった状況だと指摘している。

池田泰延は、株式会社 ICS 代表。筑波大学非常勤講師。ClockMaker ブログや書籍・雑誌(WebDesiging等)で、HTML5 や Flash を用いたインタラクティブ技術の情報を紹介している。以下はhttp://clockmaker.jp/blog/2010/02/flash-vs-html5/を引用したフラッシュの特徴である。

### 4-4-1. クロスブラウザの映像対応

HTML5 は video タグ搭載によりプラグインを利用してないで映像を再生できる。例えば YouTube でも HTML5 のみで実装された動画プレイヤーが公開されている。しかし依然として動画コーデックの統一が進んでおらずクロスブラウザに対応した動画コンテンツを提供することが難しい。一方、Flash Player ではバージョン7（2003年)の頃からクロスブラウザ対応の動画プレイヤーを実装することができ、現時点では普及率も98.0%もある。

### 4-4-2. Flash は縦書きができる

Flash 10（2008 年）から、縦書きレイアウトを組むことができる。縦書きにしても文字組みにそってテキストを選択することができるためユーザビリティーを下げることなく、DTP レベルに近い柔軟なレイアウトを施すことができる。ちなみにFlash のテキストはフォントサイズが小さい場合にでも読みやすさを損なわないように、独自のアンチエイリアシング処理が適用されているので、小さな文字サイズでも読みやすさを損なうことなくレイアウトすることが可能である。縦書きの表現例としてマクロマリオネットがある。（http://macromarionette.com/#）

### 4-4-3. Flash はタイムラインアニメーションに映像を組み込める

Flash はオーサリングソフト上で動画をタイムラインアニメーションとして組み込むことができる。これはハイエンドなプロモーションサイトで採用されているケースが多く、画面遷移の効果的な見せ方として普及している。将来的に技術の進化が進めばこのような手法が HTML5 でできるかもしれないが、現状の HTML5 では難しい手法である。

### 4-4-4. Flash の 3D は進化している

Papervision3D を初めとして現在ではさまざまな ActionScript 3.0 向けの 3D ライブラリが開発され 3D コンテンツの制作が容易にできるようになってきている。3D を効果的にウェブプロモーションとして利用したサイトとして以下のものは秀逸なので一見の価値がある。

### *4-4-5. Flash はウェブカメラが利用できる*

ウェブカメラを利用したコンテンツを Flash だと作ることができる。例えば、 AR（拡張現実)として、ウェブカメラで手に持った現実のマーカーを撮影することで、そこにバーチャルな 3D シミュレーションが合成されるという技術である。

http://www.adobe.com/jp/devnet/flash/articles/flartoolkit.html

アメリカのＧＥはインターネットとハードウェアが結びついた新しい時代について特集し、ここで Flash が効果的に使われている。

http://www.ge.com/about-us/ecomagination#/augmented_reality

GE 日本のローカルサイトでも同様の試みが行なわれている。

http://gereports.jp/post/99045282504/value-of-ii

## ４-5. 市民協働のむなかた電子博物館

### *4-5-1. むなかた仙人に聞いてみよう*

むなかた電子博物館のキャラクターである、むなかた仙人、むなかた歴史先生（久原徳善）、むなかた文化先生（山田尼子）、むなかた自然先生（玄海正助）をアバターとして機能させ、さまざまな疑問、質問、意見に対応するバーチャルな空間を形成することで来館者の満足度を高めることができる。

このアイデアはむなかた電子博物館の建設準備委員会の段階から活発に意見交換が行なわれた。博物館を訪れた人が「これを詳しく知りたい」と思ったとき、仙人に聞いてみるボタンをクリックするとタイミングが良ければオンラインで回答を得られる。リアルタイムに質問に答える状況にない時は、「後ほどお答えします」などのメッセージを返す仕組みが検討された。

歴史関連の質問には仙人が「むなかた歴史先生（久原徳善）」に質問を転送する。「むなかた歴史先生（手を久原徳善）」は複数の協力者によって構成され、都合良く回答できる人が手を挙げて回答する。文化や自然も同様である。

これを実現するにはチャットやＳＮＳの応用で可能と思われる。問題は複数の協力者を得られるかどうかである。むなかた電子博物館は約１０人のアクティブな委員で運営されている。この輪るにはどうすれば良いかが最大の問題である。

### *4-5-2. 市民の寄進で展示を豊かに*

広島県の亀山神社のウェブサイトには寄進・奉納のページがある。奉納された全てのモノを掲載するのはちょっと無理があるようで、ホームページを開設し 1 得た 999 年からの奉納・寄進者をご紹介している。なお匿名希望、掲載の許可がでないモノもあるので、ここに掲載したモノが全てではないとしている。（http://www.kameyama-jinja.com/menuhounou.htm）

もちろん亀山神社以外にも寄付や寄進でその組織や団体を維持発展させている例は多数ある。世界的に知られた存在がメトロポリタン美術館である。ウィキペディア（http://ja.wikipedia.org）によると、メトロポリタン美術館の設立構想は、1866 年、パリで 7 月 4 日のアメリカ独立記念日を祝うために集まったアメリカ人たちの会合の席で提案された。この会合の参加者のひとりだったジョン・ジョンストンは、アメリカに国際的規模の美術館が存在しないことを憂い、メトロポリタン美術館の設立構想を訴えたが、この時点では美術館の建物はおろか、1 点の絵画さえ所有していなかった。美術館は 4 年後の 1872 年に開館。その後は基金による購入や、さまざまなコレクターからの寄贈によって収蔵品数

は激増し、関係者達の努力の結果、現在では絵画・彫刻・写真・工芸品ほか家具・楽器・装飾品など300万点の美術品を所蔵。全館を一日で巡るのは難しいほどの規模を誇る、世界最大級の美術館のひとつとなっている。

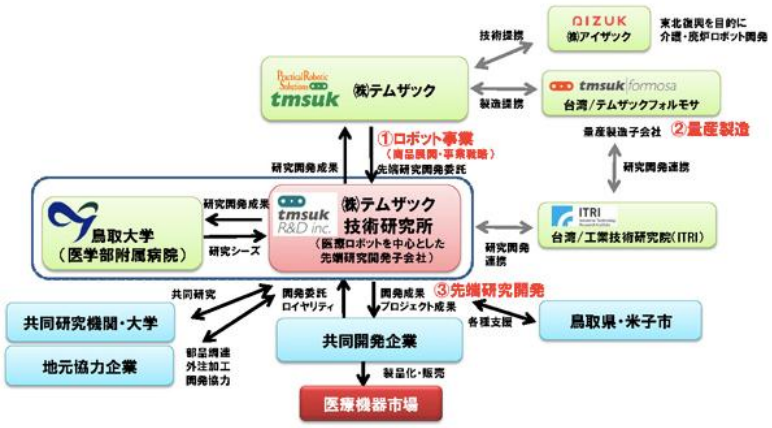
メトロポリタン美術館の公式サイトでは、寄進を以下のように求めている。

*Donate. Your gift helps fulfill our mission to care for the Met's collection and present world-class exhibitions and programs that enable audiences to experience the world through art. Please note that your contribution may be tax deductible …*
*(https://secure.metmuseum.org/secure/donation/donate)*

むなかた電子博物館では、宗像にもｔゆかりのある情報を一時的に借り受け、デジタル化して保存し、提供者に借り受けた情報は元通り返却する。このような情報提供を寄進（寄付）として寄進者の同意を得て記録公開する。これによってむなかた電子博物館は情報提供によって展示が充実してゆく。

## ４-6. 未来を創造する「むなかた電子博物館」

国立民族学博物館の初代館長梅棹忠夫は、『博物館の本質は、単に過去をめざし、過去を復元すること王ではありません。過去にあったもの、現に存在するものを、あたらしい観点から、あたらしい文脈にくみなおして、未来におくりだす。これが博物館の仕事であります。（中略）博物館は、ＳＦでいうところのタイム・トンネルの現実的な装置であるということができるかもし遊郭とれません。』と述べた。




梅棹は、博物館は情報機関であり、そこでは情報を収集蓄積・変換・創造・伝達し、これによって市民の知識を刺激し人間精神を挑発して、未来の創造に向かわせるための刺激装置であるとしている。

インターネットの急速な拡張とコンピュータプログラムの発展によって我々の社会はかつて経験した事のない情報通信革命を実現させ、ドローンや自動操縦自動車、ロボット、サイボーグなどを現実のものとして機能させつつある。

このような時代の奔流はインターネット通信、コンピュータ処理速度、プログラム、機器小型化の相乗効果で生み出された。なかでも中核をなすのがプログラムである。梅棹が言った「現に存在するものを、あたらしい観点から、あたらしい文脈にくみなおして、未来におくりだす。」という役割がむなかた電子博物館に求められている。むなかた電子博物館が主催するコンピュータプログラムの講習会やコンテストを通して若い世代にプログラムの面白さが伝わる事で、自然豊かな歴史都市むなかたに上記技術革新の素養が育成されるであろう。

一方むなかたには国際的ロボット開発企業「テムザック」(http://www.tmsuk.co.jp/)が本社研究所を設置している。時代の趨勢を反映しテムザックは研究開発量産体制を整備し３つの拠点を持つに至っている。(引用 tmsukWEB サイト)

【株式会社テムザック】http://www.tmsuk.co.jp/
2000 年設立。“人に役立つロボット”をコンセプトに、家庭用留守番ロボット・介護用ロボット・レスキューロボットなど様々な分野のロボット開発・製造・販売を行っている。

【テムザックフォルモサ（天目時科股份有限公司）】http://www.tmsuk.biz/formosa/
テムザックの 100%子会社で、ロボット量産・製造拠点として台湾/台北市を拠点として 2011 年に設立

【株式会社アイザック】http://www.aizuk.jp/
東北復興を目的に、介護・原発廃炉ロボット等の開発を目的に、温知会会津中央病院、医療・介護関連企業、銀行、テムザックらが出資し 2012 年設立

テムザック技術研究所の WEB サイトには、今後の事業拡大に向けて、ロボットの研究・開発に対する意欲と想像力を持った人材を求めている。その分野は 3DCAD を使用した機械設計開発、各種言語でのシステム開発（画像・通信・制御・組込み系）、電気・電子回路設計開発など多岐にわたっている。

ロボットやサイボーグが社会に適用される近未来が現実のものになりつつある中で、このような分野のむなかた電子博物館への適用を検討する段階に達している。自然豊かな歴史都市「むなかた」で少年期を過ごした若者が、むなかた電子博物館のプロジェクトを通して科学技術への関心を高め、教育研究機関で学び、むなかたに帰って最先端の職を得ることができる時代を筆者は夢見ている。

# 座談会

## むなかた電子博物館の１０年

出席者：
石黒正紀、上野貴子、河田昭、清水比呂之、堀内伸太郎、平松秋子、宮川幹平、西田迪雄、伊津信之介（順不同・敬称略）


１．自己紹介 .....64

２．むなかた電子博物館の歴史について.....69

３．むなかた電子博物館の特徴とは.....72

４．市民がつくる仕組み .....76

５．北斗の水くみ写真展の波及効果.....80

６．むなかた電子博物館の問題点 .....82

７．むなかた電子博物館の役割 .....86


**司会：**むなかた電子博物館は 10 年の節目を迎えるので、むなかた電子博物館を担っていただく運営委員の皆様方から、ざっくばらんな発言を頂いて、これからの電子博物館をどういうものにしていこうかという、骨組みが作られればと思っております。

まず、むなかた電子博物館運営委員の紹介を、自己紹介ということで進めたいと思います。むなかた電子博物館運営委員会の委員長の平井委員長が、急に所用ができて来られないので、また別の機会に第２回の座談会は開催したいと思います。今日は副委員長の石黒さんに出席していただいております。石黒さんから、自己紹介を簡単にお願いします。

### １．自己紹介

**石黒：**石黒正紀と言います。私自身は、2010 年まで福岡教育大学で 32 年間教職をしておりました。専門は地理で、平井さんとはこちらに来た直後から、いろいろな形でお付き合いがあって、私がちょうど辞めるころに、「あとを引き継げ」みたいな形で、半ば強引にここへ引っ張り込まれたという経緯はあります。そういう意味では、最初のところはよく分からないので、なかなか議論に十分貢献できているのかというところは多少あるのですが、やはり地域のことをどういうふうに伝え、考えていくかというのは地理の専門分野でもありますし、そういうところで、何らかの貢献ができればいいかなということもありまして、ここに参加させていただいているという形になります。

まあ、博物館というのをどういうふうに考え

るかということに関しても、いろいろな考え方があると思いますので、それはおいおい、またお話をさせていただければといいかなと思います。

**司会：**はい。ありがとうございます。では、時計回りで、上野さん、お願いします。

**上野：**上野貴子です。どうぞよろしくお願いします。私は、宗像でSOHOを立ち上げて17年、今年で18年目になります。この電子博物館の立ち上げのお話を伺ったときに、ぜひ、宗像に住んでいるSOHOの人たちで構築がしたいということで提案をさせていただいたのです。でも、そのときは未熟者で何も力にはなれないところだったのですけれども、そのあと、やはり宗像のSOHOの人たちを集めたいと思いまして、平成18年に「むなかたSOHOねっと」というネットワークをつくりました。そのグループは、今でも細々と続いていて、今回はその中でも、ひこうき雲さんというテープ起こしの方をここで起用していただいたことも、すごくうれしく思っていますし、今後は何らかの形で少しでもご協力できたらなと思っております。どうぞよろしくお願いします。

**司会：**続いて、河田さん、お願いします。

**河田：**河田昭と申します。泉ケ丘に住んでおりましたけれども、いろいろ事情があって、１年くらい前に、土穴に住居変更をいたしました。宗像住民であることは間違いありません。私は、平成６年６月６日に、あえて６６６の時に住民票を移しまして、それ以来の宗像市民でございます。

皆さんと全然違うのは、会社勤めをしておりまして、40年間会社勤めで、やっと終わったころの時に、むなかた電子博物館の市民公募というのがあったのです。何だろうかと思って、訳の分からない、申込所のような所で何か書きまして、それで、「しょうがない、また来ていいよ」と言われましたので。私は、市民公募なのですよね。

ですから、全く皆さんとは違った物の見方をするかも分かりません。民間の会社におって、収益を上げろとか、業績を上げろとか、40年間言われてきた、そういうところにおりましたので、物の見方、意見の発表の仕方が若干違うかも分かりませんけれども、まあ、それはそれなりに、そういうのも１人くらいおったほうがいいのかなと思って、引き続き、入れさせていただいております。よろしくお願いします。

**司会：**ありがとうございます。続いて、清水さん。

**清水：**清水比呂之です。私は、市の職員という立場で、このむなかた電子博物館は開館して10年を経過しているということですけれども、その開館当初から事務局側という立場でこの活動に参加をさせていただいております。

もともと電子博物館が開館する一つの契機になったのが、当時、宗像市内に地域イントラネットを敷設していくという一大事業がございまして、学校関係であるとか、公共施設をイントラで結んでいこうという中で、一つの重要なソフト的、アプリケーションの一つとして、この電子博物館というものが誕生していったという経緯がございます。

それが10年以上経過する中で、市民協働という形での、運営委員会の皆様方のご努力によって、こういう形に進化発展していったということを大変うれしく思っておりますし、ある意味10年近く、その成長発展の過程を、事務局側としての立場からずっと見させていただいたというところですので、そういう形で、今回の座談会に参加させていただきたいと思います。

**司会：**ありがとうございます。続いて、堀内さん、お願いします。

**堀内：**やはり、河田さんと同じで市民公募で入りました、堀内伸太郎と申します。よろしくお願いいたします。自分は、地質学が専門なのですけれども、少し地質関係のコンテンツの充実が遅れておりまして、大変皆様にご迷惑をおかけして申し訳ありません。それで、「北斗の水くみ」の写真展では、委員を務めさせていただいて参加させていただいていますので、そういうことでお話ができればと思っております。よろしくお願いいたします。

**司会：**よろしくお願いします。次は、平松さん、お願いします。

**平松：**平松秋子です。私は、平成２年に、身近な歴史について勉強しようという「むなかた歴史を学ぼう会」、そこから電子博物館に入れていただきました。「むなかた歴史を学ぼう会」は、身近な歴史を実際に歩いたり調べたり、そういう会です。

そういう現実的なところから、電子博物館に入ったものですから、最初のうちは、伊津先生のウェブに対する説明、そういったことが大変分かりませんでした。それで、何とかこれを理解したいと思って、平成19年４月ですが、放送大学大学院情報科学に入学して、２年かけて情報文化を学びました。そのおかげで、だいぶ分かるようになりました。その時の修士論文が「むなかた電子博物館の将来展望に向けた調査研究」です。もともと、そういう実際の具体的なものを勉強してきましたから、この２年が、

そこから情報という過渡期を通じて、少し分かるようになってきました。

最近は、海の道むなかた館の地域学芸員をしております。そこで、実際の企画展、その企画展が行われた背景、そういったものについて、実際に接することが多いものですから、記事を書くことができます。特に７月には、田熊石畑遺跡のオープンがあります。国指定の弥生の遺跡です。これについても、ぜひ、情報を載せていきたいと思っております。

**司会**：ありがとうございます。続いて、宮川さん。

**宮川：**私は、東海大学福岡短期大学に勤めている教員の宮川幹平と申します。福岡短期大学に来て12年になりますけれども、専門は数学です。大学の中では，情報科学を主に教えているわけですけれども、私自身は非常にコンピューター、新し物好きなところもありまして、とにかく新しいものを触ってみようという気持ちでいるわけですけれども、特に短期大学の教員ということになると思いますので、教育の中で、どのようにＩＴを活用できるのか。学生の満足度なり、もしくは教育の効果なりを高めるためには、どのような活用方法があるのかというのに非常に興味を持って、教育効果の分野なのですね。そういったところに、今、力点を置きつつやっています。

なので、そのキーワードの「ＩＴ」と、またその１つの「地域」ですね。地域の中で、学生が実際に活動するという場としても、その電子博物館の活動は、非常に私自身の教育研究の中でも活かされているということで、非常に私自身も楽しみながら活動に参加させていただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

**司会**：ありがとうございます。続いて、西田さん、お願いします。

**西田：**西田迪雄です。2008年ごろに、それまで網を振り回して、蝶、バタフライを採集していたのですが、そのネット（網）をカメラに置き換えて、それ以来、むなかたの蝶をずっと撮影してまいりました。たまたま、2010年だと思いますが、むなかた電子博物館があることを知って、それを訪問すると、自然の中に、非常に興味のあるいろいろな部門がありましたが、残念ながら昆虫という部門がありませんでした。

それで、その翌年、確か2011年だったと思いますが、宗像のタウンプレスに、電子博物館の運営の市民公募がありましたので、それに応募しました。何か試験めいたような、これからの抱負とかいろいろなものを書かされたのですが、多分、清水さんが合格させてくださったのだと思います。その2011年以来、委員として協力、何かお手伝いをさせていただいております。

むなかたの蝶を市民の方々に知ってもらって、「ああ、宗像にはこんな蝶がいるんだな」とい

うのを、ぜひ知っていただこうと思って、それ以来、いろいろな蝶の画像を次々と更新してまいっております。よろしくお願いします。

**司会**：ありがとうございます。よろしくお願いします。

**伊津**：最後に、司会を務めます、伊津信之介です。東海大学福岡短期大学に 21 年勤めまして、めでたく、この３月末日をもって定年退職することになりました。そのあと、電子博物館にかなり一生懸命できると踏んでいたので、市民協働のこの取り組みには、事務局長でやれるからといったのですけれども、残念ながら、水稲栽培という米作りにはまってしまって、３反から始めて５反、続いて２町、今度の６月の田植えは３町（３町というのは 9, 000 坪です）という米を作らざるを得ないことになりました。
最初は、「わあ、お米作りができてうれしい」と思っていたのですけれども、３町になると、もうこれは重荷でしかなくて、何でそうなるかというと、日本の農業の縮図です。年寄りが、もう足が痛くてできないからやってくれないかとか。身体を壊して、30 町やっていた人が５町に減らしたいというので、みんなで分担して受けたということで、僕みたいな、わずか４年目の米作りが３町なんていう規模で、水田を維持するということになりましたので、なかなか電子博物館１本とはいかないと。

そこに加えて、私事ですけれども、頼まれると断れないので、地域の自治会の区長を、どうせ定年になったのだから２～３年はやってよというので、まあ、いいかと引き受けたら、今度は総代区長という 10 地域くらいをまとめる親分の区長も逃げられなくて。ということで、雨の日と夜、これが一番やりやすい時間帯なので、できれば、先ほどの河田さんの話ではないですけれども、電子的に、集まりができるというふうに何とかもっていきたいなと思いますので、ご協力、よろしくお願いします。

それで、この座談会の進め方ですけれども、おおまかに、まず最初に歴史的なことについて、少し気になること、話したいことがあったのですけれども、それを触れてみたいと思います。その後、むなかた電子博物館がいったいどんなものかについて、皆さんのそれぞれのイメージをお聞かせいただけたらいいかなと思います。そして、具体的な内容に深く関わっている方もいらっしゃいますので、内容についてのざっくばらんな話を聞ければと思います。やはり避けて通れないのが、こういうところが足りないとか、いや、ここがずっと引っ掛かっているというようなことがあったら、この機会に、僕からだと批判しているとか言われがちなのですけれども、身内の運営委員だからこそ言える問題点というのを指摘していただいて、そして、できれば 10 年が終わった次の 10 年、むなかた電子博物館はこんな進歩をしていければというようなことでお話いただければと思います。

まず最初に、むなかた電子博物館オープンのころからいろいろ紆余曲折ありました。それで、司会は司会ということで進めていきますが、発言のときには、私は伊津ということにして、テープ起こしの人に分かるようにしたいと思いますので、皆さんも、もしお忘れでなかったら、発言の最初に名前を言っていただければと思います。

## ２．むなかた電子博物館の歴史について

**司会：**まず、この歴史について、ちょうどタイミングよく、次期運営委員会の副委員長を受けていただいた上野さんに、昔、情報化推進会議で議論をした当時のことで何か印象に残ることというか、こういうことがという、何かありませんか。まず、切り出しに。

**上野：**切り出しですか。私のことでいいのですか。

**司会：**はい。

**上野：**この電子博物館をつくりますということで、コンペティションで提案のですけれども、私はSOHOという立場だったので、宗像のホームページでというか、何かで自分たちの仕事を活かしてみたいと。それで、やはりSOHOという立場だと独立して仕事をするので、うまくいっている人はうまくいっているけれども、いっていない人は全然仕事がないという現状なので、ぜひこの宗像をSOHOの町としてやりたいから、この電子博物館だったらお金の計算というものもコンテンツの中にないので、全部任せてもらえないかなと思って提案しました。

この今のこだわりはありますけれども、「市民が集める・ためる」とあるのですけれども、私としては「集める・ためる」ではなくて、市民がつくるというのにしたかった。それから、その中のコンテンツの中では、誰か子どもが質問したときに、その中で、町の知識のある人たちに配信して、答えを回答してもらって、そこから市民が回答するというような仕組みにしたかったのですけれども、まだ、それはなかなか未熟者で、ただ、今、途中からまたここの会議に入らせていただいて、こういうふうに市民の方が運営しているというのは、すごくいいことかなと思うのですね。

それで、先ほどもちらっと言いましたけれども、テープ起こしでは、宗像の市民の人に発注していただいたり何らかの形で仕事というか、お金が回っていけばいいのかなと思います。
それから、そのとき私がしたかったのは、やはり自分の中で「つくる」ということだったので、先ほど、蝶のことを自分で調べて、そこに載せていますとおっしゃっていた、まさにそういうことを私の構想としてはしたかったことなので、それがまた、どんどん、どんどん膨らんでいったらいいかなと思います。

先ほどちらっと、伊津先生が田植えとおっしゃっていたのですけれども、子どもたちは田植えのことも全然分からないから、植えます、芽が出ますとか、そういう身近な題材でも、出来上がって、刈り取って、お米にして、餅ができ

るまでとか、そういう流れというのも、せっかくそういうことを作り上げて自分でされているのだったら、あってもいいのかなと思います。話が全然ずれていくのですけれども・・・。

**司会：**そうですね。それは、司会として、後ろのほうでもう一回、ぜひ出したいと思っておりますので。

**上野：**はい、分かりました。

**司会：**ありがとうございました。

**伊津：**私も一番最初の関わりがあるので、それについて、ちょっとだけご紹介方々、上野さんの話を引き継いでいきたいと思います。

一番最初に、むなかた電子博物館というのは、先ほど清水さんの自己紹介にもありましたけれども、地域イントラネットといって、インターネット網を日本中に張り巡らせるときに、アナログの電話線を使ってインターネットにつなぐというのでは、これからは駄目だから、ギガビットイーサという太い道路のようなものを通そうと。それで、昔の郵政省、今の総務省が予算を出して、宗像市が乗って、それに採択されて、その中の１つの項目に、「むなかた電子博物館をつくる」というのがあった。それで、イントラネットができたけれども、何年かたって、ぼちぼち電子博物館を具体化させないと、予算が付いた以上まずいということで、宗像市が電子博物館をつくるということになった。

そのときに、僕が宗像市情報化推進会議の議長をやっていたので、その会議に上がってきて、業者さんにお願いしてつくろうと思うということで、結構、上野さんをはじめ元気のいい、まだまだ皆さん若い委員が情報化推進会議にいたものですが、「いや、そんな業者丸投げの電子博物館をつくってどうなるんだ。それこそ市民が、みんなで考えてつくっていかないと駄目だ」ということで、決まっていた予算を１回流して、次の年度までに電子博物館の構想を情報化推進会議でまとめるから、１年待ってほしいということで、１年かけて、むなかた電子博物館の構想を情報化推進会議でまとめたと。そして、市長への提案ということで項目を立てて提案しました。

この件については、むなかた電子博物館紀要の創刊号のまとめの中に、その歴史的な背景も書いてありますので、ぜひ、そちらもまた、電子博物館上でクリックすれば、PDF でダウンロードしたり、直接閲覧できますので、そちらでを読んでいただければと思います。

そういうことで、一番最初にむなかた電子博物館は、業者丸投げでなく、誰かがつくるものでもなくて、市民でつくるものという考えでした。

ただ、その時に、まだ電子博物館はどんなものだろうというイメージは何もなかったので、皆さんの頭の中には、普通の博物館や美術管や展示施設というものがあって、それをいわゆるウェブ（ホームページ）の上でつくるということですね。

ですから、どうしても、ウェブ（ホームページ）というのが、そのまま電子博物館であるというようなことがずっと続いてきているので、今もってなお、電子博物館という新しい存在と

いうのは、なかなか定着をしないのかなと思います。

**司会：**この辺りのことで、何か清水さん、一番最初から関わっていることで、印象に残ることはありませんか。

**清水：**はい。電子博物館を立ち上げて、もう既に10年ということになりますけれども、10年前というのは、宗像市には箱物の博物館がない状況でした。そういう意味で、電子上で博物館を展開していくというのは、非常にやはり先駆的な、先進的なやはり試みだったというふうに感じております。そういう、先に電子博物館が先行していきながら、平成24年に、ここの海の道むなかた館という、いわゆるその箱物の館がスタートしたということですので、非常にユニークな形の電子上の博物館、そういう展開が行われてきたのではないかというふうに思っております。

それと、伊津先生のほうからもお話がありますように、やはり、市民の皆さん方がコンテンツを持ち寄りながら構成していくという、その辺の非常にユニークさというのは、この電子博物館は当初から持っていたと思います。

通常の博物館の場合の展開というのは、先に箱物があって、そして、そこに出てきているものを紹介する1つのツールとしての扱いというのが、大体一般的ではないかと思いますけれども、それをせずに、もう要するに、世界に向けた一つの電子上での展開というのは、非常に評価できる先駆的な取り組みだったのではないかというふうに思っております。

**伊津：**今、清水さんの話を聞いていて思い出したのですけれども、この博物館のプログラムとして作り上げるのを最終的に宗像市がコンペをして採用した企業というのが、パスコという会社とジョイントしていた熊本ソフトウエアという会社でした。そこのデザイナーは現在九州産業大の教授なのですが、エコミュージアムというイメージで、このむなかた電子博物館を考えていたということです。

エコミュージアムというのは、フランスの例なのですけれども、博物館があって、それは実際にいろいろな展示物とか、いろいろな現場の（フランスで、ラスコーの壁画とかいろいろな野外の展示施設があるのですけれども）、そういうものをそのエコミュージアムという概念でまとめるのが電子博物館として非常にふさわしいだろうと。そうすると、まさに今、田熊石畑遺跡が公開施設として7月にオープンされるとか、あるいはこちらの「海の道むなかた館」が展示、あるいは実際の体験施設としてオープンし、順調に学校教育等に使われるとか。あるいは、その他の展示施設ではない実際の野外の遺跡ですね。そういうものを結び付ける情報を束ねるものとして、むなかた電子博物館というのは、日本の中でも、非常にいい環境にあるのではないかな。ですから、地域の人に役に立つと同時に、これは地域を越えて、かなり広い所へ宗像の良さを伝える手段になるかなと思います。そういうことを言うと、何かその仕組み、エコミュージアムという言葉がいいかどうかは別として、展示物や、実際に遺跡や、野外の自然や、

歴史的なさまざまな資産であったり、というものを束ねる博物館というのは、ホームページみたいなものをただ作り替えればそれで済むかというと、何か済まないような気がするので、そこのアイデアを盛り込めるような器として、博物館というのは、なっていかないといけないのかなと。

それで、少し長くなりますが、先ほど上野さんが、SOHO で仕事が回ればいいと思うという話をされていましたけれども、実際に電子博物館があると、電子的な仕事というのを電子博物館が中心になって、もっと新しいものですね。だから、先進的なデジタルでの展示であったり、デジタルでの仕事であったりするのを、電子博物館がもっと積極的に行っていくと、新しい試みを体験することができて、そしてそれが、若い人たちへも刺激になるし、場合によっては、大学とか高校の教育にもかなり役に立つだろうと思うのですね。

ですから、ただ何かをホームページ上に展示するというのだったら、そんなに面白みがないのですけれども、ひょっとすると、もっと独自のプログラムを使って、電子博物館のある機能を活かそうとかいうコンペをするようなことも、試みてみるのもいいかなと。

そうすると、今、現代はそのプログラム自体が１つの建設物みたいなものになって、プログラムなしで世の中は動かない時代になっているので、電子博物館の展示物としてプログラムというのが表示されるようになったら面白いなと。だから、ぜひ、「北斗の水くみ」 写真展があるように、むなかた電子博物館の展示プログラムを募集するようなものがあったほうがいいかなと、ずっと思っていたのですね。

ですから、むなかた電子博物館は、何か昔からあった自然を電子的に展示できて、誰でも、どこからでも、いつでも、それを閲覧することができるというのは当然かもしれないでけれども、もう１つ新しい試みがあったらいいなということで、これは一番最後に、これからというところで、また出てくるかと思うのです。

## ３．むなかた電子博物館の特徴とは

**司会：**そういうわけで、むなかた電子博物館というのは、設立当時、あるいは議論の段階で、かなり今に近い発想をもって取り組まれたということかと思います。

続いて、話題を変えまして、似たようなことになってしまうのですけれども、むなかた電子博物館のコンセプトというか、むなかた電子博物館は一番最初の玄関を入って右上の所に、「むなかた電子博物館とは」というクリックすると、「市民が「あつめる、ためる」、デジタルで「そだてる、つなぐ」、まちづくりに「いかす」」ということで、「つくる」はないといえば、確かにそうなのですけれども、確かに、このむなかた電子博物館がここに、今、読んだ

ようなことというのは、まさに、何かを展示する、表示するということで考えて得たことだと思いますけれども、もう少し、こういうことがあったらいいかな。あるいは、本当はこういうものではないかなというのが、ここで少し話として出していただけたらと思うのですけれども、宮川さん、どんな感じですか。

**宮川：**先ほどお話にありましたように、さまざまな施設のホームページ、場所、ウェブサイトというのが、電子博物館をそのように提示されている方もいらっしゃるのですが、我々が違うと言ったところは、ここで、この海の道むなかた館がある程度軌道に乗っているということを踏まえて、あらためて考え直すべきだと思うのですね。

ですから、話にあった、さまざまな施設をつなぐであるとか、もしくはそういった市民の中の在野のスペシャリストであるとか、そういった方の知見なり何なりをつなげるワンストップというものに、むなかた電子博物館は位置できるのではないかというところがあります。

その中で言うと、そうですね、先ほど、むなかた仙人のお話もあったと思うのですが、そういった窓口として、それらの質問なり何なりを、そういった実際の既存の施設なり、もしくはそういった方に問い掛けをするといった形は、十分、本当に今でやるなら実現可能なアイデアであるのかなというふうに思っています。

そうですね、実際、その横ぐしを通すといえば、それをまず窓口としながら、それぞれの施設なり、もしくはそういった間の協調を、むなかた電子博物館が窓口となって実現しているというのもそうなのですけれども、広げていく方向としては、繰り返しになるかもしれませんけれども、そういった博物館といったモラリズムですね。その古典的なものだけではなくて、今のその文化なり生活なりそういったところまで、後から話があるかもしれませんが、ある意味、紀要もそうなのです。ある意味、学術から離れるかもしれませんけれども、そういったところに、ある程度幅広く進めることができるのがこの電子博物館という、今までの既存のもののしがらみにとらわれない、大きなメリットではないかなというふうに思っています。

場合によっては、今後、市民の方の、市民リポーターではないですけれども、そういった気軽な参加ということですね。もちろん、オーソライズされたものも必要だと思います。権威的なものもあるとは思うのですけれども、気軽にそういったものを「あつめる」ために、そして「つくる」といったところに、そういったものに関われるような仕組みというものを電子博物館ならではのものができるのではないかというようなイメージを持っています。

**司会：**はい、ありがとうございます。平松さんは、修士論文でむなかた電子博物館を扱われて、むなかた電子博物館の特徴というか、それについてはどんなお考えですか。

**平松：**大変、個人的なことですけれども、平成19年に大学院を卒業しました。その時の指導教官が柏倉康夫先生、元ＮＨＫの特派員です。

そして、アキノ氏暗殺といった事件後、もう２～３日後にはすぐ放送に出られた、そういう報道で働かれた方です。ＮＨＫを早期退職されて京大の教授になられました。私が習ったときは、情報文化の教授で、その後、図書館長になられました。そして、今でも３回程度のメールでのやりとりを、その当時の先生の教え子とやりとりをして、「情報文化研究」そういう研究誌を１年に１回出しています。

修士論文で扱ったことは、世界遺産登録が宗像市で行われている。そして、「北斗の水くみ」。こういった宗像にとって、大変全国でも貴重な材料が資源としてあるわけですね。これをやはり情報として、世界に向かって発信する。これは、大変大切な役目だと思っています。
これは、2010 年に総務省が、九州支局ですけれども行ったウェブサイト大賞です。これの教育部門で優秀賞を頂いたのですね。だから、やはり教育的価値は大変あると思っています。そういったことを続けていきたいと思います。

**司会：**ありがとうございます。何か。西田さん、何かありますか。

**西田：**宗像の、私の単純なイメージとしては、自宅に居ながらにしてアクセスすれば、自分の欲しい宗像の知識が何でも得られると。宗像については、何でも教えてくれる博物館だと、そういうイメージを持っております。

ですから、わざわざ、例えば質問に、生物のことなら、この近くだったら北九州の「いのちのたび博物館」まで行かないといけないのですが、そうではなくて、自宅に何か自分の持っている資料で、これはいったい何でしょうかというような質問を送ってくると、それに専門的な知識を持った方が即座に答えてくれると。そういう、敷居の低い低い博物館が、むなかた電子博物館ではないかというイメージを私は持っておりました。

私が担当している蝶でも、例えば、「こういう所で、こんな蝶を撮ったけれども、何という名前か分からないから教えてください」というような写真を送ってきてくれて、それに答えるというようなことを期待していたのですが、過去５年間ゼロでした。

もっとも、普通の蝶なら、皆さんご存じだけれど、そう珍しい蝶、あまり見たことないような蝶は、最近の方はあまり関心がないのかなとも思っておりますが、いずれにしても、宗像について、別に自然に関することではなくて、歴史についても、その地区地区のいろいろな郷土文化にしろ、そういったものが、すべて教えてもらえる所だというイメージです。

**司会：**ありがとうございました。実際に、蝶の研究から電子博物館に掲載していただくところまで関わっていただいて、実際にそれを具体化されているということです。

平松さんは、新着を結構いつも扱われていますよね。委員なので積極的に書いていただいているのかと思うのです。

**平松：**そうですね、はい。

**司会：**平松さんの新着のレポートがないと、なかなか新しいものが増えていかないという中で、

あの新着のレポートをする意気込みというか、スタンスというのは何かおありですか。

**平松：**はい。随分前ですが、やはり情報の命というのは大変短いと言われたことがずっと頭にありました。やはり１カ月の間によければ２回、それくらい新着情報は出したほうが読み手にとっても新鮮な情報を読むことができる。そういったことを考えていたのです。

それで、電子博物館は、よく、もう１日１回は必ず見ます。そして、前の新着情報の日にちを見て、やはり次は何か入れないといけない、そういったことをやはり考えますね。

それで、今回、「八所宮のおくんち」という本を出しましたが、これは清水さんが電子博物館に最近情報がないから、何か取材をしてくださいということを言われました。ちょうど、それが９月末ごろです。おくんちは10月第３土日にあります。それで、清水さんが吉武地区のコミセンに依頼をしてくださったので、もうすぐ行きました。そういう市からの依頼というと、大変、取材もスムーズにいきます。今回の本の発行にしても、コミュニティで、大変、力を入れてくださって、地域、各家庭に回覧をしていただいたりしました。

「八所宮のおくんち」は、300年も続いたお祭りです。これが、今まで文書（もんじょ）、文書になっていませんでした。これをやはり、形、道具、そして時代、そういったものをすべて入れたものにすることが目的でした。

そうするうちに、八所宮の周りには、その行列に関わることではなくて、いろいろな情報がたくさんありました。それを八所宮の方に聞いたり、コミュニティの方に聞いたり、そうするうちに本の資料がたくさん集まるようになって、今回発行したわけです。

**司会：**ありがとうございます。

**石黒：**今、平松さんがお話しされたことというのは、それぞれの場所で何が起こっているか、やはりそのことを私たちは知って共有をしていくという。これは、人間の長い歴史の中で、私たちが知っている、さまざまな知識をこうずっと蓄えていくという歴史なのです。

最初、どういう形でそれをやったかということになるのだけれども、基本的には、本という形にして、それの一番典型的なものが百科全書、百科事典というようなものになる。そういった百科事典を、一方では図書館という所に置いて、誰でも見られるようにしていく。

もう１つ、そこで次のものとして出来上がったものが、図書館は書いたものですけれども、実際に見て触ってというものが、体験できるものが必要だということで博物館というものが出来上がっていく。その博物館が出来ていく過程の中で、次の段階として、また今、こういう電子博物館に返っていくという枠組みを考えるときに、百科事典も実は電子化されていると。これの一番最近の典型的なものは何かというと、やはりウィキペディアなのです。

ウィキペディアは、皆さん方が書き込んで作っていく、この部分も非常に大きいだろうと。そういうことで考えるならば、むなかた電子博物館は、宗像のウィキペディアという位置付けをしておくと、こういうようにいろいろな形で、

これからの展開も考えられると。そうしたら、それに対して、いろいろな人がやはり書き込めていくという。まあこの間、なかなか実際には、修正というか更新できていないところがあるのですけれども、それをいろいろな方々が関わって、少しずつでもアップしていけるような体制を取っていくと、もっと多くの人がそれにもアクセスできるし、いろいろな先のところにもつながっていけるのではないかなと。そういうものとして、位置付けられると非常にいいのではないかなという気がしています。

**司会：**はい、ありがとうございます。

## ４．市民がつくる仕組み

**伊津：**今、ウィキペディアという話題が出ましたが、むなかた電子博物館では「仙人に聞く」というのも昔からイメージがあったのですね。だから、分からないことがあったら聞いてみようという、聞いたら答えが届くという。もう１つ、ウィキペディアというのは、聞かれる前にとにかく知っていることをどんどん書いてしまう。

最近、あまりやっていないですけれども、例えば、東海大福岡短期大学について、僕が返してしまうと、普通公式に言っていることと違うのが書かれるのです。そうすると、公式にこちらが正しいと思っている人が、その公式の正しいものに書き換えていくという作業をしていって、だんだん、だんだんに全体から見て、これが正しい、それほど問題点がないだろうというのに収束していくのがウィキペディアですよね。ただ、その発想というのは、とてもむなかた電子博物館にとって貴重なことだと思うのです。この辺から、今まで意見を頂いていた中から拾い上げて、むなかた電子博物館の問題点を考えて行きたいと思います。こういうことができたらいいのにできないとか、あるいは、こういうことが今までなかったから、あったらいいな。あるいは、こういうのがないのはどうしてだろうみたいな、少しマイナスイメージになってもいいから、そんなところがあったら挙げていただければと思います。

**伊津：**呼び水として二三言うならば、私の頭から離れないのは、「仙人に聞こう」と言って、分からないことがあったら、とにかく仙人に投げる。そのときに、「10 年前にはメールがいいんじゃない」と言っていたのですけれども、今はいろいろな仕組みがあるから、とにかく仙人に投げたら、それに答えられる人が答えていくというパターンというのは、これはぜひとも、今だったら実現できるし、実現できないのはなぜだろうと。

それからもう１つは、今の「ウィキ」みたいなものを、ふっと聞いてすぐにメモしたのですけれども、例えば「ウキウキむなかた」とかいうような、「ウィキペディア」というとなかなか言いにくいけれども、「ウキウキむなかた」のような何かキャッチフレーズを付けて、それで宗像のことについて知っていることをまとめていくみたいなことで、項目立てをするようなことがあってもいいとすると、何かもう少しこ

う、今までなかったアイテムというのを募るような仕組みにする。実際、記事が書かれたらいいねではなくて、こういう仕組みがあったら参加できるのにというようなものがなかった点が、問題提起としてむなかた電子博物館にあるのだろうなと。

そうすると、何でもいいから書けるのが「お問い合わせ」かなと。ここにありましたね。今、パンフレットを見ると「ご意見ボックス」というのがあります。でも、ご意見ボックスだと、ウェブフォームで何かを書くみたいな形ですよね。

だから、あともう１つがフェイスブックで、むなかた電子博物館というのを開いているけれども、ここで問題です。みんな書かないのです。「いいね！」はクリックするのですけれども、そこに一言、書かないのです。なぜでしょうね。心当たりはありませんか。

**河田：**いい意味でも、悪い意味でも、返信が来るわけでしょう。意見を交換しないといけないわけでしょう。

**伊津：**そうです。そのときに、一言でもいいから、これがいいね、こういうことだから「いいね！」を押したとかいうのを書かない。

**河田：**出せば、いい人、悪い人が、やはりどんどん来ます。それ自体が面倒くさいという人もいるのではないですか。

**伊津：**「いいね！」だけだと、何のあれもないですよね。

**河田**：そうです。

**伊津：**みんなと一緒に、「いいね！」のランクに名前が載るだけで。ところが、そこにコメントを書くと、当たり障りがあるという。当たり障りがあるのがよくない。

**上野：**答えをする人？

**伊津：**いえ、実際にフェイスブック等でね。

**上野：**質問をして、回答をする人が書かないということですか。

**伊津：**そのレベルの前に、何でもそうだけれども。

**上野：**自分の素性が分かってしまうから、回答したことに対しての責任を問われるかなとか思ったりして。

**伊津：**そうすると、ウィキペディアにも記事が載らないのです。これをよくテレビ等で、うちの奥さんと話していて、外国人はインタビューにマイクを出すと、どうでもいいような人でも結構話す。日本人は、「わあ、嫌」とか言ってあまり話さない。日本人の特質なのですかね。何か、その辺について、ご意見をお持ちの方はいらっしゃいますか。だから、そこのところを少し注意して解決しないと、一生懸命仕組みをつくっても、結果は出てこない気がするのですけれども。

**上野：**上野ですけれども、昔、私が考えたのは、その回答する人にはお金を払うという。そこまでお金がないでしょうから、それは難しいとは思いますけれども、例えば10円とか、そういう何らかの責任があったら……

**伊津：**お金がもらえれば、回答するのかな。そういう問題ではないでしょう。

**上野：**そういう問題ではないですかね。だから、きちんと回答する人には前もって……

**伊津：**そこそこの金額をくれるのならね。10万円は言わないにしても。

**上野：**前もって、あなたはお願いしますという人にお金をあげないと、誰も彼もが無責任に回答されたら困るのですけれども。

**伊津：**よく、今、ウェブなどで質問があって、そうすると、それに答えを書いていて、ベストアンサーとかいうのがありますよね。あのベストアンサーに選ばれたら、電子博物館から金一封が出ますよみたいなこともいいでしょうね。やはり、そこで人を選んでおいてやってしまうとばれると思うので。

**上野：**なるほど。ベストアンサー。

**伊津：**でも、とにかく意見を引き出すということは考えないと、学校へ持ち込んだとしても、子どもたちの意見を引き出すのに、先生が聞けば意見を出してくれるけれども、電子博物館が意見をくださいといっても出てこないということになってしまうと思うのです。

**河田：**時間がかかりますね。日本人の長年のそういう性格うんぬんからしてね。外人みたいに、どんどん意見を言おうとか、そういうまでにはまだ時間がかかるかな。少しずつですかね。しかし、やらなきゃならない。

**伊津：**そうすると、やはり仕組みとして、それなりの何か報酬を、お金は別として、報酬を出すということがいいかもしれないです。

**司会：**むなかた電子博物館は年間200万円の予算がある。そして、サーバー等の必要なもので、60～70万円。だから、100万円少しのお金があるというか、でも常時、更新したりしていますから、使われてはいくのだけれども、紀要が10万円、20万円、紙の印刷をすればかかるとかね。

**伊津：**バナーをもっと出していく。

**上野：**広告？

**伊津：**広告。バナーを出してお金を取ると。バナーを出すのに、お金を出しそうな人というのは誰かというと、星に関係している会社。望遠鏡の会社とか、プラネタリウムとか。なので、北斗の水くみについて、むなかた電子博物館がオリジナルにコンテンツを持っているから、というようなことでいうと、電子博物館の展示物

が売りになるというのがあれば、それなりにバナーを出してくれるところもあるのではないか。

**河田：**民間の企業から、スポンサーを見つけるということですね。

**伊津：**そうです。

**河田：**例えば、北斗の水くみで、カメラ会社から、このカメラだったらよく写るよとか、こういうレンズだったらよく写るよとか、そういう意味での割り切った広告を出して、その代わり幾らかカメラ屋とか何とかに、それを写真の優秀賞か何かに力一杯フィードバックするという手はありますよね。

**伊津：**そうですね。

**平松：**キヤノンにメールでお願いしたことがあるのです。私は、こういう機種を使っています。それで、これで十分写ります。それでスポンサーになっていただけませんかと出しました。でも、返事が来ませんでした。

**宮川：**バナーもそうだと思うのですけれども、あとは具体的な活動ですね。例えば、今の北斗の水くみですね。水くみのときの撮影するカメラとして、ご提供というのはなかなか難しいかもしれませんけれども、実際にそれを使わせてもらって、最近ですと広告なのか、それとも記事なのかが判別しにくいものも多くあるのですが、その辺りの１つとして記事にもなりますし、また、コラボレーションでそういう機材をお貸しいただけるならば、我々の活動も進みやすくなりますし、といったところにもなるのかなと思います。それで、実際につながりが濃くなれば、先ほどの話もありましたけれども、実際につながりができれば、またバナーなり何なり、スポンサーとかの話もより進むのではないかなとは思います。

**河田：**そうですよね。メーカーがものを売ろうとして、北斗の水くみの必要なカメラとか、いろいろなフィルムとか、いろいろなところでフィルム会社、あるいはカメラ会社が直前にスポット広告を流してもらえれば、一番いいですよね。

**宮川：**そのときにですね。それに興味を持っている人ですから、非常に属性付きの情報なわけなので、向こうとしても、スポンサーの価値があると見てくれるかなとは思うのですけれども。

**伊津：**その価値をスポンサーが認めるかどうかは、働きかける人によりますね。北斗の水くみの平井さんが言えば、嫌でも、それに関わってくる。だから、今度４月から北斗の水くみのテレビ番組があるらしいのです。放送等が具体的になったら、案内してもらうようには言ってありますけれども。そういうことで言うと、むなかた電子博物館の運営委員に、それなりにお金を稼げる人といっては語弊がありますけれども、それくらいの人を招く方というのは大事なことかなと思います。

　それで、私が言ったのは、そういうスポンサーをつけるということ以上に、むなかた電子博

物館がアクセス数を増やそうとしているのだったら、アクセス数が増えれば、それだけの人が見るのだから、それなりに応じて広告をそこに出そうという企業や個人もあるだろう。

ということは、ずっと考えてきたのですけれども、神社へ行くと、神社の所に「献金何万円」といって、だーっと書いてあるのです。それから、博物館でも、アメリカの、一般の人たちが基金を出してつくったニューヨークのメトロポリタンミュージアムには、正面玄関壁にばーっと、石の壁に人の名前を彫ってあるということであるならば、電子博物館に寄付を出してもらって、バナーで出すというのもあるけれども、もう１つはそういう寄付を募っていくような仕組みというのが、もっとあってもいいのではないかとは思います。それが宗像市がやっていたときには難しかったのだけれども、今度は市民共同での取り組みとして、そういう一般の人たちからの協賛を得るようなことがどうやったらできるかというのは、もう少し具体的に考えていったらいいかなと思います。

## ５．北斗の水くみ写真展の波及効果

**清水：**せっかく北斗の水くみの、あの絵が出てきましたので、まあ、平井先生がいらっしゃらないのですけれども、北斗の水くみというのが電子博物館の中で展開されていく中で、１つは、その北斗の水くみ公園というものが、ネーミングとしてはっきり、市の施設として出てきたというのが１つあります。それと、今度はお菓子屋と提携をして、北斗の水くみのチョコレートがいよいよ販売される予定に、今、なっています。これも平井先生の、そういう意味でのバックアップというのが非常にあるのですけれども。そういう北斗の水くみのデジタル的なところももちろんですけれども、いろいろな波及効果というか、展開というのが、具体的に観望会も含めてやる中で浸透してきているというのが、すごくやはり、イメージ的にも、この電子博物館というのが大きかったのではないかなという気がします。いろいろな形での波及効果というか、それも逆にいうと、経済効果まで生んできているという事実ですね。そこはやはり、すごく評価できるかなと思います。

**司会：**だから、日本中、世界中から北斗の水くみは宗像、北斗の水くみ海浜公園へ行ったらできる、そこでなくてもできるけれども、あそこへ行ったら一番いいのが見られるのだみたいなイメージをつくっていくというのは大事ですよね。

最初、平井さんは、羊羹にすごくこだわっていたでしょう。でも、チョコレートになってよかったと私は思っています。結構、かわいげな

感じで、北斗七星の形になっていて。
ただ、そういうことでいえば、とにかく平井さんの一生の取り組みとして、北斗の水くみが誰も注目しないというのを、あくまで北斗の水くみを一般の人たちに普及していくという、あのくじけない意欲とその実行力というのは、なかなかすごいなと思いました。

**伊津：**先ほど、そういうことをいうと田んぼの話が出たのですね。お米をつくるという。そうすると、みんなイメージとして、日本人だからお米を食べて、田植えから稲刈りまでできて、それでおもちまでつくれて、それがいいねというけれども、現実は悲しい現実なのです。お米をおいしいと食べている人は、非常に少ない。結局、何かおかずがあって、そのときにお米があればいいね、お米でなくたって、パンだって何だっていい。本当においしいお米を食べていないのはなぜかといったら、本当においしいお米をＪＡが売っていないということが分かったのです。去年、分かりました。どういうことかというと、量さえ採れればいいと。だから、自分で、そんなことはとてもではないけれども間違っているから、おいしいお米をつくるという人はどうしているかというと、直接お客さんを見つけて売っている。いいお米、おいしいお米として評価されて、魚沼のコシヒカリみたいになったものは、おいしくなくたって魚沼のコシヒカリという名前が付いているから高く売れていく。でも、本当においしいお米を、安全でおいしいお米を売っている人は、ＪＡ、農協に出さないで直接販売をする。

宗像市に東海大の農学部を卒業して、今、27～28 歳の若い、米だけを作って、無農薬・有機栽培のお米だけで、結婚して奥さんがいて、子どもも生まれて、一家を養っている人がいるのです。そういう人の取り組みというのを、電子博物館として扱っていく中で、その人が田植えから稲刈りまで。それで、彼は今度、おにぎり屋も始めるみたいです。おいしい米で、おにぎりを作る。そういう取り組みを、全体として取り組んでいるということよりも、何か個人でもいいから、何か独自の取り組みをしているものを扱っているということが、ひょっとすると、非常にローカルな話題だけれども、グローバルな話題に発展していく気がするのです。

ですから、少し私が関わっているところで、お米について、もう少し本当のことを知ってもらうということは、とても重要なので、「お米を食べろ、お米を食べろ」と言って、なぜ売れないかなと。それで、私から買ってくれた人は、みんなおいしいと言うのです。おいしいというのに、では、今まで何を食べていたのと。たかが４年しか米作りをしていない私から米を買って、今まで食べたことがないくらいおいしかったと言うのだったら、今までのお米は何なのか。それが、やはり日本の農業政策の大きな間違いであるということに気付きました。
こんなことをむなかた電子博物館でどうやったら扱えるかというのも、非常に中立、スタンスをどこにも置いていない博物館ならではです。ですから、スポンサーを取るというのもいいのですけれども、スポンサーにとらわれてしまわないやり方というのが、とても大事かなと思います。

## ６．むなかた電子博物館の問題点

**司会：**少し余計なことも言いましたけれども、そんなわけで、むなかた電子博物館の問題点を指摘されるのも遠慮されているかと思いますので、司会者の責任で、私がずーっと思ってきて、これから絶対実現しなくてはいけないことについて指摘したいと思います。

まず、第１はログインです。個人個人を識別する機能をどうやったら付けられるかということです。今はログインというと、面倒くさく考えないで、大体のウェブサイトで結果を得ようとすると、メールアドレス、パスワードです。ですから、メールアドレスとパスワードで、メールアドレスというのは、結局、携帯でも何でもいいから、その人にメッセージを送るときに必ず必要なので、メールアドレス。そして、パスワードは、何か簡単なパスワードをその人に考えてもらうということで、やはり、電子博物館がアクセスできない限り電子博物館の良さというのは出てこないような気がするので、ですから、これについて、何かご意見があったら伺いたいと思います。結局、ログインをすると行かないという結果になってしまう危険性もあるのですよね。

宮川さん、何かありますか。

**宮川：**ログインをする、そういった個別の識別ができれば、ユーザーの属性というか、それに応じたものも提供できますし、もしくは、今までの記録なり何なりが分かりますから、提案することもできるということで、そのコンテンツ自体の満足度も高まることは期待できると思うのですけれど、今、伊津さんがおっしゃったように、ログインの１つの手間といったところで、敷居が高くなるのではないかというところが、少し危惧するところではあります。

特に、実はログインそのものも、例えばFacebook なり Twitter なりのアカウントを持っているのであれば、そこと統合認証というのですけれども、そちらのアカウントを持っていることで利用できるとか、個別の認証をするということもできますので、以前に比べればだいぶ楽になったというところもあるのですが、一番どうしようかと、私もまだ答えが出てないところが、子どもをどうしようかというところなのです。子どもに対して提供したい、でも、子どもに対してメールアドレスを求めるのか。そういった情報教育をどうするのかといった段階になっているわけですから、アカウントをそれぞれ１人ずつに発行するというのは、現実的にはやや、今の段階ではまだできないのかなというところで、どうすれば解決できるのかという立場ではありますけれども、今、非常に悩んでいるところではあります。

**司会：**そうですね。何か他にご意見はありませんか。

**上野：**ログインの意味が分からないのですけれど、ログインしたら……。

**司会：**結局、例えば、ログインしたらその人が特定できるわけでしょう。

**上野：**でも、トップページからですか。

**司会：**どこでログインを置くかということは、いろいろあると思うのです。だから、ログインしたらもっといいことがあるということだと思います。ログインしたらポイントたまっていくとか。

**宮川：**ウェブサイトでサービスとして電子博物館を作っていくということであれば、アカウントあることの意味を見つけなければいけないでしょうけれども、自分のオリジナルに合ったようなサービスを提供するとか、もしくは、先ほど言われた、ポイントでもそうですし、もしくは……もしかしたら現実的なのは、まず、すぐできるところは、リポーターについてのログインなのかも分からないですけれど。

**上野：**それだったら、いい感じでしょうけれど。

**宮川：**それであれば、先ほど言われた、質のいい回答をした場合にはポイントが付いて、そのポイントの状況で何かをということを、表彰するなり何なりというのもあるかもしれせんし、１つ、そういったゲームライクに、やったこと、参加したことに対して勲章でも何でも付けるというが、最近、よく幾つかのサービスでありますけれども、そういったところにやるというのは、１つの形ではあるとは思います。

**伊津：**だから、例えば子ども用ページとか、あるいは英語ページとか、いろいろ表示を変えようということは、では、それはその人がクリックして変えるのがいいのか、それとも、ある段階で質問して、子どもと大人で、「名前だけでも書いてね」みたいなことだったら、その後、その人は子ども用ページに行くのか。

なぜそんなことを言うかというと、海の中道のマリンワールドの館長の高田さんが座談会をやった時に、実際にマリンワールドへ行って話を聞いた時に、中で展示を見せてもらった時に、「うちは、もうお客さんが入る時にこれを入れてもらいます」と。そしたら、その人が、中のどこかの別の展示のここへ行ったら、前に見ていたらすぐに、「前にはこういうのを見ましたね」というのができるように今はなっているということで、マリンワールドは個別の識別をしているのです。

その個別の識別が実際の水族館でもされているのに、電子的なウェブを使っている仕組みの電子博物館でできないのはなぜだろうということになるので、これは、どう使うかは別として、その仕組みをまず持つことがとても大事だと思います。そうしないと、議論が先へ進まないような気が、私としてはするのです。

だから、ログインという言葉で代表してしまうけれども、一般的な入館者別の展示を提供する。だから、海の中道のマリンワールドなどは、もう展示は１つしかないですから、どんな人だろうと同じ展示しかありません。でも、そのサブとして、あの端末を持って行くと、そこへ別の表示がされていく。あるいは、家へ帰ってからも、その端末で記録が出てくるのかな。何か持って帰るような……だから、ある学校のプロジェクトみたいになって、そこに貸し出していくとかいうような、いろいろな試みもしているようです。それが唯一最大の、それで、システ

ム管理している会社にも、とにかくログインができることというのは絶対条件だと。

一番最初に、むなかた電子博物館ができた時に、私はイメージとして、XOOPS（ズープス）という、私が昔よく使っていたＣＭＳ（コンテンツ・マネジメント・システム）という、ウェブを管理する仕組みで、ログインはそこがあって当然と。でも、しなくてもいいのだけれども、あって当然。だから、ログインだけはXOOPSを使うというのが、よくやられていたのです。今はもう、それから何十年もたつので、もっともっといろいろなことが楽にできるようになっているので、そんな仕組みがあったらいいなと思っています。

そういうことをずっと思っていたので、つい言ってしまいましたけれども、ぼちぼち時間も残り少なくなりましたので、むなかた電子博物館は、さて、これから10年持つか、持たないか。持たせるためには、今のままでいいというはずはないので、むなかた電子博物館がこんなふうになったらいいという、何かアイデアとか、イメージで……

**河田：**そのアイデアの前に、本当にそういうことも最後には検討しなければなりませんけれど、その前に、どうしても質問してお聞きしたかったことがあります。

何年か前に、民主党が政権の時に、蓮舫さんという女性の代議士が、「これはいいです、これは悪いです」と、事業仕分けをしたのですよね。それで、ある科学の、文科省かどこか分かりませんけれど、この事業は世界一ですと言ったのです。その時、有名な言葉で、「なぜ１番ですか、２番では駄目なのですか」という質問をしたのです。新聞とかマスコミにどんどんフィーチャーされたのです。その時、それと関連して、後に、電子博物館を……来たでしょう。そして、ユリックスで展示したのです。あの時、私、もちろん聞きに行ったのです。いろいろ、３、４カ所くらいあっていまして、電子博物館の展示があった時、私はしっかり聞いたのですけれど、その時にいたメンバーの人が、もちろん資料を既にもらっているのです。東京から来る時に見て、「電子博物館。博物館をなぜパソコンでやるの？」とか言って、もう何も分からないで来たのです。それで、どんどん説明したのです。そしたら、「ああ、これはいいな。金も掛からずにいいな」というふうに、その場の雰囲気がなったのです。

それを私はずっと聞いていて、「ああ、これはいいな」と思いました。では、他の地方自治体でこういうことをやって、いろいろ地中から掘った掘り物がありますと。博物館をつくりますと。従来の博物館を造るときには、土地を買って、建物を建てて、それを飾ってということをしなければならないでしょう。こういうものをもう１カ所に集めて、こういう電子博物館でありますよという、こういうやり方ですね。私はその時、もちろんメンバーでしたけれど、「ああ、むなかた電子博物館のやり方は、将来、日本の電子博物館もこういうふうになるのかな」と思って、非常に楽しみにしていたのです。その後どうなったかは全然知りませんけれど、むなかた電子博物館を参考にして、他の市で博物館をこういう電子でしている行政はあるのですか。聞いていませんか。

**伊津：**私が知る限り、展示施設を持っているところが、電子的に展示博物館あるいは美術館というのを別に持つというのは、もうどんどん増えていますね。だけども、電子的なものだけで成り立っているというのは、ごく少ないです。

**河田：**そうですよね。九州国立博物館でもパソコンでしても映りますからね。それとは違うようなね。

**伊津：**だから、結局は、金が掛からなくていいねということなので、電子博物館を作ってしまうと、予算が出てこないということでしょう。だもので、箱物を持っているところが作ることはできるけれども、箱物を持たないところが新たに電子博物館だけというと、なかなか難しいのではないですか。たまたま、ここ宗像市は、そういう全体予算が総務省の予算の中に、電子博物館という名目であったので、嫌でも作らなければいけないという中で、ぽっと浮かび上がってきたということだと思います。
でも、イメージとしては、例えば国立民族学博物館の初代館長で、あれを一生懸命つくった梅棹さんは、博物館は情報館だと。彼は、まだコンピューターなど大して使われていない時代に、ウェブなども使われていない時に言っているのです。まさにそうだと思います。それが、今だったらできるし、でき過ぎてしまって、グーグルの検索に言葉を入れれば何でも、「むなかたの蝶」と入れれば西田さんの展示も当然引っ掛かるけれども、それ以外にも出てくる。とすると、博物館の枠組みを越えていろいろなものが出てきてしまうから、むなかた電子博物館はあのグーグル検索を越えるコンセプトを持たないと、やはり勝てないということでしょうね。
その辺りは、宮川さん、何か意見があるのではないですか。

**宮川：**今の、リアルなものが、要するに宗像市の場合ですと、我々、電子博物館が進んでいったその先にリアルなものができて、別に、それだけであり得るとは思わないのですけれど、１つのモデルケースだと思うのです。つまり、リアルなものと相反するものではなくて、その間に入っているのがこの電子博物館だというのが私の考えです。

今、ウェブが、技術も非常に進歩しているというところもあって、コンテンツを単に置いているだけですと、電子博物館を入り口にする必要というのは全くないのですよね。コンテンツを単体で見るだけなら、それこそグーグルで直接見られてしまう。見えないようにするとかいう技術もありますけれども、どうも、それは本質的ではないような気がするので。では、むなかた電子博物館に入っていくことが、何がいいのかという利点なり何なりを提示するところが、次のステージなのかなというふうには思います。それが、１つ、むなかた仙人は、もうずっと前の、当初からのアイデアであるなら、まさにそれは実現するべきミッションなのではないかと、私は強く思ってはいるのですけれども、それが、市とか役所もいろいろあったりというところもあるかもしれませんけれども、もしかしたら、ここが間に入るところになるのかも分かりませ

んし、そういったものもできるのではないかと思います。

## ７．むなかた電子博物館の役割

**平松：**平成 23 年、宗像市民俗資料館、鐘崎の岬地区にありました。この民俗資料館は海女の資料が大変豊富で、海に本当に面して、２階、３階から見る景色も大変素晴らしい建物で、今は岬地区のコミュニティセンターになっています。ところが、経営難で、来館者も少なくて、閉鎖されたのです。それを、大変惜しむ声がありました。それで、電子博物館で記事として取り上げました。それが、平成 23 年９月です。このように、なくなってしまうものをためて、将来の教訓にする。そういう使い方もあるかと思います。

**司会：**そうですね。

**清水：**今の話とも関連するのですけれど、こういう施設の中で、電子的に博物館を運営しているところというのが多いのは確かなのですけれども、基本的には、その館のガイダンス機能という位置付けでの、電子データの提供という話になってくると思うのですが、やはり、ここでもう一度、再度やっていく必要性があるというのは、ここの電子博物館の収蔵庫自体の充実というのが必要ではないかと思っております。

先ほどの、平松さんの話の中に、今、岬地区に、そういう海女の関係であるとか、船大工の関係であるとか、漁具、そういうものが約 1,200 点あるのです。この 1,200 点というのは国の登録文化財に指定されている物なのですけれども、そういう物が実際、表に提供されていないという現実があるのです。それと、今、市史編さん事業ということで、また本格的に、合併 10 周年を１つの機にしまして、再度、市史編さん事業に取り組んでいるという状況があります。そういう中で、たくさんの新しい資料であるとか、新発見のものというのが、またクローズアップされてくる。それが１つのちょうどいいチャンスではないかと思います。

よく博物館でバックヤードツアーとか、いろいろありますけれども、そういうものをこういう電子上でも展開できるようにするためには、やはり、その収蔵庫の蓄積というか、そこを充実させていく必要があるのではないかと思っております。

**伊津：**開館当初に作られたもの以降、ほとんど増えていないのです。ですから、宗像市が次々に遺跡を発掘したりしているもの、それから、そうやって民俗資料として蓄積されているものが登録されていないから、それ以降、新しい民族資料というのは何も上がってこないということで、ぜひこれは、まず写真を。よく言えば、８枚撮るということで立体的に表現できるので、写真を８枚撮って、何百、何千の資料を幾らで作れるかというのを、事業として、それこそ競争入札ではないけれど、入札にかけて、それを作ってくれるところをやったらいいと思います。

それを具体化していかないといけないので、なかなか、「作ったらいいね」「でも、お金がないから」と言うけれど、では、それを３年に

分けて、今年度幾らの予算でということで分けていけばいいと思うのです。今の収蔵庫などが、古いデータベースの仕組みの展示方法なので、もっと新しい仕組みを使って、見やすく、なおかつ立体的に見えるようにしたら、非常に価値が出てくると思うのです。

それで、そうやって市史の編さん事業が始まっているのだったら、まさに市史の中に、ＵＲＬでむなかた電子博物館の展示を結び付けるようなことができたら、市史の目玉になって、新しくなって、面白いかもしれないですね。

ぜひこれは、４月以降、電子博物館の取組として、実際にあるものを活かしていくということは、やってみたらどうなのですか。ぜひ、次の議題に乗せるようにしましょう。

**西田：**清水さんが充実の必要性を言われましたが、私も全くそのとおりだと思うのです。具体的な例を挙げますと、例えば、「自然」の中の「むなかたの野鳥たち」を開いてみますと、「ただ今画像を準備中です」。それが、私が知ってから過去５年間、ずっとそのままなのです。あのまま放っておくと、今後 10 年間あのままのままです。画像を準備しているのがさらに 10 年間続くと。それと同じようなことが、「宗像の植物」にも見受けられるのです。ああいうふうに更新をしないと、何か、ほこりをかぶったような感じがしまして、少なくとも２、３年に１回は画像更新をしてもらいたいところです。やはり、画像には撮影年月日と場所を書くということによって、それを提供した人の責任感ができるのです。そういうことで、充実といっても、今の足りない部分を更新することによる充実というのも必要ではないかと、私は思っております。

**上野：**それに関してなのですけれど、最近全然見ていなくて、今、ざっと見せてもらったのですけれど、皆さんは多分ずっと見てあるから何とも感じないのだろうなと思うのですけれど、私が見て一番思ったのは、例えば「蝶」で、たくさん登録してあってすごくいいなと思うのですけれど、美術館とかに行ったら、まず展示物がばーっとあります。新着があって、そこをクリックしないと写真が見られないというのは、すごくもったいないなと思います。だから、例えば蝶だったら、「何々を追加しました」というところは、もうそこを写真にして、写真をばっばっばっと並べることは、システムを少し修正してもらったら多分できると思うのです。

**司会：**確かに、ずらずらずらずらーっとあれば、「これだけあるんですね」と。

**上野：**結局、小学生とかは、名前では調べられないから、まず写真が新着に上がっていて、それをクリックしたらその中身が見られるというような、ちょっとした構成を変えると、もう少しアクセス数が上がるのではないかと。何か、せっかくこんなにたくさんアップしてあるのに、多分子どもは、どの蝶だからどれをというのは、今のページだったら全部開かないと調べられないというが、すごくもったいないと先ほどからも思っているので、多分、ここは少し変えてもらったらいいかなと思うのです。

そして、例えば、今調べたのは「コジャノメ」

ですが、そのところの一番下とかに、「あなたの分からないものをこの人に聞いてみよう」みたいなボタンを作ってもらって、それぞれのコンテンツの各ページに、「聞きたい」のボタンを押したらメールが行くとか、そういうものをしてもらったら、先ほどの、問い合わせが今まで全然ないというのも、こういう写真を撮っている人に聞いてみたいとか、そういう直接のアプローチができるのではないかと思いました。今のページだと、もう少し工夫したらアクセス数が上がるのではないかというのがあります。

**西田：**それは、私が思うに、例えば「宗像の植物」の室長さん、だから、箱物の博物館で言うと、宗像の植物の展示室の責任者、室長さん、それがいないのです。野鳥についても、室長さんがいないのです。だから、例えばそういう問い合わせが来ても、誰に投げ掛けていいか分からないという状態なのです。

**上野：**では、本当は室長を置けたほうがいいということですよね。

**司会：**ぜひ、これを機会に、それぞれ、こういう人がいるよと、まあ、上野さんに鳥をやれというのも無理な話だと思うのですが。

**上野：**いや、室長にはなりきらないです。でも、この蝶のページも、新着のところを写真に変えてもらうだけで、イメージが全然違うと思うので、そこは変えたほうがいいと私は思います。

**司会：**これは座談会なので、言いたいことを次の委員会で、そこの具体的なお願いをシステム会社にしていくということにしたいと思います。話は尽きないのですけれども、具体的に指摘されたことが、なかなか現実として反映されていかないということが長く続いていて、この市民の協働の組織もまだ１年しかたたないので、その具体化を次の時にしていくというのは、とても重要なことだと思います。

それで、担当者がいないということは、前に宗像市が作っていたコンテンツをそのまま受け継いでいるというのが、「自然」には幾つかあるので、それが更新も全くされないので、そういうことを含めて、新たに電子博物館としてどうしていったらいいか。運営委員の手ですべてやるわけにはいかないので、運営委員ではなくて、ある部分だけに協力してもらう人とか、場合によっては、運営委員にも加わってもらうとかいうことを、ぜひとも、皆さんを通して呼び掛けていきたいと、この座談会として、司会として、皆さんに参加していただいたので、何とか呼び掛けていきたいと思います。

それで、今日は、重要なテーマである「北斗の水くみ」について、中心となる実行委員長の平井さんが、急きょ参加できないということでしたので、日を改めて、平井さんを加えて、「北斗の水くみ」関連の話を聞くという会を持ちたいと思います。

大体時間になりましたので、これにて座談会をお開きにしたいと思います。ご協力どうもありがとうございました。

# 座談会

## 「北斗の水くみ」写真展を中心に

出席者：
石黒正紀、平井正則、平松秋子、堀内伸太郎、宮川幹平、伊津信之介（順不同・敬称略）

**司会：**「北斗の水くみ」写真展、今回、2014年に初めて最優秀賞が出まして、これまでもう7年ですか。その実績というのは、どこからも評価されていることなのですけれども、実行委員長の平井さん、「北斗の水くみ」への取り組みについて、何か語るところがあると思うので、ぜひ、まず切り出しにお願いします。

**平井：**10年、電子博物館で水くみを取り上げたことで、かなりたくさんの宗像市のことを、九州、ほとんどの人たちにそういう話が伝わったということは非常に大きいことで、もともと大学で、昔、新聞だとかでやっていたのだけども、そういうものとは比較にならないくらい情報が伝わって、すごいなと思いましたし、そういうものが宗像市の関連の、こういう皆さんの力であるということが、やはり情報源として非常に大きかったのではないかと思います。

10年のうちの最後である去年、全国で北斗七星を取り組んでもらおうかなという取り組みまで進んでいるということで、これは百年の計ですから、10年くらい大したことないのですけれども、ぜひ、よりたくさんの方に理解していただいて、楽しんでいただきたいと思っています。

それから、もう１つは、ステップアップについては、宗像市が公園をつくっていただいたと。公園は、全国的にもそういう観望公園というのは珍しいのと、実際、星を見ようとか、そういうのは全国であるのですけれども、どうしても夜だし、トイレがないとか、非常に危険だとか、そういう点でいうと全国的にも珍しい星を見るだけというか、空を見る公園ができたということは大きいと思いますね。アマチュアの天文家の方々のごく市民的な観望会に関わっては、非常にいい代表となるような公園と言っていいと思います。

ただ、やはり現実には、行ったら、みんな花火をしていたりとか、いろいろな問題、明かりの問題はあるのですけれども、でも非常に素晴らしいと思います。１つのステップアップかなと思います。これも、むなかた電子博物館の活躍に、大いに負っていると自負しております。

**司会：**「北斗の水くみ」写真展は、運営委員会のほとんど全員で取り組んでいるのですけれども、写真を実際に撮っている人は少ないのですけれど、平松さんは写真も撮られていて、「北斗の水くみ」との関わりで何かございますか。

**平松：**これは、去年の８月 25 日８時 52 分です。少年自然の家の屋上から撮りました。

この時間帯は、まだやはり高いですね。でも、大変きれいに晴れて、よく見えました。７つ見えるというのはなかなか難しいのです。去年は、やはり雨が多くて、なかなか機会が少なかったのですが、確実にひしゃくの底が２つ海面につく、これを撮るのは難しいですね。

**司会：**そうですね。その辺りで、平井さんはずっと天文を専門でやられてきて、海面ぎりぎりの星を含めた写真を撮るというのは、かなり難しいのではないですか。

**平井：**これは、難しいというのにいろいろな意味があるのですけれど、例えば、もう少し南のほうに行くと沈むのです。水平線の近くで沈むと、２つの星は見えなくなるのです。水をくまないのですね。結局、ちょうど宗像の所で２つもかすかに見えて、かつ、ひしゃ

くの全体が見えるという意味で非常にいいのだけども、普通の人は理屈で考えると、「いや、ここのほうが沈むのではない？」という話があるのです。そういう現実の現象に対する見方でいって、宗像の特異な部分が、アマチュアの方でも、結構うわさだと抜けてしまうのですね。だから、実際見ていただいて、「ああ、なるほど、こんなふうに」ということが、まず１つ。

それから、でもやはり宗像でも低い所では、大気減光で暗くなる。それから、周りのシティライトではないけれども、船とかの明かりでつぶれてしまうのですね。それは、今年の７月から、この電子博物館の活動として、カメラでそれを追い掛ける。そして、ある程度のテクニックも擁して、下の２つがきちんと目で見たように見えるように、そういうような実験を計画していますので、今年の終わりにはこういうふうになるのですよということをお見せすることができるかもしれません。それは１つの、皆さんに対して、提供として非常に大きいと思います。

そういう周りの邪魔な光によって隠される部分もあるけれども、幾何学的にはそういう点では、非常に宗像ならではの姿をしているというふうに思っています。答えになったかどうか分かりませんけれども。

**司会：**天候というのが、経年変化、だんだんに変わっていくのと、それから年によって変わりません。今年 2015 年は、非常に雨が多いのですけれども、昨年 2014 年もかなり天候に恵まれない状況でしたよね。そうすると、長い時間軸の中でだんだん気象状況が変わっていくのと、それからここのところ数年、異常気象のようなことが起こっているのと、「北斗の水くみ」写真展をずっと開催し続けることの関連性というのは何かお考えがありますか。

**平井：**いやいや、10 年で写真展が若干疲れているというか、少し鈍化しているのですね。もちろん、最初は話題になるとわーっと押しかけたわけですけれども、だんだん寂れていっている部分があるので、その辺は我々の活動の中で冷静に捉えていきたいというのが１つですね。

それから、天候に関わる部分は、北斗七星は私も少し紀要に書きましたけれども、千年オーダーの姿ですよね。我々は、今、人生 80 歳か 90 歳か知らないけれども、100 年程度の気象記憶ですけれど、我々は、江戸時代はこうであるというような周期を見ているかもしれないので、私は異常気象とかそういうのは非常に好かんのです。そういう見方はいけないと思うのです。もっと、ロングスケールの気象現象の変化が起こっているのであって、極端に言えば、非常に寒い時期と非常に暑い

時期があって、スケールはもっとでかいのです。だから、あまり異常気象だという議論は蒙昧にやらないほうがいいのではないかと。

ただ、我々のいわゆる産業革命以降のいろいろな仕事によって大気が汚れていくということについては事実でしょうから、その要素がどのくらいあるかは十分なスケールで考えないといけないのではないか。ただ、そう言う私にとって一番謎は$CO_2$がどんどん増えることです。明らかに増えているわけで、それについてだけは少しクエスチョンですけれど、それ以外については天候で雨が降ったりとか、そんなのは昔、江戸時代にはこの辺は日照りが続いてとか、いっぱいあるのですよ。そういうことを我々の人生ではなかなか気付かないから、データも非常に少ない時代のものでもあるし、あまりペシミスティックにこの天候状況を考えないほうがいいのではないかというのが１つ。

それからもう１つは、そうやって人々が、宗像の方々が生活の中で空を見ているわけですから、行って、「ああ、曇り空だった」という以上に、我々宗像の地元の人たちが自然とともに生活しながら、「あ、きれいな空が来た。北斗七星の水くみを見に行ってみよう」という、そういうことが我々の基本的スタンスですから、グローバルに北海道の人が見て「九州は雨が多いから」ではなくて、この宗像の地で生活する中で、「今年はこのくらい晴れたな」「このくらい水くみが見えたよ」というような姿になってほしいということです。今言っているのとは少し違う向きを、視点を我々は提供しなければいけない。そういう見え方を、我々は天候を踏まえてやる必要があるのかなと思います。

雨が多いというのは、私は 30 年も教育大にいて、30 年も学生に卒業論文で１年中空を見させています。ある年は、もう全く空が見えなかったとかあるのですよ。そういう子は、自分の目的が果たせなくて卒業して、いまだ現場で一生懸命やっていますね。自然というのは、そういうものもあるんだよということは、きれいな空ではなくて、勉強かなと思うので、私はそういうことについてはあまりペシミスティックになる必要はないと思うのですね。

むしろ「北斗七星が水をくみます」という呼びかけの中で、空を見ようよという、そういう姿勢をつくることがやはり大切かなと思います。単に水くみではなくて、そういう学習でもあると思うのです。

**司会：**生の、現実の、現在の自然に接する機会をつくるという意味で、「北斗の水くみ」写真展に参加するというのは意味があることなのですね。何かこの話題に関連して。

**平井：**堀内さん、写真でというか、今までの全体を見たらどうですか。こういうところはないなとかいうのはあるのですか。

**堀内：**自分も平松さんに誘われて、何度か写真を撮りに行ったのですけれども、やはりその日の雲の出具合とかが、条件が大変シビアで、雲が少し出たら駄目だし、昨年の夏のように天候不順が続いたらどうしようもないです。

　ただ、この宗像ならではの天文現象を電子博物館ということで外部に発信できるというのは、地域、国を越えていろいろな人が見てくれるというのが一番いいと思います。今までずっと実行委員会に入っていて、そう思います。

**平井：**北斗七星は７個もあるから視野が広いと言えば広いけれども、狭かったらあまり雄大でないよね。そのくらい大きい。その代わり、視野が広い分だけどこかが曇ったりとか、部分的な曇りというのは存在するのだけど。堀内さんは写真が上手だよね。

**司会：**堀内さんは、前は写真の学校へ行っていたのですものね。

**平井：**だから、応募するなということはありますけれど。まだまだ今の姿をどうやって撮るかについては、いろいろ工夫があってしかるべきです。

**司会：**ところで、話題が変わって、「北斗の水くみ」写真展の応募の要求として、北斗七星が水をくむというのと、もう１つ風景も一緒に撮れているというのが、こういうテーマの与え方というのは、ほかの天文の写真ではあるのですか。

**平井：**ありますよ。ただ、北斗七星と地域というのを結び付けた写真展ということですね。この場所の北斗七星。北海道とかで見ると寒く見えるとか、そういうのは結構あります。我々が取り組んだときに、宗像ユリックスのプラネタリウムでも、彼らがということではないけれども、「全国で北斗七星めぐりみたいな形の写真展をしたらどうですか」という話もあったのですけれども、ちょっと我々はまだ余裕がなくて、やめているのです。

　そういうことを言っていたら、ＪＲで「ななつ星」とかいう高級電車が走ったそうで、何かあまりよく分からないのですけれど、何となくみんな気分良さそうですね。でも、「北斗星」という特急は北海道で展開されていますよね。そういったこともあるので、北斗七星というのは結構ポピュラーなので、そ

の写真を撮ろうという人たちの取り組みは歴史的には随分たくさんあるのです。ただ、今やそういう特異な北斗七星というのは、取り組みは少ないです。

**司会：**難しいと言えば難しいですよね。地球から北斗七星まで距離はどのくらいあるのですか。

**平井：**そんなことを言われても。（笑）

**司会：**無限大に遠い距離と、近い数十メートルの距離の被写体を同時に一緒に完璧に撮れという、かなり要求度の高い写真展ですね。

**平井：**プロも無限大に、天体に対して撮るということですからね。

**宮川：**そうですね。学校等でも、学生さんが写真を撮るというのは、最近みんなスマートフォン等があるので、写真を撮ることの敷居は非常に低くなっていると思うのですけれども、スマートフォンの搭載カメラ等でもそれなりに撮れるものなのでしょうか。それともやはり厳しいでしょうか。

**平松：**いや、今できるのです。最新のスマホで撮れるのですよね。

**平井：**夜間モードというのを使うとね。このごろは、若い人は見るよりも写真を撮るほうがですね。

**宮川：**そうですね。観光地でも写真を撮って回っているようですけれども。

**平井：**私たち年寄りは、星を見ないと、写真を撮っていると星を忘れてしまうものね。やはり我々は頭が固いのかな。

**宮川：**ただ、比較的そういった意味では、すそ野が広がる素地はあるような気がするのです。「こういうのも撮ってみたらどう」というのを１つきっかけとして示せればね。

**平井：**平松さんは頑張って、「その辺で撮れるよ」と随分言っているのだけれど、なかなか伝わらないよね。

**平松：**そうですね。

**司会：**写真展は、回を重ねて、今度、８回目です。むなかた電子博物館は 10 年目、北斗の写真展は８年目。そうすると、むなかた電子博物館の歴史の中で北斗の写真展の歴史は８年となると、結構、具体的に北斗の水くみ海浜公園ができたということで、北斗の水くみ海浜公園というのが宗像の観光地図などには必ず出るのです。そうすると、この北斗の水くみ海浜公園で北斗の何かをやるというのが、去年、名前ができて公園の整備もできたので、これからかなり委員会としても取り組む必要があるのか、あるいはこれまでどおりなのか、その辺は、実行委員長は何かありますか。

**平井：**今年度の計画は今から作るのですけれども、公園で見るというのは、普通の方々にあまり心配なく、非常に安心して、安定して見られることがやはり非常に大切ですね。だから、アマチュアの方々はご存じですけれども、すごく厳しい条件の中で写真を撮ったり、楽しんだりするのが、天文のマニアの方には楽しいのだろうけれども、普通の方々にはとにかく入り口としても、公園にはトイレもあるし、危険もない所で、特に夏は夜間、壮大な景色を眺められると。問題は天候がうまくいくかということだけですけれども、そういう取り組みをぜひやって、公園をうまく利用してほしいなと思います。

**宮川：**それであれば、電子博物館の中での公園に関しての特集というか、実際のものはほかにもあると思うのですけれども、それがあるからといって、こっちがやってはいけないということはないはずなので、写真展と絡めて、ここで撮りやすいとか、そういったそこの特徴、良いところを、ぜひどうぞというところを話してもいいのではないかと思います。

**石黒：**ですから、あらためて紀要の中で、１回「北斗の水くみ」に焦点を当てて何かつくってみるという手はあると思います。

**平井：**結局、私は何回も書いているのですよ。見てくれないけれど。それの特集を組むというのはいいと思います。

**司会：**それとあと、今、宗像の人にできるだけ写真を宗像で撮ってもらうということを中心にして、去年から、できれば離れた所の人にもということなのですけれども、あそこに水くみ公園ができて、トイレもあるというのですけれど、そのすぐ近くに「道の駅むなかた」というのがあって、かなり広い駐車場があって、そこは 24 時間のトイレもあったり、水も取れたり、結構キャンピングカーがとまっているのですよ。宗像は宿泊施設もかなりあるし、キャンピングカーで泊まって、すぐ

そばの水くみ公園で「北斗の水くみ」を実際に見たり、写真を撮ろうよというキャンペーンというのも、結構観光協会などと一緒になってやったら、「北斗の水くみ」の普及にもつながると思うので、この辺りはぜひ実行委員会にお願いしたいところです。

**平井：**だから、実際に撮っている姿を、ノウハウをページにするなり。

**司会：**多分、ネット、ネットと言うけれども、実際に観光で宗像へ来たら、「ああ、ここに水くみ海浜公園があるんだ」と。そこで何ができるかというのを知るとしたら、やはり現場に案内のパネルのようなものがあったほうがいいかなと、今、思いました。

**平井：**水くみ公園というのだから……あの壁の所に一応写真と説明が入っています。

**司会：**ありますね。

**平松：**銅板が入っています。だけど、もうさびがきている。

**平井：**そうなのです。塩でわーっとなってね。多分そうなるよね。なかなか難しい。

**司会：**だから、あとは電子博物館とのリンクをＱＲコードとか、最近スマートフォンはかなり普及して――日本だけはなぜかガラケーという、昔ながらの携帯にまた戻る人が多いみたいですが、あれは少し話が変わってしまいますけれど――そこから電子博物館の「北斗の水くみ」の解説とかにいければいいですよね。そうすると、このごろ読む機会が多かったのですが、あの解説がもう少しいろいろな視点から書く必要があるかなと。その「北斗の水くみ」の写真展の内容紹介を、もう少しこれから心掛けていったほうがいいかなと思います。

**平井：**今年、その動画ができれば、それを大いに利用して、動画でアピールしていくと。YouTube というのは、見た人が反応するような何かあるのですか。

**宮川：**そうですね。そこにログインをしていればですけれども、コメントを入れることができます。あと、良いか悪いかの評価ですね。そういったものを入れるということができます。

**平井：**YouTube もいいのですけれど、返ってくるのがあまりすっきりしないから、どうしたものかなと思っていたのです。

**司会：**だから、むなかた電子博物館の１画面から YouTube にいけるようにして、そこから返ってきたものをこまめに拾っていくということで、できるだけ自動的なレスポンスと手動のレスポンスとか、こういうものがありましたとかというのを付けていくと、反応も出てくるのではないですかね。

だから、やはり電子博物館で写真展を１回だけやって、それで終わりにしないで、それをどれだけつなげていくか、あるいは広げていくかということで、ほかの地域からも人に来てもらう。それから、いつでも見られるというのが電子博物館ですけれども、それについての話題を何か投げかけるというのもいいかもしれないですね。

**平井：**公園がオープンした時に、宗像市はお金もないし、市議会議長と市長と私と呼ばれて、３人でテープカットしたのです。下に幼稚園とか小学校の子どもたちがいて、YouTube に載ったのですが、全然反応がないのです。何だこれはみたいな。やはり取り組みは重要ですね。

**司会：**だから、ひょっとすると、「北斗の水くみ」というのが YouTube みたいな画面でぱっと出ても、そこに星のマークをちゃんと大きくするとか、そういうのがないと、普通のパソコンで見てもよく認識できない、インパクトが少ないというのはあるかもしれないですね。そうすると、やはりこれって何だろうといったときに、もう１個リンクをプッとやると動画が出てくるとかアニメーションになるとか、そういう点では「北斗の水くみ」の歌というのは結構面白いと思うのです。

**平井：**確かに。どういうふうに歌われるか、大きいなというのは。せっかく有名になろうと思っているのに。

**司会：**あとは、私はずっと思っていたのですけれども、この日本の宗像を中心にした場所以外の地域の「北斗の水くみ」というのは、いったい現場で見るとどうなるのかと。

**平井：**チュニジアの事件があったときに。

**司会：**ちょうどあのときに、別のツアーに少し前後して私はしたのです。あのクルーズでチュニジアへ行くというのも候補にあったのですけれども、ちょうど日程が合わなくて、行っていたら私は博物館に必ず行くから、そういう惨事に巻き込まれていたかもしれません。だから、今まで安全で、起こり得ないような所でも、今、起こっていますよね。そういうこともあって、なかなかへき地へ行って「北斗の水くみ」を実際に見るという機会が少なくなったので、できれば日本以外の場所での……

**平井：**済州島は非常に近いので、北海岸だから、飛行機を降りてすぐだから、ぜひと思ったのだけれども、ちょうど船が沈んだりして話題になったから、少し行きにくくなったけれど、７月だから。

**司会：**あそこだと緯度が同じくらいですか。

**平井：**ちょうど北側の海岸がね。朝鮮の灯火が見えなければいいと思うのですけれど、聞いたら朝鮮の灯は見えないと言うのです。空港から少し離れて東側の海岸に行けば、後ろには山があるし、結構いいのではないかと思うのです。韓国の我々のグループが、やるやるとか言っていて、なかなかしてくれないけれども。あそこは豪邸がいっぱいあって、私たちはなかなか行かないと言っていたから、結構リゾート地ですかね。福岡からだと 30 分くらいで、飛行機は週に２～３回飛んでいるからすぐ行けるのだけど、なかなかお金もないしとか言って。ぜひ行こう。近くの写真を。

**司会：**いいですね。むなかた電子博物館主催とはいかないけれども。

**平井：**今度、実行委員会で行きましょうか。ツアーを組んで、実際に行きましょう。

**司会：**話題も尽きませんけれども、むなかた電子博物館の座談会として、「北斗の水くみ」をこれから取り組んでいくということで、2015 年、今度の「北斗の水くみ」写真展は、何か意気込みとか、こうしようとかいうのは、これからですか。

**平井：**また、もう少し周知して、日常的にそういう情報が、もう一度入ることが重要かな

と思います。あと、撮った動画をどうやって、天候も踏まえて使うか。こういうことがあるのですよということを、それもお伝えする。オープンに、我々の動画が見られるような情報を発信することで、地域の方に 10 年目に、写真展は７年目ですが、もう一度北斗を見るという姿勢をつくっていただきたいなと思います。郷土の自然ということを踏まえて、まず、そこからもう１回出発しようかなと思います。

**司会：**ということで、締めくくりとして確認ということはないですけれども、「北斗の水くみ」写真展というのは、結局、現実の自然をいかにその時点で観察するか、それの手段として写真を撮ろうということで、大きな違いはないでしょうか。

今日は、貴重な時間を割いていただいて、皆さんありがとうございました。

**平井：**むなかた電子博物館の将来はないのですか。

**司会：**むなかた電子博物館の将来ですか。では、ここで１回切って、むなかた電子博物館の部分だけ。これはざっくばらんに、あとでどこかに突っ込むとして、むなかた電子博物館のこれからについて何かありませんか。

**平井：**将来について、今 10 年、では、これから先 10 年をどうするかということについて、皆さんにぜひ。

**平松：**やはり双方向的にならないと発展しないと思うのです。

**平井：**そういう例はありますか。例えば、発展してこんなにというのは。

**平松：**それは、やはりそういうところに見に行かないといけないかなと。

**平井：**例えば、どこですか。ご存じの所で言うと。

**平松：**金沢で、すごく有名な電子博物館がありますね。随分、昔だったから……

**平井：**金沢ですか。金沢市にあるのですか。

**司会：**でも、電子博物館だったら、ネットで見られるわけでしょう。

**平松：**見られます。

**平井：**双方向のコミュニケーションをやっているということですね。金沢の何ですか。建物？　博物館ですか。

**司会：**金沢大がやっているのでしょう。

**平井：**金沢大学ですか。

**平松：**最近、ちょっと見ていなかったから……。

**司会：**だから、双方向でも、インターネットの仕組みを使った双方向というのでないと、電子博物館には合わないのです。だから、そこを電子博物館としてどうして実現していくかというのが、今も、少し前も話題になったことだと思います。例えば、「仙人に聞く」みたいなことを、ずっとむなかた電子博物館に質問したり問いかけたら、答えが返ってくるということだけれども、その仕組みができていないということが、双方向が実現しないということです。だから、どこかほかにあるというよりも、むなかた電子博物館がやろうとしていることが実現していないということが、問題ではないかなと思います。

**平松：**それが実際問題になる点として、要するに子どもが見たら、ここが分かりませんと質問をしてきますね。では、それに対して答える人がいないから、できないのですか。

**司会：**いえ、その仕組みを、子どもが質問したのか、あるいは誰かいたずらで質問しているのかというのを区別することができないというのが一番の問題です。例えば、学校へ行って、学校の先生も一緒にいて、先生が代表で質問するとかいうようなことだったら問題ないのですけれども、本当に子どもだけで質問が出てくるかどうかですね。

　先ほども話が出たことなのですけれども、蝶の西田さんが一生懸命新しく写真を載せたりして、いろいろ知らない蝶もあるはずなのだけれど、誰からも「これは何だ」とか「これについてはどういうことなのか」とかいうのを聞かれることもなかったし、反応が全くないのです。その反応が全くないのが、私は日本人の大きな特徴でもあると思いますけれども、もう１つはやはり電子博物館の仕組みの問題でもあると思うので、そこのところをむなかた電子博物館としてこれからどうして

いくかというのは、とても大事なことだと思うのです。

**平井：**ただ、例えば水くみのときに、我々が発信したときに、宗像市の子どもたちが夏休みにどうしたかというと、宗像ユリックスのプラネタリウムに電話をかけて、「水をくむそうなのですけれど、どうしてですか」とかたくさん質問があったら、そう言ってしまえば悪口だけれど、プラネタリウムは「そんなん、知るか」と言って切ったという例があるのですよ。本当かうそか知らないけれども。だから、こちらがどういうふうに迎えているかということによって決まるので、それを伊津さんがむげに「いや、インターネットでないと駄目だ」とかという問題ではなくて、どうやってそういう声を入り口につくるかということが、やはり、ちょっと検討することは将来としてあるのかなと。

伊津さんの所にも、観望の日に、「水くみは何時ですか」と年配の方から電話がかかってきて、そういう問題に対してどうするかとか、カメラはどういうのかとかいうのがあるのです。そういう方々に対する双方向ということは、今おっしゃったように、レベルとして、この辺のレベルの双方向がいいとか、ここまですくい上げるとか、いろいろあると思うのだよね。だから、その辺の検討は、将来、インターネットである必要もないこともあり得るのではないのかね。

**司会：**だから、いわゆる現実の空間で、現在起こっている事柄について、インターネットはサポートにしかすぎないということと、電子博物館の中で、「北斗の水くみ」を実際に観望会や観察をするということをどうやってフォローするかというのは、やはり実行委員会として考えていかなくてはいけないですね。

**平井：**至近の例で、私がいろいろな肩書で、名刺も含めて宗像の役所で配ったりお話しすると、「その博物館は、どこに行きゃいいんですか」と、大概聞かれるのですね。だから、逆に言うと、例えば、私は「海の道むなかた館に、どうぞ行ってみてください」と。ここの窓口に居て、「実は、こういうものです」と説明するとか、そういうのだって、双方向であり得ると思うのだよね。だから、ちょっと、まだまだその双方向が、インターネットだけでは有効ではないような状況が確かにある。

ここでも、せっかく「水くみ」でこうダイヤル作っているのだけど、そのまま放っぽらかして、そこに飾っているだけだものね。そうではなくて、来た人がここかと分かっていただきたいのだけど、そういうふうな入口がないのだよね。それをどうするか。

**平松：**いや、たまに動かしています。で、どう見るかというのを聞かれたりします。

**司会：**だけど、あそこに案内のパネルが１枚あるだけで違うでしょう。

**平松：**違いますね。

**司会：**それがないのですね。ただ、もう実物が置いてあるだけだから、あれはまあ……。

だから、そのときに、できれば実物のパネルを載せてやるというのも親切だけど、もう１つ、私としては、ＱＲコードとか何かでネットのほうにできれば誘導していく。だから現実に、そこで対応することはできる。それだったら、もうずっといつだってできるわけで、ここに金さえ出せば「北斗の水くみ」展示コーナーをつくってやればいいだけですね。

でも、それで解決したら、電子博物館より、現物の博物館のほうがいいじゃないと。そういうことになるので、そこの行きつ戻りつのところをどうしていくかというのは、とても重要なことだと思います。はい、宮川さん。

**宮川：**それぞれ、さまざまな施設、先ほどの公園もそうですし、ここもそうだと思うのですけれども、そういったその現地に行った人が、そこでもやはりスマートフォン何なりで調べるというのが、今の大きな使い方であると思うのですね。

今、先生が言われた、ＱＲコードの話は、非常に示唆に富んでいると思うのですけれども、その現場について調べるときに、その現場の人に聞かずにそこでネットで調べるというのは、今の使い方の一般的なものだと思いますから、そこで誘引する、ＱＲコードもそうですし、もしくはＧＰＳ等々、その地理情報ですね。そういうところから、そこにマッチするような情報を提供できるような仕組み。まだ、今すぐというわけではないかもしれないけれども、技術的にはできているものですので、だから……

**平井：**それはお金がかかるのですか。

**宮川：**そのＧＰＳ情報を受け取って、それに対して、それに対応するページを返すようなプログラムにすればできます。ですから、例えば、今、水くみ公園にいるということであれば、水くみ公園でアクセスすると、もう、電子博物館のトップで、もう水くみ公園になったりとかですね。そういった……

**平井：**それは別に、そんなにお金がかかるのですか。

**宮川：**そこまでは。要するに、技術と手間というところでしょうか。はい、ですから、お金というよりも。

**平井：**その技術的なという、煩雑さですね。

**宮川：**ええ。なので、個別識別するユーザーアカウントなどで、興味を持っているというものと同時に、今どこにいるのかという地理情報を基にして、マッチする情報を提供するというのがウェブの流れでもあるので。そのリアルなものとうまく組み合わせてやっていくというのが、今後一つの形になるのではないかなというふうに思います。もちろん、その全くの、まだ行っていない状況で調べるということも、今まで従来型の形ですけども。

**平井：**それも必要ですね。

**宮川：**行ってみて、やはりもう少し調べたいというニーズに、すべての資料を置いておくというのもなかなか現実的ではないので、そうなると、そこで電子博物館のものを提示するというのは面白いかと思います。

**司会：**今、トヨタのレンタカーを借りると、トヨタのカーナビが日本全国だけど、宗像だとレストランとか名所とかいうのを紹介するようなキャンペーンをやっています。それで、そこのお店に行くと割り引きになるみたいな。だから、今、宮川さんが言ったみたいなことというのは、もう現実に、それはトヨタがどこのカーナビ使っているのか、カーナビの会社と連携してやっていることなので、だから、宗像市の観光課が、多分、そういうふうに今、観光にかなりお金を使っているので、そういう可能性というのはかなり強くなってきているから、電子博物館として、それにどうやって一緒になってやっていくかというのは大事なことかもしれないですね。

昔、ＧＰＳを使うというのは、すごくお金がかかったのですけれども、最近はグーグルマップに代表されるように、ＧＰＳで自分のスマートフォンの位置を出すというのは、どんなアプリケーションでも持っていますから、だから、それは大したお金は……。

**平井：**今、インターネットで、グーグルで「水くみ海浜公園」といって、歩くのと車と何とかと、ルートが出ているのです。

**司会：**例えば名称で入るのか、それとも地図の番地で入るのかというところがありますね

**平井：**それは、名称で入りたいよね。名称が入らないと。

**司会：**だから、そのためには、みんながもっと検索するという検索順位が上がっていけば、名称で出てくる。

**平井：**それで上がっていくわけですか。では、みんなで……

**司会：**だから、ある面で言うと、もうみんなに、海浜公園に来た人にはスマートフォン持っていたら、ちょっと検索で、ここでしましょうとかいうふうに。

**平井：**西さん、1,000（ガン 37:31）くらいプログラムでばーっと入れてしまってさ。そうしたら、しゅーっと上がっていくよ。

**司会：**だから、それをみんなやろうとするので、それでは駄目だというふうにグーグルははねつけます。

　だから、今、変な怪しい商法で、決まったサイトをひたすらクリックするとポイントが付いて、そして後で報賞金が出るみたいのを、年寄り相手にやっている会社があるのです。もう、振り込め詐欺みたいなものです。だから、結構お金持ちの、60 代以上の人がそんなのにはまっているというのがあるから。

**平井：**だから、平松さん、双方向ということはどんどん前に進んで具体化してきて、種類が増えたり、質が違ったりしているわけね。だから、将来、双方向というときに、システムを含めて、どこのところがポイントかということをやはり考えるようになってきたのです。だからその辺を、やはりもう少し具体的に将来として考えないといけないのですね。

**司会：**だから、双方向で、相手は、今、むなかた電子博物館を特定して聞く必要がなくなっているのです。アンドロイドのスマートフォンを持っているけれども、そこに「音声で検索」という、そのボタンを押して「ハッシュドポテトって何？」って聞くと、いろいろなところにいくでしょう。「何とか商店って何？」って聞くと、そこ。

　だから、もうそういうことで言えば、電子博物館が、特別そこへ行って聞かなくてはいけないということではなくなっているので、その中に、電子博物館がいかに有効な情報を出すかということが、結果的にその人を博物館に連れて行くことになるので、方法よりも

内容の問題がとても大事になると思うのです。宮川さん、そこはどうですか。

**宮川：**そうですね……

**平井：**電子博物館という知名度は、九州は……あまり関東だと知名度は、やはり結構低いのでしょうね。そういう知名度はどうやって広がるのだろうね。

**宮川：**そうですね……なかなか難しいですね。

**司会：**だって、アクセスログを見て、アクセスのカウントが低いです。あれはまさに、知名度が低いということです。ということは、結局、むなかた電子博物館にたどり着くのが、ＵＲＬを書いても、みんなそんなの使いはしないから。すると、検索していく。そうすると、みんなの興味のある内容でいく。そうすると、興味が出てくるためには、「北斗の水くみ」を、もっともっとみんなが、「あ、どういうことだろう」と言えるように、今は、現在のメディアを使ってやっていくことでしょうね。

**平井：**やる必要があるんだな。

**宮川：**そうですね。

**石黒：**１つのきっかけは、「北斗の水くみ」なので。もう１つ重要なことは、結局やはり中身をどれだけこう充実するかということで、現実にリニューアルできない部分が大量にあるので、そこを１回見直しをしなければいけないのだけど、今、その見直しをして直せる人材がいないのです。それで、もう１つやはり重要な問題は、ここにそういうことをやってくれる人たちをどう集めるかという、そこがもう１つ大きなポイントになるのですね。

**平井：**内側はね。

**司会：**だから、私は、この間、先ほども少し提案したプログラムのコンテスト。むなかた電子博物館で、今、ＧＰＳで位置をうまく使うプログラムのコンテストとかね。あるいは、遺跡の立体展示をするプログラムとか、一般のちょっと若いプログラムをするような人がたどりつけるような、「北斗の水くみ」写真展みたいなコンテストをやっていくことというのは、とても有効だと思いますね。

**宮川：**そうですね、ええ。

**司会：**何か知りませんかといって一本釣りで当たった人は大体忙しい人ですから。かなり高い金払わないと、時間をとってもらえないとすると、まだ学生で結構能力があって、自分の力を発揮できないような人たちの層を、もし見つけることができたら、それはあっという間に進んでいくと思いますね。

**宮川：**そうですね。それは、我々にとっては、またそういったものを求めている層というのは確実にいますので、作っていきたいと、どうやって作ったものを見せればいいんだ、何を作ればというところは、実はあるところがあるので。そういったテーマとして提示するというのは、いいものであろうなというふうに思いますね。

**平井：**ちゃんと公募するのね。

**宮川：**そうですね、ええ。こういうものを作っていきたいと。それで、ええ。

**司会：**だから、恐らく、そのプログラムをしているようなユーザーの集団に接点を求めて、そこからも発信してもらう。とにかく、いろいろな人たちから YouTube や Facebook や Twitter や、そういうものを通して、「あそこの博物館でちょっと面白いことをやってるみたいだから、出してみないか」と。そのときに、多少 10 万円くらいの賞金を付けても、むなかた電子博物館がこれから変わっていけるのだったら、そんなに高いものではないと思いますね。

**平井：**まあちょっと、お金はないのであれだけども、ボランティアも踏まえて、正式に公募して、ディテールを踏まえて、意見を見てみて、その様子によって、お金の問題もあるかもしれないし。もう少しエンジンがいないと。

**司会：**あと、もう１つは、そのお金をどう作るかというのは、これから電子博物館にとって大事だと思うのですね。バナーで協賛を求めて……だから広告を出してもらうと、その企業に拘束されてしまうけれども、バナーを載せるだけだったら、その企業は自分の企業のサイトへいくわけだから、むなかた電子博物館の内容がどうだということは、あまり関係ないとすると、「北斗の水くみ」写真展がこれだけ注目されるようになってきたら、星座関連やそういう所のスポンサーにバナーを出してもらうというのは、少しは可能性が出てきているのではないかと、私は思うのですけれども、平井さんどうですか。

**平井：**いえ、幾つか、トライとしては最初のころ、バナー作ってもらってやっていたんだけど、あまりスポンサーは出す価値を認めないから。無理やり景品だけ取ってくれということになったのですよね。だから、そうですね。どちらが悪いとも言えないと思うので、やはり我々の立ち上がりが問われているということは事実。そこに載せるから価値があるということではなくて、もう少し、やはり例えば有名になるとか、そういう問題があるのではないかと思います。

**司会：**だから、多分、企業や団体のバナーを載せると、企業や団体は、むなかた電子博物館に多少はアクセスしてくるようになると思うのです。だから、そのお金が高くはなくてもいいから、バナーを出してもらうことで、電子博物館の周知を進めていくことが可能なのです。

最近、宗像市のウェブサイトが新しくリニューアルしたのです。すると見苦しく、見苦しいと言ったら語弊がありますけれども、表面にいっぱいバナーが出ていたのが、お金をかなり出している所以外は出てこなくなったのです。だから、そういうことで言うと、今まで出していた企業に「むなた電子博物館、ちょっとバナー出しませんか」というので、バナーが表面に出る必要はないので。電子博物館の協賛とか、あるいは何ていうのだろうな、寄進。神社の寄進とか、お寺の寄進のような形でバナーを１つ出したら幾らというのを……

**平井：**まあ、そうだね。人件費を出すほど、そういうふうな展開というのは、やはり営業マンが１人いないと駄目で、また人が足りないよね。

ちょっと話があれですけれども、今年、ユリックスのプラネタリウムで「北斗の水くみ」というテーマをやるのですよ。もう多分、やって……知りませんか。

**平松：**見ました？

**堀内：**何かの、多分、そういうふうなのを……

**平井：**多分、新年度で始めている可能性があるんですね。誰かがちょっと見に行って、そこのときに、今言ったような、むなかた電子博物館の宣伝が入ればね。やはり、我々が宣伝すると同時に、宣伝費を稼ぐというふうに考えないといけないと思うのです。もう一発ではなかなか難しいと思うので、関連ある所から始めていけば。

**宮川：**あと、人というところで言うと、先ほどその仙人の話がありましたけれども、その仙人に聞いたときに返す。単純に、基本、機械的に例えば情報を、ＡＩなり何なりで検索エンジンを取るというだけだったら、もう本当に相当進度が進んでいるので、我々用として別個にやるならば、もうその場ならでないと分からないような、そういった、地元の人でないと分からないか、もしくはそういったところに本当に詳しいか、そういった、何というのですか、宗像市域に限らないでもいいのですけれども、そういったものに、草の根で詳しい方を、協力者という形で参画していただく。そういった方とのコネクションをより密にしていくというところでですね。

仙人が、もちろんその質問を受けたところで、そういった方が答えていく、仲介に入るような役割を持っているということでしたから、その辺りがより活発化していって、あとはそれに答えてくれるんだというところですね。私の学校の中でも、やはり「質問どうぞ」と言っても、なかなか来ないわけで、それに対して、何かしらの質問をさせたときに返ってくるというような形ができると、途端にやってくる。「あ、この先生は答えてくれる」ということになると思うのです。

最初は、学校なり何なりでいいと思うのですけれども、そういった質問なり何なりを頂いたものを、きちんと返しているということをしっかりと出す。一方は、どういう形になるか分からないですけれども、見せていくということと併せてやっていくと面白いのではないかなと思います。

**司会：**そうですね。だから、こちらの呼び掛けを、宗像市の広報の折り込みで入れると、印刷代だけで入れられるのです。宗像市に何万人かいても、１円としても何万円かで全戸全家庭に配布できるので、うまくそれを使うというのも１つですよね。だから、普通の新聞折り込みでは、結構お金かかるけれども。

**平井：**例えば、ユリックスに持って行って、今の「北斗の水くみ」を見に来た人にみんな配ればいいじゃない。

**司会：**パンフレットをね。だから、そういう地道な活動が大事だと思うのですね。

**平井：**そういうことから、積み上げていくといいのです。

**司会：**だから、今、このお手元にあるパンフレットを、ちょっと新しく作ってみて、これでは地味だなと思って 200 か 100 しか作ってないのですけれども、こういうのをここの玄

関と、取りあえず道の駅のインフォメーションの所には置かせてもらっているけれども。

**平井：**ユリックスにぜひ、使った人にも渡してもらってね。

**司会：**今度、持って、置かせてくれませんかということで、近々、行ってみます。

それで、実は、道の駅は同じような宗像市関係のものがいっぱいあって、やはりはけないのです。だから、いやもう、だいぶ前に置いたけれど、というのも、まだ残っていたので、新しいのに入れ替えてきましたけれどね。

だから、こういう媒体で、あってもいいけれども、もっと効果のあるものをまた。

**平井：**この中に、白い紙で「人を求めます」と書いたらどう？　今、伊津さんの言うプログラムみたいなことで、可能な方は協力ください、連絡場所。連絡場所も、これがまた大変だね。

**司会：**だから、そういうプログラムに協力する人はメールとかそういうのでいいから、全然問題ないのですよ。ただ、問題は、そういうのを使っていない人がどうやってコンタクトするかというと、やはり観望会をやりますとか、あるいは植物に興味のある人に来てもらおうと思うと、植物の観察会をやりますとかいう、実際のイベントというのはやる必要があるかなと思いますね。

だから、そのときに、例えば野鳥の観察というのを、時々、野鳥の更新がされないという文句はあるのです。更新がされないけれども、ではそれについて誰か、どうなっているかという質問とか意見は来るかというと来ない。そうしたら、やはり、それは日本野鳥の会か何かの、宗像支部か福岡支部とコンタクトを取って、野鳥観察会をするしかないですものね。だから、そういうことで言うと、現実に何かをするためには、今までのパソコンでチャカチャカとやっていればいいよという、私の好きな道だけでは駄目だということですね。

**平井：**それは、「水くみ」でもそうなんだからね。写真だけでやっていればいいのだけど、やはり実際に観望会やって、直接に１人でも２人でも、方々のご意見を頂いていくというのは、やはりモチベーションが出るわけです。あるいは、テレビでもそういう絵を作るということで苦労しているわけだから。

**司会：**そうすると、その発掘ですね。私は、ではお米作りの一から十までというのはやってもいいかなと思う。でも、鳥の観察はうち

の庭から見える鳥だけでいいやということなので、そうすると、鳥のことについて、チョウチョは出てきたけれども、植物について、ほかの昆虫についてというのをどうやっていくか。これは、大学に投げても絶対広がらないし、難しいところですね。

**平松：**これから発見していく１つに、「北斗の水くみ」の観察とか、そういう技術的、そして、普通の市民にＰＲするというのを、平井先生が北九州で「星のソムリエ」をされておりますけれども、そういったものを「北斗の水くみ」でも、実際にそういう人がこれから出てくると、10 年 20 年、それくらいにできると思うのですね。まず、育てないと発展しないので、それをぜひ平井先生、育てて……

**司会：**だから、今度、平井さんにそこまでを要求したら難しいけれども、この郷土文化学習何とか館という、ここに、歴史と遺跡だけではなくて北斗の認識を持ってもらうということは、とても大事だと思うのです。だから、ここのボランティアの人たちが、それしか対応できないのだったら、別の層の……

**平井：**あれは望遠鏡がいるのですよ。北九州の場合、望遠鏡も準備して買ってもらって、しばらくしてセットができたのです。ここでやるのだったら、そういうまず施設がないとできないのですね。だから、その辺がちょっと難しい。そうすれば、別に幾らでもできるのですけれどね。あまり今、福岡の……

**司会：**はい。話も長いのですけれど、突然ではありますけれども、まあそういうふうに。ちょっと難しいことは別として、将来展望について話していただきました。では、ここでひと区切りつけたいと思います。

# 座談会

## 「北斗の水くみ」写真展を中心に

インタビュー

## 職業としてテープ起こしを解き明かす

### Work-Group Contrail 代表 中野寿子さんに聞く

http://w-contrail.net/

出席者：

石黒正紀、平井正則、平松秋子、堀内伸太郎、宮川幹平、伊津信之介（順不同・敬称略）

**司会：**これから「Contrail ひこうき雲」という団体でテープ起こしをされていて、むなかた電子博物館の座談会のテープもテキスト化していただいた中野寿子さんに、その方法を伺いたいと思います。具体的に、今、テープ起こしを、どういう形でされているのですか。

**中野：**現在、メンバーは 30 名近くいて、実働 10 名くらいで動いているのですけれども、メーリングリストというのを持っていて、音声を送っていただいたら、そこにこういう作業がありますので、何月何日までに作業してくださいと募集をかけるのです。そうすると、「私、30 分できます」「60 分できます」と手が挙がってきますので、その方の希望に応じた時間数に分けて、みんなに作業してもらうのです。戻ってきたら、私が最初から最後まで全部聞き直しをして、納品をするという流れで作業をしております。

**司会：**全く誤解しておりました。どういうふうに誤解をしていたかというと、宗像でやっていると聞いたので、中野さん１人でやっていて、大して人数はいないだろうと。すごいタイピングの速い人だなと思っていたのですけれども、10 人に分かれたら 100 分でも 10 分に、長くても 30 分ですね。

**中野：**大体１本の案件を、３人か４人くらいでします。２時間だったら多くて４人、少ないときは２人くらいで作業してしまいます。

**司会：**そうすると、今、コンピューターのプログラムなんかも、オープンソースという誰もが参加できるものだと、みんな手分けをして、少ない量で仕事するというのは。

**中野：**ただ、テープ起こしでも何でもそうですけれど、セキュリティとか、守秘義務が発生しますので、データのやり取りは、サーバーを使って、誰もがアクセスできないようにパスワードを設定してセキュリティをかけています。あと、頂いた音声は、納品したらすぐ消去という、その辺の守秘義務契約書というのをきちんと結んでやっています。

**司会：**中野さんたちは、もともとそういう仕事をずっとされている集団なのですか。

**中野：**いえ、私は、もともと医療事務で病院で働いていたのですけれども、何か自分で手に職を付けたいというのと、パソコンが好きだったので、それで何かできないかなとずっと思っていたのです。15 年くらい前ですが、テープ起こしという仕事がありますよというのを聞いて、いろいろ講習を受けたり、勉強会に参加したりしました。でも、通信教育の勉強というのは、実際には役に立たないのです。自分たちで営業しようとか、何かしようとしたとき、全然、そういう細かなところは教えてくれないので、テープ起こしオンライン講座で、実践でのテープ起こしのやり方や営業の仕方、ホームページの作り方、名刺の作り方、あいさつの仕方など全部教えてもらって、やっと、この「ひこうき雲」というのをやろうという形で、自分１人で最初は立ち上げたのです。

でも、１人では、結局、クライアントは不安なのですね。ネットで、私１人でやっていますと、ホームページを立ち上げても、どこの者かも分からないので、全然仕事が来ないのです。せいぜい１カ月に１本来ればいいほうでした。

ちょうどそのころ、宗像市が SOHO というのをバックアップし始めて、第１期生の面接があったのですね。そして、宗像 SOHO の第１期生として、宗像市の仕事をさせていただいていたのです。

同時期に、何かいい方法、クライアントが喜ぶ方法は何だろうか、クライアントが一番不安なのは何だろうか、それを解消するにはどうしたらいいのだろうかということで、グループというのを考えたのです。大量案件でも、１人が病気になっても、メンバーの誰かが作業ができるから穴を開けることもないし、１人だったら不安だけど、グループですると クライアントはきっと安心もするのではないかなというので、４月に、一緒に勉強した仲間に声をかけて、３人でまず初めに立ち上げました。ホームページも自分たちで作って立ち

上げたら、すぐに大量にどんと来たのです。「ええ！」と、本当にそのときは個人でやることと、みんなでやることの、この違いの大きさというのをつくづく感じました。

それから、どんどん毎年毎年、案件が多くなって、会社のほうからも依頼が来るようになって、おかげさまで、今はもう本当に忙しい毎日ですね。

**司会：**そのオンライン講座というのは有料のものですか。

**中野：**もちろん、どのくらいだったか覚えていないのですけれども、それほど高くはなかったですね。すごく安くて、１万円前後だったと思います。

**司会：**そのオンライン講座にたどり着いたというのは、誰かの紹介ですか。

**中野：**ネットです。ただひたすらネットで、私は何をしたらいいんだろう、どうにかしたいという、ただその一念ですね。テープ起こしとかで検索をかけていたら、オンライン講座というのを見つけて、ただ、私が見つけたときにはもう１期生募集が終わっていたので、秋から始まる２期生に、すぐ応募しました。

**司会：**ほかの委員で、何か聞いてみたいことありますか。

**宮川：**以前、ソフト的にそういった音声認識して、テキストに起こすようなツールを使ったことがあるのですけれども、もちろん基本的なところは、だいぶ質も上がってきたかなという感じはするのですが、実際、人を入れてテープを起こされると。こういった座談会等をテープ起こされたときに、言葉の中に、いらないというか、テキストに起こすべきかどうか判断を迷うところもあるのではないかと思います。そのあたりはどうされているのですか。

**司会：**あのーとか、えーといった「けば」は全部取るようにはしています。また、会議録などは、そのまま起こすと意味が通らない文章になるので、最近は、意味が通るように整理してくださいという依頼が多いです。ただ、インタビューとかは、そのときの雰囲気もあるので、そのままでいいですと言われることはあります。

**宮川：**グループでされるときも、素起こしの状態ではなく意味を通すようにと言われたら、それぞれの担当の方が、そういうふうに起こして戻されるということですか。

**中野：**一応、ここの会議はこういう起こし方をしてくださいという指示をしますが、統一をさせないとおかしいので、最後に私が全体を通して統一させています。

**平井：**会社ですか。

**中野：**今は個人事業主という形で登録しています。

**平井：**ある程度、グループの方々にペイしている。

**中野：**そうですね。あと、みんな宗像ではないので、営業的なことは全部私がやっています。近くにいる人といったら５、６人です。あとは県外で、遠い所では東京の人もいます。

**石黒：**競合している会社、ソフト会社みたいなもあるのですよね。

**中野：**すごく多いですね。

**司会：**すごく多いですよね。むなかた電子博物館のテープ起こしを、ネットで検索したら、だっと大手が上から出てくるんです。そこに最初頼んだのです。それで今回、中野さんにたどり着いたのは、宗像 SOHO の上野さんから、宗像にもちゃんとそういう人がいるよというので紹介してもらったのです。ですから、ネットだけでたどり着くのと、そうじゃないルートというのもあるなというのは思いました。

**石黒：**仕事はたくさんということは、需要が非常に多いということになるのですか。

**中野：**そうですね。先ほど言われていたように、音声認識が普及してくると仕事がなくなるのではないかとよく言われたのですけれども、そうでもないみたいで、結構、多いですね。要約してくれというのも結構出ています。

**司会：**多分、今まで編集と言っていた、文章として読めるようにするリライトまでされているのですよね。会議をやっても、記録を取る人がきちんとしていれば、記録はきちんと残るけれども、そうではない人がした場合には、会議の記録というのはあまり残らないから、結局、テープ起こしをして、それで速度が速ければ、３日そこらで出てくれば、自分の企業内で会議録を作るよりも、よっぽど早いですよね。

**中野：**そうですね。翌日納品というのをうたっていると、結構、市町村関係でもそういうニーズが多いですね。依頼があれば録音にも行っているのですけれど、話者をメモして帰って、みんなに当日か翌朝までに起こしてもらって、私が聞き直しして、朝一とか午前中に納品すると喜んでいただけるのです。でも、私たちは大変ですけれどね。

**平松：**自分の専門分野ではない会議ですよね。歴史の会議などを録音したものを、テープ起こしをする場合に、知識が無くて、その会話の中だけで聞き取って文字にする。これは大変難しいと思うのです。そういうときには、どういうことに気を付けていらっしゃるのですか。

**中野：**まず、そういう専門的なテープ起こしをするときは、できれば資料を多めにくださいとお願いします。でも、質疑応答になると、その資料に載っていない言葉が結構出てくるのです。人は、聞いたことのある言葉はすっと耳に入ってくるのですけれども、聞いたことのない言葉に対しては何度聞いても聞き取れないのです。音声はつながっているので、人の話の中で切り方を間違ったら、全然違う聞こえ方になってしまうのです。

今のプレーヤーは、音の速度を変えてもちゃんと普通の声で聞こえるのです。速くして聞くと、いらない音が消えて聞こえてくることがありますし、遅くして聞くと、言葉の一つ一つが聞こえてくるのですね。そうすると、その中からヒントが出てきますので、あとはそこから連想しながら、関連する言葉を入れてネットで検索します。それでもどうしても分からないときは、括弧して不明で、その時間を入れて、申し訳ございません、調べましても分かりませんでしたということで、納品させてもらっています。

**司会：**謎が解けました。聞いていて、ほとんど音と同じ速度で入力できるすごい人たちがやっているのかなと思ったのですけれども、速度は速いのでしょう。

**中野：**打つ速度は、みんな結構速いと思いますけれども、私たちが使っているテープ起こし用のプレーヤーは手でストップと再生ができるのです。そして、ストップしたときに、何秒か前に戻るというリピート機能が付いていて、前の音とのつながりを確認しながら次を起こすことができるプレーヤーを、テープ起こしをする人たちのために無料で作ってくれている人がいて、そういうのが幾つかあるのです。

**司会：**それは、ソフトウエアとしてのプレーヤーですか。

**中野：**はい、そうです。

**司会：**コンピューター上でテープも聞いて、入力もするということですか。

**中野：**はい、そうです。それで、だいぶスピードも速くなりますし、足でスタートとかストップを操作するのもあるので、今はもう、テープ起こしをするには、すごくやりやすい環境にあると思います。

**平井：**商売というか、競争するわけですよね。お宅のメリットというのはどこにあるのですか。

**中野：**そうですね……クライアント様のご要望に応じた納品原稿を納める。それをするために、みんなで一生懸命聞き直しをしています。何て言ったらいいのですか、精度の高い、喜んでもらえるような原稿を納める。それと、決められた納期にきちんと納品する。

**石黒：**安いからとか。

**中野：**いえ、そんなに安くはしていません。私がテープ起こしを勉強したときに、仕事を取りたいからといって単価を下げる。それはやめるべきだと。自分たちのプライドをしっかり持って、単価を 200 円なら 200 円と決めたのだったら、それに見合う納品原稿にするべきだとオンライン講座で習ったのです。私もそれを 15 年間守ってやっています。

確かに今、１分単価 60 円とか 70 円という所や 140 円という所もあります。もう本当にさまざまですけれども、質を伴って納品させていただいていると、私は思っています。

**石黒：**会社と民間とどちらが多いですか。

**中野：**どうでしょう。会社が結構多いと思います。個人事業主でやっている人はいますけれども、ほとんどがどこかに入ってやっていたりするのです。自分で営業に走っていってということは、あまりされていないと思います。

**石黒：**質ということは、単純にＡとＢを比べて、これがいいですよではなくて、ユーザーに対して質的に保障するということだろうから、一概には、質といってもいろいろあるのでしょうけれども。

**中野：**リピートがあるということが、満足していただいたのかなと。リピートがないときは、何か私たちに悪いところがあったというか、満足していただけなかったと。

**石黒：**お金が無いからこなかったということも、それも踏まえて。

**中野：**それは分からないですけれども、大体、リピートしていただいたというときは、喜んでいただいたんだなと思っています。リピートがないときは、どこが悪かったのだろうかなということで、ちょっと勉強しなきゃねとなります。

クライアント様のほうから、いろいろな注文をつけてくださることもあります。それが私たちのレベルアップの……

**石黒：**勉強になっているのね。

**中野：**そうですね。こうしてください、ああしてくださいと言っていただくと、すごく勉強になりますし、では、そのためにはどうしたらいいか、私たちも考えますので。

**石黒：**聞いてくれているグループの人たちの研修というか、勉強会というのはされているのですか。

**中野：**忙しい時期はできないのですけれども、この４月、５月、６月というのは、官公庁がまだ動きがないから仕事が減るのです。この時期に、スカイプを使って勉強会をやっています。

**石黒：**すごいな。

**中野：**みんな集まってできればいいのですけれども、遠いし、主婦だったり、昼間仕事をしていて夜、先々、自分に力を付けたいからということで勉強している人もいるからですね。スカイプを使って、参加できるときに勉強するという形でやっています。

**石黒：**代表がやっぱりノウハウを持っているのだな。

**司会：**むなかた電子博物館として、非常に刺激を受けるお話だったと思います。こういう形で、むなかた電子博物館の座談会や、あるいは講演会が紀要の原稿になっていくということが理解できました。

本当に、今日は忙しい中、おいでいただきましてありがとうございました。

**中野：**いえ、呼んでいただきまして、ありがとうございます。

2014 年 4 月 11 日

# 自由の森遊歩道が完成

3 月 29 日午前 10 時から、宗像市自由ヶ丘にある「自由の森遊歩道」で完成を祝う記念式典が行われました。これは自由の森遊歩道を守る会が主催し、地域住民や、宗像市長をはじめ多数来賓が参列しました。

市長による横断幕の除幕式の後、安全祈願が行われ、続いて記念植樹、その後、三々五々完成した遊歩道を歩きました。桜も満開の日でしたが、あいにくの小雨模様の中、歩き終えた参加者には手作りのぜんざいがふるまわれました。

自由ヶ丘 11 丁目登り口に近い 11 号公園の桜

**自由の森遊歩道とは**

自由ヶ丘地区コミュニティの創立 10 周年に合わせて、ボランティアを募り作られた手作りの遊歩道。最高標高は 95 メートル。

2010 年に自由ヶ丘小学校側から自由ヶ丘 11 丁目側まで 1.1 キロメートルが開通。今年度は自由ヶ丘 11 丁目側から南口までの新道 400 メートルを整備した。これは、花王の「みんなの森づくり活動」に応募し採用されたもの。山登りの雰囲気も味わうことができる全長 1.5 キロメートルの山道は自然林を生かし、伐採をほとんど行わずに作られた。そのため貴重な植物や、野鳥が見られ森林浴が楽しめる。

自由の森遊歩道を守る会会長の挨拶

## 自由の森遊歩道を守る会

現在 50 名ほどの会員がいる。

会員自らが企画して、コースの整備、展望所の設置、小鳥の巣箱作り、樹木のネームプレートづくりなどを行い、夢のある場所を提供することを目指す。

利用者の安全に気を配っている。バンブー広場を作り竹小屋を設け、体験学習を行う。多くの方に利用していただくことで、世代間交流を行い、歓声の聞こえる空間づくりの場所となることを願っている。

宗像市長による除幕。 花王株式会社と公益財団都市緑化機構から活動助成を受けている。

参加者による記念植樹。自然林をまもるためシイ、カシ、クヌギなど 5 種類の苗木を植えた。

式典が終わり、
新コースを登って行く。

## 案内板

遊歩道を示す黄色の実線がこれまでの道 1.1 ㎞、点線が今年度整備された 400m。全長 1.5mになる。

新コースは竹林の中を歩く。
落ちた竹の葉が積み重なって、「足の裏が気持ちいい」「ジュータンみたい」と歓声が聞こえる。

旧コースとの合流付近では竹林が徐々に樹林に代わっていく。

新コースと旧コースがつながる
自由ヶ丘 11 丁目側入り口での合流地点

11 丁目側出入り口の案内板
旧コース 11 丁目側から自由ヶ丘小学校までをめざす。
歩行者にとってその日の体調がわかる急な階段が 58 段ある。

530mで中間展望所に着く（中間地点）。
眼下に自由ヶ丘の住宅街が広がり許斐山が見える。

記帳台。ノートが入っている。

腰かけてストレッチなどができる丸木のベンチ。

中間展望所からのながめ。自由ヶ丘市街が一望できる。

ここから 90mで第 2 展望所に付く。

第 2 展望所から正面に見える許斐山（271m）

気をつけて歩くと、足元にもめずらしいものがある。

珪化木(けいかぼく)
（樹木が地中に埋没して化石となったもの）

石炭になったものもある。

これらの石炭は、宗像市西北部の丘陵地域に広く分布する今から１億年近く前の古第三紀の地層挟炭層に由来すると思われる。かつて池田周辺および赤間周辺では筑豊炭田と同じ時代の石炭が採掘されていた。（むなかた電子博物館「自然環境調査報告書より引用）

自然との調和を考えて取り付けられた安全柵。

小鳥の巣箱

シダが遊歩道の両側に生えている。

休憩所の傍には７本に枝分かれしたヤマモモの木がある。
木肌は薄茶色をしている。

第一展望所 晴れた日の見晴らしはすばらしい。四塚連山がみえる
左から湯川山ゆがわやま（471 メートル）孔大寺山こだいしやま（499m）金山かなやま（317m）城山じょうやま（369m）

自由ヶ丘小学校からの登り口には案内板や登山者のための杖、ベンチが整備されている。

樹木に覆われた遊歩道を歩きながら、
校内放送や小学生たちの歓声が聞こえてくる。

自由の森遊歩道は気軽に山登りが味わえる散歩コースです。自然林にかこまれて深呼吸をしたり、ストレッチをしたり、座って休憩できる場所もあります。樹木にはネームプレートが付けられ、いろいろな種類の木の名前と実物を観察することができます。

見晴らしもよいので、遠くまで見渡せる景色は四季を通してすばらしく、幼児から高齢者まで手軽に山歩きが味わえる憩いの場所です。

2014 年 5 月 10 日

# 宗像市の花「カノコユリ」その固有種の繁殖

宗像カノコユリ研究会代表 吉田博美

宗像市は日本でも数少ないカノコユリの自生地であることから、カノコユリを市の花としているが、都市化や荒廃等によって このユリの自生地が失われつつある。こうした中、宗像市、九州大学及びむなかた水と緑の会によって、カノコユリの生態調査を行い、ＤＮＡ検査の結果、昔から連綿と生き続けてきた宗像固有種が見つかった。現在、宗像市ではこの宗像固有種の増殖を行なっているが、開花球ができるまでにあと３年待たなければならない。

（2014 年 1 月 15 日 宗像カノコユリ研究会）

## １．概略

カノコユリ（うちだかのこ）

このカノコユリは国内に広く出回っている「うちだかのこ」と呼ばれる品種です。鹿児島県の甑島(コシキジマ)産のカノコユリから選抜された品種で、リンペンや木子で繁殖され国内で広く販売されています。

ユリの花形

日本には１５種類のユリ自生種（原種）が知られています。花形も、色、大きさ、向き等多様です。
（出典：栃の葉書房「ゆりを楽しむ」）

ヤマユリは日本特産の大型のユリで、近畿地方以北の本州の山間部に自生しています。
（出典：栃の葉書房「ゆりを楽しむ」）

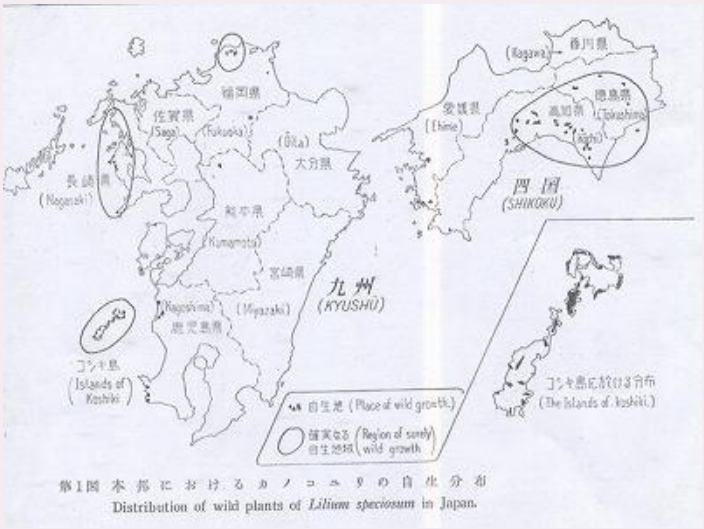
ヤマユリの変種で、ヤマユリよりも花弁が厚く、葉も厚みのある豪華なユリです。
（出典：栃の葉書房「ゆりを楽しむ」）

ヤマユリ

サクユリ

日本における主なユリの自生地を示したもので地域性が見られます。
（出典：栃の葉書房「ゆりを楽しむ」）

昭和 28・29 年に農林省九州農業試験場がカノコユリの自生地の調査を行い、自生地の分布状況をしめしたものです。福岡県の北部に示されているのが宗像のカノコユリです。



本邦におけるカノコユリの自生分布

九州農業試験場園芸部が 1953 年に行なった 現地調査の報告書には、『福岡県では遠賀郡岡垣村と、宗像郡河東村の境界付近の山地にあり、共に段畑の斜面に多いが、その範囲が広く同地方の人の話による と、以前から栽培はなく、現在山林となっている所は以前原野で、多数のカノコユリが自生し、百合野の地名が残っていること、また筆者等河東村と岡垣村をつ なぐ地蔵峠付近の人里離れた原野に自生株を見出したこと等から、確実な自生地と断定した。』と記述されている。

## ２．宗像の自生地

宗像市内の自生地を確かめるため、現地調査を行った時のものです。家屋の裏の東向きの斜面にカノコユリが広がっています。

山の斜面に自生するカノコユリ

道路脇の土手に咲くカノコユリで、100mくらいにわたって広がっています。

道路脇の土手に咲くカノコユリ（東向き斜面）

お不動様の社の前の傾斜地に広がっているもので、右下ツツジの株元に植えられたものの種が飛び散り斜面の植えの方に広がっています。

自然増殖しているカノコユリ

ここは濃い赤のカノコユリばかりで花色に変異は見られません。

濃い色のカノコユリ

孟宗竹林の中に咲くカノコユリで、草刈りを際に株を残してから広がっています。

朝方だけ陽が差す水はけの良い場所に
自生するカノコユリ

カノコユリ自生地の環境

1. 東向きの斜面上部で、雑木が茂り、午後の 日照をさえぎっている。
2. 粘土分の多い土壌で水持ちが良く、傾斜地で排水が良いところ。
3. 家の裏側の斜面や山裾の農道等の横の傾斜地で、時々草刈りが行われている。
4. ツツジ等の小灌木や１m以下の雑草が生え、地際に直射光線が当たらないところ

## ３．カノコユリの球根繁殖

生育中の球根の形
（出典：栃の葉書房「ゆりを楽しむ」）

自生状態のユリを掘ったもので、分球し、木子が着生しています。ユリは球根の上に根が出ており、この根が肥料を吸収し球根が太ります。

生育中の球根(2011 年 11 月 26 日)

プランターで作る場合は、出来るだけ深さの深いものを使用し、根が十分に張れる深さを確保して植えます。

10 月に球根の植え付け（プランターに５球）

深さは、球根の高さの２倍ぐらいの深さにうえ、上根が十分に張れる深さを確保して植えます。

植え付けは球根の２倍位の深さ

用土を入れた後に両手で軽く押さえ、球根と土をなじませる

最後にパンジー、ビオラを植え堆肥でマルチする。

パンジー等は５月まで咲き続けカノコユリは３月に芽が伸び出す。

## ４．カノコユリの繁殖方法

通常はリンペン繁殖と木子繁殖で増殖しています。自生種の多様性を保存していく場合は、実生の方が適していると言えるでしょう。

| 繁殖方法 | 1年目 | 2年目 | 3年目 | 4年目 | 5年目 | 6年目 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 実生 | 地下発芽 | 1葉出芽 | 広葉出芽 | 茎立ち | 開花始め | 数輪開花 |
| 実生（高温処理） | 1葉出芽 | 広葉出芽 | 茎立ち | 開花始め | 数輪開花 | |
| りん片繁殖 | 1葉出芽 | 茎立ち | 開花始め | 数輪開花 | | |
| 木子繁殖 | 茎立ち | 開花始め | 数輪開花 | | | |
| 分球 | 数輪開花 | | | | | |

カノコユリの繁殖方法と開花までを示す表

実生では通常開花まで５年かかりますが、これを短縮する方法として、種子の高温処理技術が知られています。12 月上旬から高温処理（35℃に２週間、25℃に６週間）すると地下発芽し小球が出来るので、これを２月に播種すれば、開花が１年間短縮できます。

### ４－1.分球

通常一つの球根からは一つの芽が出てきますが、二つ出るものを分球といいます。

### ４－2.木子繁殖

球根を深く植えておくと、地中の茎に小球根がたくさんできます。この小球根を木子と称し、これを外して栽培すると２年目には開花します。

### ４－３．リンペン繁殖

ユリの球根はリンペン（燐片）でできており、外側のリンペンはできて３年目のリンペンです。よく充実したリンペンを球根からはぎ取ります。

リンペンを剥いだ球根（左）とリンペン（右）

### 鱗片差しの様子

このリンペンをボラ土（細粒）に下半分程度を挿します。

## ４－4.実生

11 月に採取した種子と高温処理により
休眠が破れ２月に発芽した種子

種まき後１年経過（2013 年 2 月 15 日）

種まき後２年経過（2014 年 2 月 10 日）

カノコユリの播種から開花までの生育様相

## ５．播種後の管理

【置き場所】

午前中は陽があたるが、午後は日陰になるようなところに置く。さらに、日差しが強くなる夏場には、黒の寒冷紗かダイネットで日覆いをする。

【潅水】

原則は表面が乾いたら水をかける。真夏は天気が良ければ毎日、春秋は乾き具合を見ながら２～３日ごとに。冬はほとんど必要ないが、天気の良い日が続けばかける。

【肥料】

肥料は少なめにやるよう心がけ、やり過ぎないように注意する。１年目は特に必要ないが、葉色が薄い場合は時々液肥をかける。２年目以降は時々液肥をかけるか、油粕を少し施す。

【植え替え】

発芽した秋には植え替えずそのままでもう１年管理する。翌年の秋に掘り上げ、プランターに植えるか、適地に植える。適地は、半日陰で、粘土質だが水はけがよく、地際に直射光線が当たらず、保水に富む所。

## ６．カノコユリ研究会の年間事業

５月：総会、苗管理研修

７月：苗管理研修・自生地見学

９月：苗管理研修・リンペン繁殖等

11 月：苗管理研修・木子繁殖等

２月：苗管理研修・種まき

2014 年 6 月 9 日

# 北斗の水くみを茶の間で体験

福岡県・宗像地域では、世界的にも珍しい「北斗七星が水を汲む」様子を見ることができます。

天文愛好家の間では知られていたこの天体ショーを、もっと身近に、いつでも自由に観察ができるようにと、運営委員会は宗像市内にオフィスを持つ「マージシステム株式会社」の協力を得て撮影システムを作成しました。

これはデジタル・一眼レフカメラをパソコンで制御し、自動的に撮影を行った画像を、ネット回線を使って転送、むなかた電子博物館上から観察できる仕組みです。

北斗七星が写るかどうか実際に撮影して試してみようと、2014 年 5 月 29 日に宗像市内を流れる釣川河口にある「北斗の水くみ海浜公園」で撮影テストを行いました。

事務所屋上に「北斗の水くみ撮影システム」を設置し、調整を繰り返した結果、北斗七星の撮影に成功しました。

この日は深く霞かかっていたのですが、暗くなるにつれて ひとつ ふたつと星が姿を現し始めました。日没から２時間ほど経って天頂付近にカメラのレンズを向けて撮影を始めました。

北斗七星は、柄杓の様な形をした ２等星が６つと３等星が１つで構成される星座す。

肉眼でも見つけやすいこの星座も、レンズに収めようともなれば 中々簡単にはいかないのが天体写真の難しい所です。今回構築を行ったこのシステムでは、その姿をくっきりと見ることができました。天候やタイミング次第では、もっと鮮明に捉える事も可能でしょう。

すっかりと暗くなった夜の９時、システムの試験結果も先ず先ずということで運営委員とマージシステムの社員ともにほっと胸をなでおろし、解散となりました。

今後は、実際にネット回線を使った配信や星空以外での使用についての検討や実地試験を行っていく予定ですのでご期待下さい。

**北斗の水くみ海浜公園**

玄界灘が目前に広がるこの公園は、条件がよければ、あの沖ノ島までも見えてしまうという、絶好の観望ポイントです夏場はたくさんの海水浴客で賑わいます。

北斗の水くみ海浜公園は、釣川河口の海に向って右側にあり、道の駅むなかたから釣川に沿って海に向った所に位置します。駐車場も完備しています。

iinami.com で会員登録すると、北斗の水くみ海浜公園のライブ映像をインターネットで観察できます。

http://www.ii-nami.com/gt-tsurikawa

2014 年 6 月 17 日

# いせきんぐ宗像&宗像高校文化祭ツアー

5 月 31 日午前 10 時より、宗像市主催・いせきんぐ&宗像高校文化祭ツアーが行われました。

「いせきんぐ宗像」とは 2010 年に弥生時代の遺跡として国指定になった、田熊石畑遺跡の愛称です。

この日は高温注意報も出るほどの真夏日、遺跡公園（2015 年度オープン）に集まった参加者は、真っ先に今年 2 月に自分たちで植えたヤマザクラの木のある場所へ行き（ネームプレート付き）、「元気の育っているね」などと声をかけています。中には、クモの巣状の害虫が付いていたり、葉の裏に白い卵を見つけて、丁寧に取り除いていました。

おばあちゃんと孫と二人で参加した方は「おばあちゃんが死んでもぼくがこの木の面倒をみるよ。と言ってくれています」「大切に見守って行きたい」「芝張のイベントから参加しています」との事でした。

この他

- 晴天が続くので水やりに来たいと思う。
- 芝の草取りはこれまでの参加者に全員集合を呼び掛けては?

などの声が聞かれました。

その後「寄り合いどころ」に集まり受付。６０人程の参加者は２班に分かれて、園内を歩きながら遺跡についての説明を聞き、休憩をはさんで、宗像郷土館跡を見学、歩いて宗像高校へ行き四塚会館展示室を見て、宗像高校の文化祭へ参加しました。

寄り合い処で説明を聞き、広い遺跡見学へ

環濠の出入り口、中には貯蔵穴があった。
背景は許斐山。

環濠の周囲は市民の手作りで柵を建てる予定。

環濠の傍には船着き場があった。

遺跡についての案内板はリングで止めたファイルのように手でめくって読める。

竪穴式住居を復元する場所。

中央の広場は分譲してフラワーコンテストを？

弥生時代の青銅製の武器１５本が出土した墓地。お墓は１つ１つ重ならないように整然と並んでいます。翡翠（ひすい）の勾玉や、垂れ飾りなど貴重な副葬品が出土しました。

遺跡の周囲の気象情報を記録する
気象ステーションが設置されています。

郷土館跡地を見学して、宗像高校へ行きました。

校内にある宗像高等女学校門柱。
２本の石柱は校門があった場所から移設された。

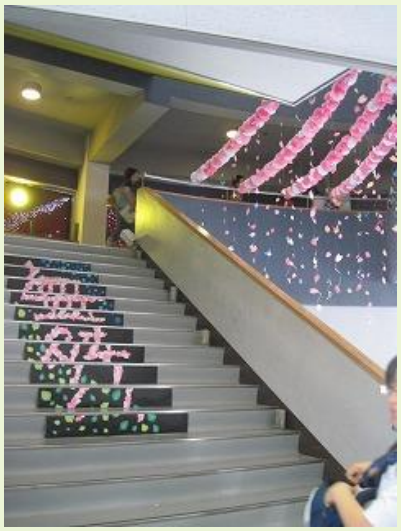
田熊石畑遺跡は女学校の運動場拡張工事の際、国語の教師であった田中幸夫先生によって発見され調査されました。昭和初期、宗像における初めての遺跡発掘調査です。２０１０年、国指定の史跡となりました。

田中先生によって発掘された遺物は、四塚会館３階の展示室で見ることができます。

展示物を見学

２階では世界遺産登録推進室による
DVD「沖ノ島を世界遺産に」を上映

中庭のステージではにぎやかに文化祭のアトラクションがおこなわれています。
宗像高校の今年度のメインテーマは「咲」。それぞれの輝く個性を思う存分発揮し、全校生徒の笑顔がいぱいの文化祭にし、見に来て下さった方を笑顔でいっぱいにして、幸せな気持ちになれる文化祭をつくりあげたい、という気持ちをこめたテーマです。



花弁が舞う。

桜が咲く。

夏の朝、朝顔が咲く。

月夜に散る花弁
（黒い紙を切り取り外の光を利用した月と花弁）

中庭のステージで行われた男子生徒による火起こしコンテスト

校門の近くのテントでは一般の参加者による勾玉づくりと火起こし体験が行なわれました。

文化財職員による火起こし体験

滑石を削って勾玉づくり

田熊石畑遺跡歴史公園は２０１５年 7 月の本オープンに向けて、宗像市と市民（村づくりの会）協働により準備が進められています。

今後の行事予定は次のように計画されています。

| | | |
|---|---|---|
| ２０１４年 | ８月 | 夏休みいせきんぐ宗像体験塾（東郷小学校） |
| | ９月７日 | シンポジューム「邪馬台国とムナカタ国」<br>（ユリックス・ハーモニーホール） |
| | ５月～９月 | 遺構復元整備（宗像市） |
| ２０１５年 | １月～２月 | 木柵づくり（市民参加整備） |

むなかた電子博物館ではこれまでに下記の関連情報を発信しています。
ご覧ください。

新着情報
2014 年 3 月 6 日 「いせきんぐ宗像」植樹祭が行われました
http://d-munahaku.com/news/dtl.jsp?kid=92072&cgid=1002

新着情報
2013 年 7 月 3 日 田熊石畑遺跡歴史公園プレオープンイベント開催しました
http://d-munahaku.com/news/dtl.jsp?kid=91933&cgid=1001][1002

むなかた電子博物館紀要第 5 号
市民と楽しむ「いせきんぐ宗像」の歴史公園づくり 白木 英敏
http://d-munahaku.com/culture/kiyou/j-kiyou_2013.html

むなかた電子博物館運営委員 平松秋子

2014 年 6 月 23 日

# 福永晴帆日本画展

―宗像大社の文化財保存修復にむけて―

海の道むなかた館では、福岡教育大学日本画研究室との共同企画による「福永晴帆(せいはん)日本画展」が開催中です。

大学では、２００７年度に「宗像大社・福岡教育大学の連携覚書」の締結により、儀式殿 御便殿の襖絵(ふすまえ)の研究が始まり、今、6 年間の研究の成果が発表されました。

歴史に埋もれつつある日本画家を再評価し、劣化しつつある作品を守って行くには、大学や、文化財の所有者、それらを取り巻く人々や公機関の協力が必要です。

この展覧会がきっかけとなり、地域の文化財に関心を持ち、守り使えようとする人々の思いが輪になって大きく広がることを願っています。

福永晴帆 略歴

1883（明治 16 年）　山口県厚狭郡に生まれる

1910（明治 43 年）　欧州へ。オックスフォード芸術専門学校などで学ぶ

1934（昭和 9 年）　靖国神社の襖絵を描く（昭和 56 年宗像大社へ移築にされ現在に至る）

1937（昭和 12 年）　仁和寺襖絵完成

1961（昭和 36 年）　鎌倉の自宅で亡くなる。77 歳

展示されている掛け軸は福永晴帆の直筆です。晴帆は独自の世界を表現する姿勢を貫き、一方では古墨や古硯の収集にも努め、漢詩や古典の知識を繁栄した南画もよく書きました。

福岡教育大学日本画研究室による模写も展示されています。
模写とは手本となる書画を模倣して、書き写すこと。また描き写されたものをいいます。

上段（上）　福永晴帆直筆の写真
上段（下）　現状模写（痛んでいる状態を含めて原画の今の状態を忠実に写し取る模写）の写真

下段　再現模写（痛む前の状態について、資料などをもとに再現する模写の方法）

上の写真は宗像大社儀式殿にある「腰障子」で、障子戸の下の部分に使われています。

襖絵〈桜図〉

この襖絵は日本の伝統的な山桜を描いています。
晴帆が 50 代の円熟期に描いたもので、昭和 39 年靖国神社の行在所に納められましたが、昭和 56 年に宗像大社 儀式殿 御便殿(ごびんでん)に移築され現在に至っています。
今回展示されている作品は、最新デジタル技術を駆使して作られ、屏風に仕立てられた

再現文化財（レプリカ）です。今後の文化財保存修復計画や、これからの教育に活用される予定です。

海の道むなかた館常設展示室ではこの他に、砂子技法に使う道具、金箔、日本画に使われる絵の具や和紙、掛け軸などが展示されています。期間は 6 月 29 日までです。

梅雨のひととき、宗像大社の儀式殿にあるという日本画を見ながら、一人の画家を偲び、文化財の保存と修復に御理解をいただければ幸いです。

むなかた電子博物館運営委員 平松秋子

2014 年 8 月 25 日

# 蚕とクワコ展

8 月初旬、海の道むなかた館で、福岡やま繭（まゆ）の会主催による「蚕（かいこ）とクワコ展」が 2 日間に渡り開催されました。

1 日目は九州大学大学院農学研究院・伴野豊先生による、映像を交えて「蚕とクワコのおはなし」がありました。夏休み中で小学生も多く、参加者は熱心に耳を傾けていました。「九州大学農学研究院では世界最多の 800 種を超すカイコを保有して、様々な研究が行われています。 中国では 5000 年以上前に、クワコからカイコへの改造（育種）が行われていたといわれていますが、よくわかっていません。

現在、天然繊維の女王と言われるシルクはカイコから糸をとりますが、小さいクワコの繭からも紡ぐことができます。カイコのはきだす糸よりも強度があって、昔は魚を捕る網にも使われていました。 宗像市江口のクワコを研究の資料として採取しています。

その後行われた体験学習では、群馬県で取れた繭や、九州大学で取れた繭を使って作る「人形風鈴作り」がありました。

2 日目は、生糸から作られた作品の展示と 1 日目と同じく、人形作り体験学習がありました。

人形風鈴づくり

完成した風鈴人形

2 日間を通して

「玄海の自然」と題して、クワコが育つ場所を、映像と話しを交えながら紹介されました。お話は玄海地区コミュニティー運営協議会、広報委員会の花田俊次さんです。

釣川周辺地域を、参加者が自転車に乗って見学しながら訪ねる。というストーリーで、小鳥や白鳥の姿もあり、玄海地域の豊かな自然を感じることができる内容でした。

会場には、特別展示として、「群馬の山のおくりもの」・デザイナー・桂由美先生の「天蚕布ドレス」とブーケがマネキンを使って展示され、ひときわ目を引きました。

「これは、先生のご理解とご協力によるものです。」（松尾代表談）

天蚕布で作られたドレス

刺繍も天蚕の糸で
透かし模様が美しい

天蚕で作られたブーケ

福岡やま繭の会で作られたコサージュ、帽子、ストールなどの作品も展示され、自然から生まれた糸の美しさに参加者は注目していました。

頭髪を守る天蚕絹 100%の帽子

コサージュ

・クワコとは

カイコは、現在では野外には済んでいない昆虫で、「家蚕（かさん）」とも言われています。このカイコの祖先がクワコ（ノガイコとも）であると考えられています。５月初めに生まれ、クワの葉を食べて脱皮を繰り返し、30 日ほどで、繭・サナギになります。成虫は繭をとかして外に出てから、１週間の命です。この間飲まず食わずで産卵し、次の新しい命へ繋ぎます。

・天蚕（てんさん）とは

山のふもと近くに生息する、もう１つの野性のカイコのことです。(学名はヤママユ)

幼虫は緑色でその繭から美しい生糸がとれます。クヌギの葉やドングリの木の葉を食べます。繭は最大で長さは五㎝ほどです。皇室で行われている養蚕も同種のものです。

繊維のダイヤモンドといわれ、希少価値があります。

天蚕の幼虫

天蚕の繭

福岡やま繭の会の代表・松尾サヨ子さんに伺いました。

・この活動の目的は

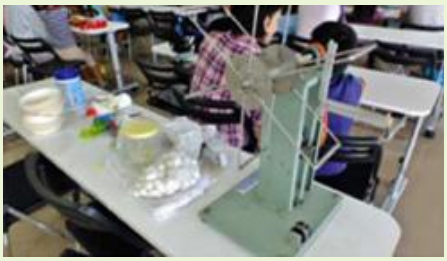
宗像市江口、その他の地域に生息するクワコ（蚕の祖先昆虫）の観察を通して、自然の大切さを次世代に伝えることです。

自然は「食物連鎖」で成り立っています。日光や水、微生物まで含めて一定に調和を保った環境の全体を生態系といいます。どこかがくずれると全体がくずれ、やがては人間のくらしもあやうくなります。そうした環境を、私達はより良い状態で保ち、次の世代へとつなげていきたいと願っています。

2012 年から行ってきたクワコ観察の期間でも、大きく異常高温の記録が表示されました。その中で、少し涼しかった城山のふもとにある、福岡教育大学付近のクワコは生き生きとして、安堵しました。

宗像市江口地区における養蚕の歴史は江戸時代から続いたと推測されますが、その文化は消え、今の自然界にクワの木とクワコが残ったことに感銘を覚えます。この事業は「宗像市人づくりまちづくり事業」として、2012 年より継続して行ない、今年度は３年目となる節目での開催でした。御協力頂いた方々に心よりお礼を申し上げます。

展示場内のカイコの模型



日本のカイコの繭は白い

美しくて大きい群馬県産の天蚕繭

宗像市江口付近「クワコマップ」

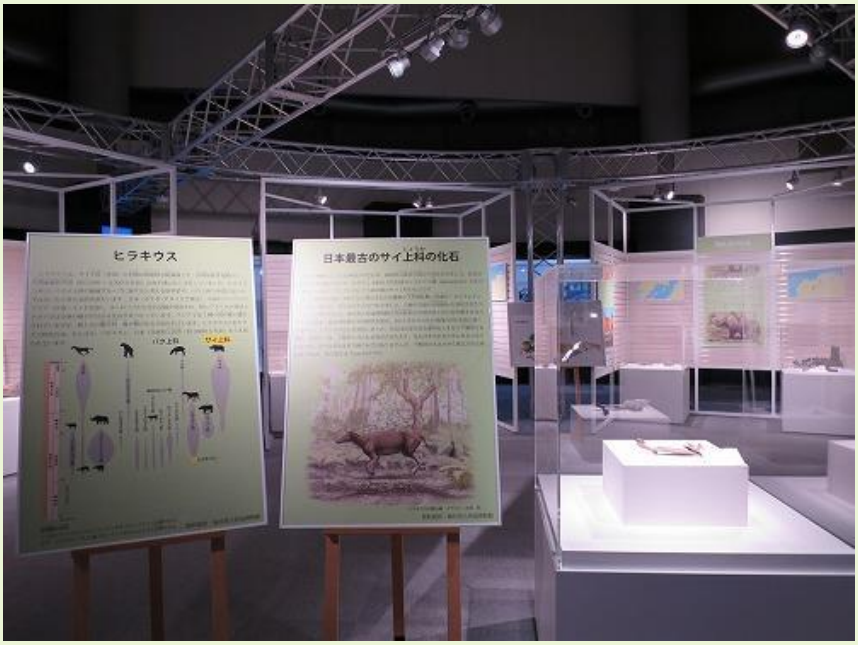
むなかた電子博物館運営委員 平松秋子

2015 年 1 月 19 日

# 海の道むなかた館企画展

# 「ムナカタの化石・4800 万年前のタイムカプセル」

2014 年 12 月 16 日～2015 年 2 月 1 日




2014 年 6 月 23 日に「国内最古（４８００万年前）のサイの仲間「ヒラキウス」の化石福岡宗像市で発見」と報道されました。この化石は宗像市吉留で発見された別の化石（コリフォドン）と共に採集された岩石から発見されたものです。福井県立恐竜博物館によると、サイの仲間の化石としては福岡県嘉麻市で見つかった約 4500 万年前のものが国内最古とされていました。ヒラキウスは、サイやウマ、バクなどひづめを持つ奇蹄類の一種。約 5200 万～4300 万年前に北半球に分布していたが絶滅しました。角はなく、ウマに似た体つきをしていた。このヒラキウスが生息した新生代の化石と地質の概要が海の道むなかた館企画展「ムナカタの化石・4800 万年前のタイムカプセル」として２月１日まで開催されています。

ヒラキウスの下顎骨
（左歯骨と右歯骨前方部と棒状の肋骨の一部）

この化石は1992年に市内吉留の大焼層から採集された岩石を、福井県立恐竜博物館と北九州市立市自然史・歴史博物館の研究員の作業中に2011年に発見されました。

ヒラキウスは恐竜が絶滅した6500万年より後の4800万年前の哺乳類の化石です。この時期になると、ほとんどの現生哺乳類の祖先が誕生しました。

岩石を採集してから19年の時を経て発見されたものです。これらまだ研究途中であるとのことで、時間をかけて見守って行きたいものです。

コリフォドンの復元図と、天草市立御所浦白亜紀資料館所蔵のコリフォドンの歯の化石

もうひとつの展示のトピックは、大型草食獣コリフォドンの化石です。ヒラキウスと同じく、1992年に同じ場所から大型草食獣コリホドン科の化石が発見されました。日本最古の大型草食哺乳類とされています。サイやカバ程の大きさで、体重は300キログラム、体長は2から2.5メートル、大きな犬歯を持っているのが特徴です。約3800万年前には絶滅したとされ、宗像市のほか熊本県天草市でも化石が発見されています。

左は会場に展示された地層モデルです。海の道むなかた館の岡崇さんが、今から２６年前の高校生の時製作したものです。岡さんは「地層モデルは、福岡県から山口県にかけて発見された化石を含む地層を、古い順に重ねたもので、実物の化石をたくさん使っています。この地層モデルから宗像市から出土したヒラキウス、コリフォドンは、津屋崎層から出土する植物化石と同時期であることを読み取ることができます。化石から、そのものが生きていた時代を知り、その産地を知ることで、地球規模の壮大な歴史を一目で観察することができます。」と言っています。

地元のＡさん「あまりにも遠い話で実感がわかないが、動物たちが住んでいたということはその頃、よい環境であった場所であろう。現在そのような場所に暮らしているということは喜ばしいことです。」

地元のＢさん「1 億年くらい前の海底火山の噴火で湯川山などの宗像四ツ塚が作られたと言われている。その後数千万年の間に宗像地域が海から陸になっていたと言うのが岡さんの地層モデルで理解できた。」

館内では、化石発見体験学習が行われました。

「ムナカタの化石展」に合わせて、栃木県那須高原にある「木の葉化石園」から、木の葉の化石が入っている石を取り寄せたものです。節理（割れ目）にそって金づちで割ります。節理の近くを軽く金づちでコンコンとたたきます。重い金づちを連続して振り上げる動作は、子どもたちには難しく、根気のいる仕事です。無事に割れて化石を見つけたら「自分でやれたよ」と、笑顔で付添のお父さんに報告。その後、化石図鑑で名前を調べました。「難しかった！」という感想や、「腕が疲れた」という声が聞こえました。

展示場内には、津屋崎海岸の木の葉の化石、芦屋海岸の貝類の化石、小倉北区藍島で発見された「飛べない鳥・プロトテルム」などの化石が見学できます。どうぞ、日本最古といわれる化石を見学にお出かけください。

海の道むなかた館企画展
「ムナカタの化石・4800 万年前のタイムカプセル」
会期：2014 年 12 月 16 日?2015 年 2 月 1 日（月曜休館）
会館時間：午前９時～午後６時
会場：海の道むなかた館（郷土文化学習交流館
入場：無料

(むなかた電子博物館運営委員 伊津 信之介監修、平松秋子執筆)

2015 年 3 月 2 日

# 赤間宿まつりが行われました。

2 月 22 日、赤間地区コミュニティ運営協議会主催による「赤間宿まつり」が行われました。江戸時代に参勤交代の宿場町であった赤間宿が会場です。

街道沿いの古い民家が開放されて、さげもんや雛飾りなどがあり、3 月のひな祭りを待ちわびる華やかな雰囲気が漂い、出光佐三生家では小学生による歴史ガイドもありました。小学生ガイドはこの他石松、萩尾邸でも行われています。また、赤間保育園、福岡教育大学、赤間小学校など 7 団体によるイベントも開催されました。

昨年（2014 年）11 月に開館した街道の駅「赤あか馬ま館」では唐津街道に関する展示や、物品の販売がおこなわれて、雨模様にもかかわらず大勢の人々でにぎわいました。

街道の駅 赤馬館

赤馬館入口

館内の和服の展示

商家で使われたそろばんと天秤計り

お雛様の展示

花嫁行列の練り歩きも行われました。宗像市長は黒田藩の殿さま姿に仮装して、本物の花嫁、花婿 とともに須賀神社まで行進しました。沿道からは「おめでとうございます」と祝福の声が拍手とともに 飛び交っていました。その後、街道脇にある須賀神社で神前結婚式が始まりました。

家老を先頭に練り歩く花嫁行列

梅の花が満開の法然寺の前を通り

須賀神社へ

拝殿で行われた結婚の儀式

前日 21 日から 2 日間、古くからある醸造元で酒蔵開きがあり、しぼりたての新酒の試飲や酒まん じゅうを買い求める人々が入れ替わり立ち替わり訪れていました。

唐津街道をのんびりと散策して、まつりを楽しむ人々で終日にぎわいました。

酒造元の酒蔵開放には大勢の人々が列を作っていた

試飲の猪口

この赤間宿まつりは 30 年ほど前から酒蔵開きに合わせて赤間地区で行われてきました。今年、沿道に出店した店はおよそ 50 店舗、2 日間に訪れた人はおよそ 3 万人ということです。

街道を見物しながらそぞろ歩く人々

街道の駅 赤馬館の 3 月の展示は、郷土の生んだ画家、中村研一・琢二に関する催しが開催されま す。

※お問い合わせ
街道の駅 赤馬館 電話 0940―35―4128

# 編 集 後 記

むなかた電子博物館 紀要委員会
編集長 宮川 幹平

むなかた電子博物館紀要第 6 号は難産であった。

「電子博物館によるディジタル紀要」と名乗って恥ずかしくないように、引用情報や電子博物館内の当該記事、外部サイトへのリンクをはじめ、音声・動画情報の組み込み、レイアウトの再構成、さらには電子書籍化など、アイデアこそ数多く浮かびはしたものの、いまここでそのすべてを実現するには、編集部の準備が不足していることを認めざるを得なかった。この編集活動の遅れに起因し、結果として、いくつかの論文・記事の掲載見送りや、公開直前になっての構成変更など、最後まで多くの方にご迷惑をおかけすることとなってしまった。大きな反省点である。今後は、論文や記事をご投稿頂く皆様ともよく議論・相談し、単に目新しいからではなく、ディジタル紀要として有益な機能とは何なのかをよく考え、漸進的に改善していきたいと考えている。事実、今号も、劇的とはいかないまでも、前号よりも着実に進化・成長している点があると自負している。

なお、本来第 6 号に掲載する予定であったいくつかの記事については、新たな視点による記事を加え、第 7 号にて特集を組むことを計画している。是非ご注目頂きたい。

最後に、本紀要に論文や研究資料をご投稿頂いた方々、インタビューに快く応じて頂いた「Work Group ひこうき雲」代表の中村寿子様、そして、MIS 九州株式会社 西様をはじめとした、本紀要の編集や発行に関わって下さった全ての方々に深く感謝申し上げる。